奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成13年度

2004

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

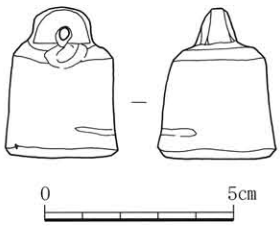
平成13年度

2004

奈良市教育委員会

口絵1　土坑出土の弥生土器・木製品（大森町出土）

平城京跡（左京五条四坊八・九・十坪）の調査　第459-1・-2・-3・-4次
（本文7～16頁）



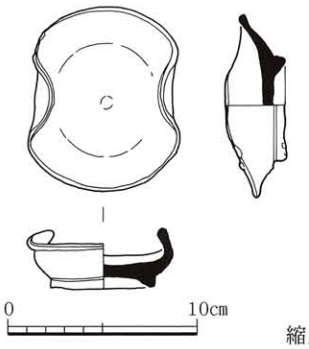
縮尺1/2

口絵4　「分銅」形土製品（平城京跡出土）

平城京跡（右京二条三坊十五坪）の調査　第460次
（本文68～73頁）

棹秤の錘（分銅）に似た釣鐘形の土製品である。銀灰色に焼き上げられ、瓦器のような質感をもっている。表面は磨かれ、光沢がある。鈕や底部周縁は削って整形されている。重さは36.43ｇで、当時の1両に近いが、素焼きであることを考えると実際に分銅として用いられたかどうかは疑問が残る。奈良時代の遺構の上に重なる小土坑から出土しており、時期は平安時代以降のものである可能性があるが、詳細は不明。

高さ3.95㎝、最大径3.05㎝。



縮尺1/4

口絵5　耳 皿　（平城京跡出土）

平城京跡（右京二条三坊十五坪）の調査　第460次
（本文68～73頁）

緑釉陶器の耳皿である。円形にロクロ成形した後、相対する二ヶ所を内側に折り返して作る。高台は、貼り付け高台で、断面は端部に丸みをもつ三角形状を呈する。内外面全体に釉が掛るが底部内面は本来無釉であったところに焼成によって釉が流れ込んだものと考えられる。柱穴から出土。10世紀後半頃のものと考えられる。調整技法および高台や釉調の特徴から、近江産の可能性が高い。

最大径9.8㎝、高さ3.2㎝、口縁部厚さ0.3㎝。

口絵6　三彩陶器（奈良三彩）蓋

（平城京跡出土）

油坂遺跡・平城京跡（左京三条四坊十三坪・東四坊大路）
の調査　第461・465・479次
（本文53～64頁）

口絵7　墨書土器「普光通」（平城京跡出土）

油坂遺跡・平城京跡（左京三条四坊十三坪・東四坊大路）
の調査　第461・465・479次
（本文53～64頁）

口絵8　柱の礎板に利用されていた磚
（平城京跡出土）

油坂遺跡・平城京跡（左京三条四坊十三坪・東四坊大路）
の調査　第461・465・479次
（本文53～64頁）

はじめに

奈良市教育委員会は、市民の皆様の文化財保護に対するご理解とご協力のもとに、毎年、平城京跡を中心に発掘調査を実施しています。

また、史跡大安寺旧境内においては、平成10年度から「史跡大安寺旧境内保存整備事業」をすすめており、平成13年度からは「塔院地区」の発掘調査を実施しております。今後、発掘調査成果を活かした、保存整備を行っていきたいと思います。

本書は、平成13年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査の成果の概要をまとめたものです。多くの皆様に御活用いただき、奈良市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の作成にあたって御指導、御協力くださった関係機関の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成17年　3月

奈良市教育委員会
教育長　**中尾勝二**

例　言

1　本書は、平成13年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめたものである。平成13年度に実施した調査のうち、奈良町遺跡第2次調査については、平成12年度の概報に収録している。水間遺跡第4次調査（試掘調査）、杣ノ川イモタ遺跡第1・2次調査については、後日、別冊により報告する予定である。また、平成14年度に実施した平城京跡第479次調査を本書に収録した。

2　本書作成時（平成15年度）の体制については下記の通りである。なお、各調査の現地担当者は発掘調査一覧表に示した。

社会教育部　文化財課　課　長　前原武嗣
　　主　幹　森川倫秀
埋蔵文化財調査センター　所長　高谷明男
　庶務係　係長　北尾秀次　事務吏員　山形和広
　調査第一係　係長　西崎卓哉　主任　立石堅志
　　技術吏員　鐘方正樹　松浦五輪美　安井宣也　秋山成人　宮崎正裕
　　久保清子　原田憲二郎　山前智敬　大窪淳司　池田富貴子
　調査第二係　係長　篠原豊一　主任　三好美穂
　　技術吏員　森下浩行　池田裕英　中島和彦　武田和哉　久保邦江　原田香織

3　発掘調査と本書の作成にあたっては、奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議委員会、龍野市教育委員会等関係諸機関から御指導と御教示を賜わった。また、土地所有者等からの多大な協力をいただいた。記して感謝いたします。

4　各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数である。本書で使用した遺跡名の略号は次の通りである。なお、平城京跡については、遺跡の略号を省略した場合がある。

平城京跡-HJ　平城京東市跡推定地-TI　大安寺旧境内-DA　元興寺旧境内-GG　水間遺跡-MM
東紀寺遺跡-HK　杣ノ川イモタ遺跡-SI　窪之庄北浦遺跡-QK　奈良町遺跡-NR

5　本書の作成は、埋蔵文化財調査センター職員が分担して行ない、文末に文責を示した。

6　本書で使用した遺構等の番号は、一部を除いて、調査ごとに付した仮番号である。遺構の番号の前には、SA（築地・塀）、SB（建物）、SD（溝・濠・溝状遺構・暗渠）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土坑・穴）、SX（その他）の記号を付した。遺構平面図に示す遺構記号・番号の位置は、原則として、遺構の中央、あるいは右下とした。また、遺構の大きさの表記は、すべて遺構検出面での計測値である。

7　本書で使用した奈良時代の遺物の名称・形式・型式は、一部を除いて、以下の刊行物等に準拠した。
軒瓦：『平城京藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会、1996年。
土器：『平城宮発掘調査報告書XI』奈良国立文化財研究所、1982年。

8　引用文献のうち、奈良市教育委員会、奈良県教育委員会、奈良（国立）文化財研究所発行の概報・年報については、調査機関名（それぞれ市、県、国と表示）、調査記号と報告年度のみを本文中に記した。なお、市の調査については、機関名を省略したものがある。

9　発掘区位置図については奈良市発行の1/2,500及び1/10,000大和都市計画図を、調査地位置図については国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。

10　本文及び図中に記した位置・方位の表示は、法改正（2002年4月1日）前の平面直角座標系VIによる。

11　本書の編集は、森下浩行が担当し、三好美穂（平成16年度　調査第二係　係長）・立石堅志（同　調査第一係　係長）が校閲した。

本 文 目 次

Ⅰ　平城京跡の調査

1　平城京跡（左京五条四坊）の調査　JR奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査 …… 1

(1)　平城京跡（左京五条四坊二坪）の調査　第468-3次

(2)　平城京跡（左京五条四坊七坪）の調査　第468-1・-2次

(3)　平城京跡（左京五条四坊八・九・十坪）の調査　第459-1・-2・-3・-4次

(4)　平城京跡（左京五条四坊十六坪）の調査　第468-4次

2　三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊）の調査　JR奈良駅周辺土地区画整理事業に係る発掘調査 …… 29

(1)　三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）の調査　第462-1・-2・-3、464次

(2)　平城京跡（左京四条五坊五坪）の調査　第462-4次

3　平城京跡（左京四条五坊五坪）の調査　第467・470次 …… 47

4　油坂遺跡・平城京跡（左京三条四坊十二坪・東四坊大路）の調査　第461・465・479次 … 53

5　平城京跡（左京三条三坊三・六坪）の調査　第466・475次 …… 65

6　平城京跡（右京二条三坊十五坪）の調査　第460次 …… 68

7　平城京跡（右京二条二坊七坪）の調査　第473次 …… 74

8　平城京跡（左京五条五坊八坪）の調査　第472次 …… 78

9　平城京跡（左京五条七坊六坪）・奈良町遺跡の調査　第469次 …… 80

10　平城京跡（右京五条四坊五坪）の調査　第471次 …… 82

11　平城京跡（西三坊大路）の調査　第463次 …… 84

12　平城京跡（右京六条四坊二・七坪）の調査　第474次 …… 86

Ⅱ　平城京東市跡推定地の調査

1　平城京東市跡推定地（左京八条三坊十二坪・東三坊坊間大路）の調査　第27・28次 …… 87

2　平城京東市跡推定地（左京八条三坊六坪）の調査　第29次 …… 103

Ⅲ　史跡大安寺旧境内の調査

1　史跡大安寺旧境内（西塔跡）の調査　第94次 …… 110

2　史跡大安寺旧境内（大衆院跡推定地）の調査　第93次 …… 115

3　史跡大安寺旧境内（賤院跡推定地）の調査　第95次 …… 116

Ⅳ　その他の調査

1　東紀寺遺跡の調査　第5次 …… 117

2　元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査　第55次 …… 120

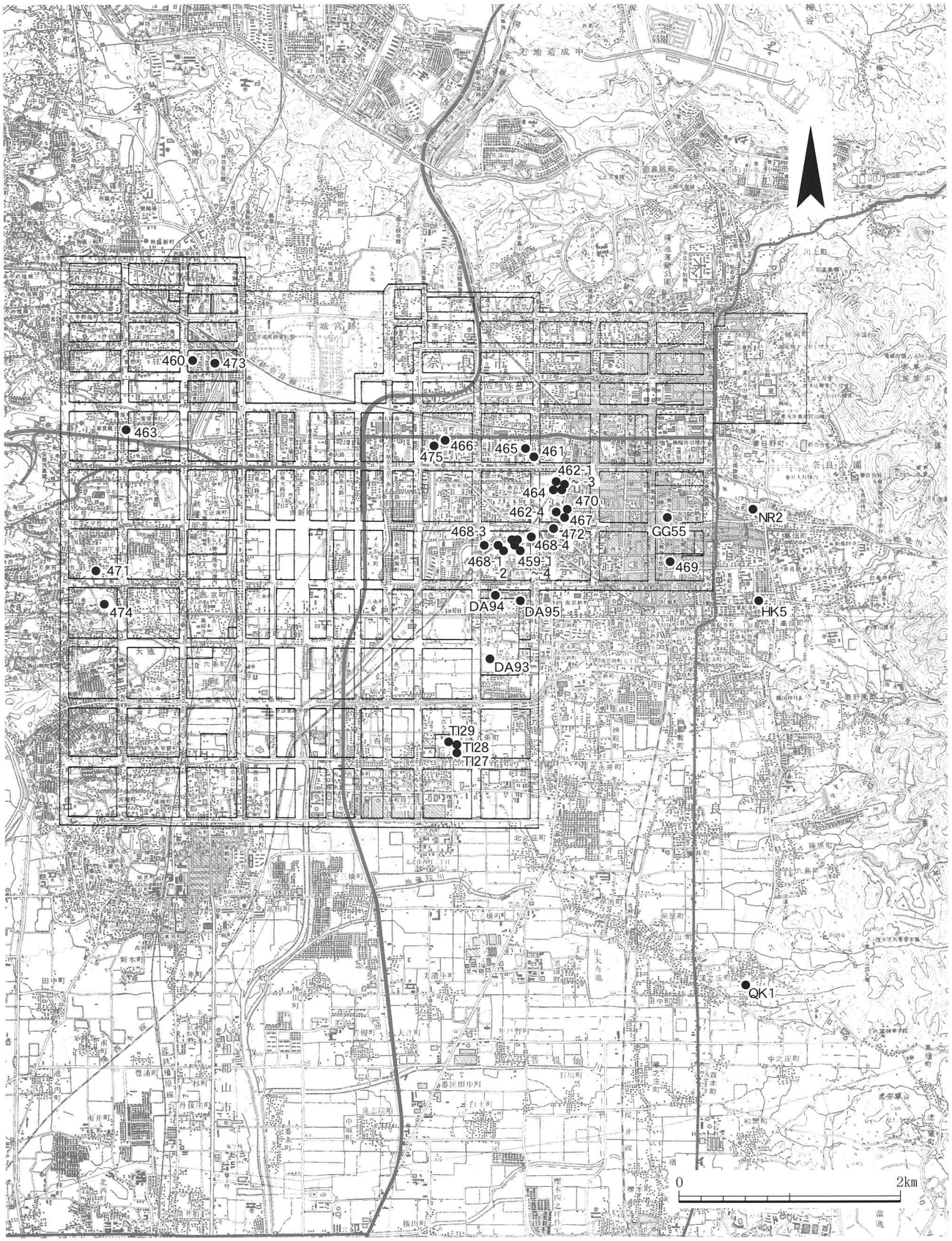
3　窪之庄北浦遺跡の調査　第1次 …… 121

4　試掘調査・確認調査 …… 122

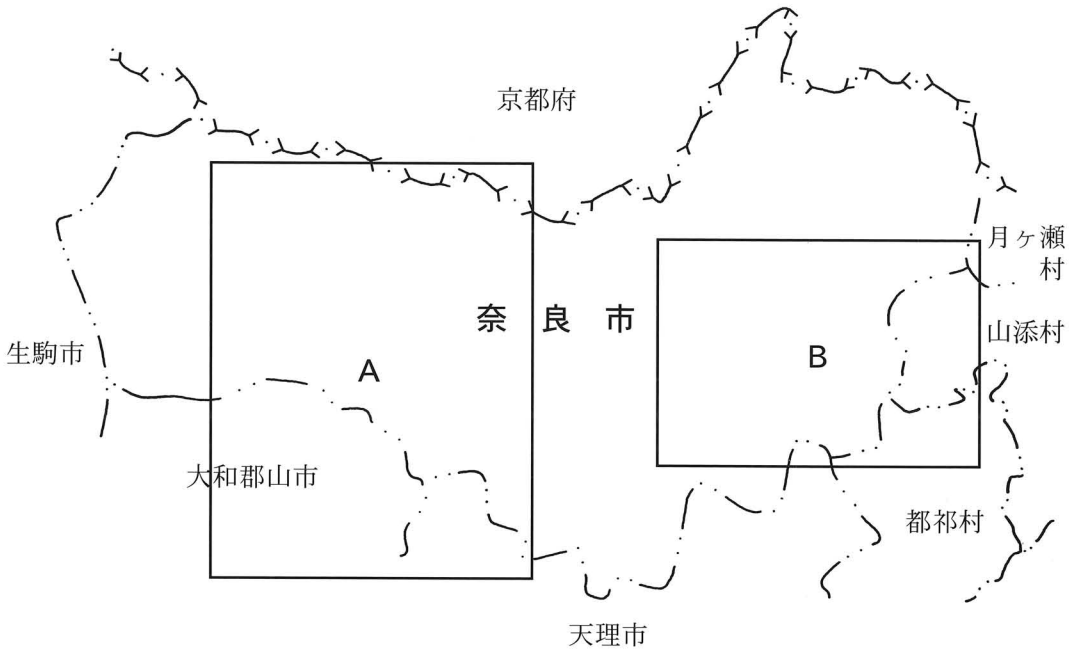
5　工事立会 …… 123

Ⅴ　自然科学分析

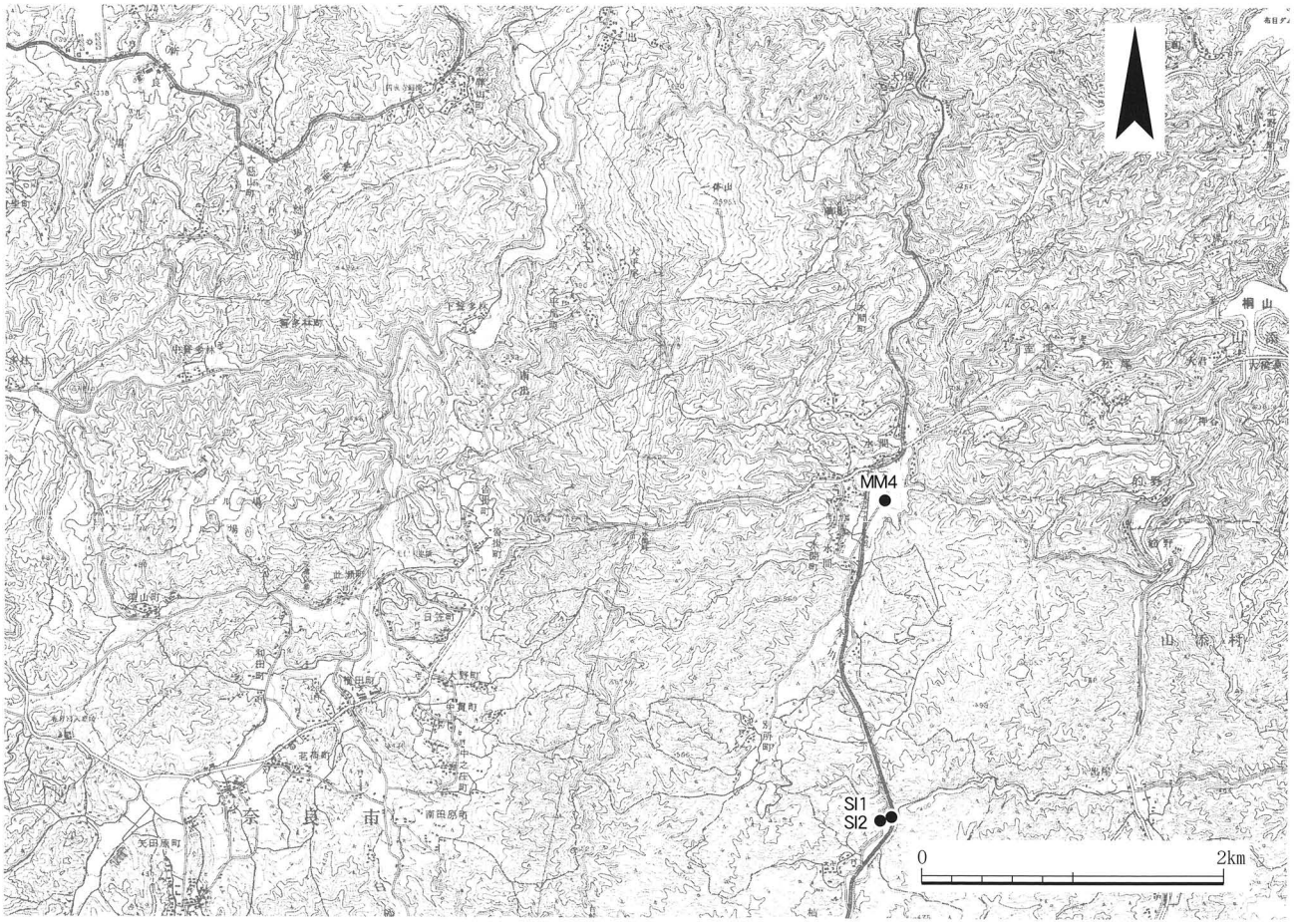
1　油坂遺跡（平城京第461・479次調査）採取試料の自然科学分析 …… 129



平成13年度　発掘調査地位置図A　1/50,000



奈良市域と位置図A・Bとの関係　1/200,000



平成13年度　発掘調査地位置図B　1/50,000

平成13年度　発掘調査一覧表

番号	調査次数	遺　跡　名	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	担当者	届出者／事業内容	事業区分	届出番号
1	459-1	平城京跡（左京五条四坊八坪）	大森町157-2-1	H13. 5.14 ～ 7.11	29㎡	中島・原田憲	奈良市長／JR奈良駅南特定土地区画整理事業	公共	H12：3145
2	459-2	平城京跡（左京五条四坊九・十坪）	大森町156-1	H13. 5.14 ～ 7.11	429㎡				
3	459-3	平城京跡（左京五条四坊十坪）	大森町104	H13. 7.17 ～ 9.19	951㎡	立石・池田富			
4	459-4	平城京跡（左京五条四坊十坪）	大森町104、106	H13. 5.16 ～ 7.10	627㎡				
5	460	平城京跡（右京二条二坊十五坪）	横領町329、332-1	H13. 5.21 ～ 8.10	1,000㎡	松浦	奈良市長／近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	公共	S63：3056
6	461	油坂遺跡・平城京跡（東四坊大路）	大宮町2丁目82-59、ほか	H13. 5.28 ～ 8.23	714㎡	久保邦	奈良市長／芝辻大森線街路整備事業	公共	H10：3091
7	462-1	三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	三条本町273-1、-3、-5、-8～-10、ほか	H13. 6. 4 ～ 8.23	1,450㎡	宮崎・安井	奈良市長／JR奈良駅周辺土地区画整理事業	公共	S63：3055
8	462-2	三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	三条本町269-1、-9～-11、270-2-1、ほか	H13. 8.27 ～ 10.19	1,100㎡	安井・宮崎			
9	462-3	三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	三条本町270-8～-11、-15、522、ほか	H13.10.22 ～ 12. 3	540㎡	安井			
10	462-4	平城京跡（左京四条五坊五坪）	三条本町327-4、ほか	H13.11.19 ～ 12. 3	100㎡	久保邦			
11	463	平城京跡（西三坊大路）	菅原町513-1	H13. 7.16 ～ 8. 3	112㎡	秋山	個人／共同住宅建設	緊急	H13：3004
12	464	三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	三条本町266-1、-2、ほか	H13. 7.23 ～ 11.26	1,950㎡	池田裕・久保邦	奈良市長／JR奈良駅周辺土地区画整理事業	公共	S63：3055
13	465	平城京跡（左京三条四坊十二坪）	大宮町2丁目1-16	H13. 8.20 ～ 10. 9	368㎡	松浦	奈良市長／大宮幼稚園園舎建設事業	公共	H13：3043
14	466	平城京跡（左京三条三坊六坪）	大宮町4丁目302-6、303-2	H13. 9. 3 ～ 9.21	120㎡	武田	個人／共同住宅建設	原因者	H13：3069
15	467	平城京跡（左京四条五坊五坪）	杉ケ町30	H13. 9.13 ～ 11. 8	636㎡	山前	奈良トヨタ自動車（株）／店舗建設	原因者	H13：3017
16	468-1	平城京跡（左京五条四坊七坪）	大安寺7丁目672-4	H13. 9.10 ～ 10.23	95.5㎡	原田憲	奈良市長／JR奈良駅南特定土地区画整理事業	公共	H12：3145
17	468-2	平城京跡（左京五条四坊七坪）	大安寺7丁目669-1	H13. 9.10 ～ 10.23	473㎡	原田憲			
18	468-3	平城京跡（左京五条四坊二坪）	大安寺7丁目685-1	H13. 9.11 ～ 10.19	509㎡	立石・中島・池田富			
19	468-4	平城京跡（左京五条四坊十六坪）	大森町122-1、124-2	H13.11. 1 ～H14. 1. 8	470㎡	立石・原田憲・池田富			
20	469	平城京跡（左京五条七坊六坪）・奈良町遺跡	川之上突抜北方町16-1	H13. 9.17 ～ 10. 4	120㎡	秋山	博愛会松倉病院／病院建設	原因者	H13：3097
21	470	平城京跡（左京四条五坊五坪）	杉ケ町31	H13.10.15 ～ 10.30	88㎡	武田	（株）トヨタレンタリース奈良／店舗建設	原因者	H13：3019
22	471	平城京跡（右京五条四坊五坪）	五条3丁目914、915	H13.11.14 ～ 11.29	388㎡	秋山	個人／畑地造成	緊急	H13：3201
23	472	平城京跡（左京五条五坊八坪）	三条本町59-3、-5	H13.11.20 ～ 12. 6	145㎡	武田	個人／共同住宅建設	原因者	H13：3107
24	473	平城京跡（右京二条二坊七坪）	西大寺国見町1丁目2137-62	H14. 1. 8 ～ 2.22	400㎡	武田	神慈秀明会／宗教施設建設	原因者	H13：3186
25	474	平城京跡（右京六条四坊二・七坪）	六条2丁目451-3、ほか	H14. 2. 6 ～ 2.22	250㎡	立石・原田憲	奈良市長／六条幼稚園園舎建設事業	公共	H13：3271
26	475	平城京跡（左京三条三坊三・六坪）	大宮町4丁目350-2、ほか	H14. 3.22 ～ 3.29	98㎡	山前	生和ホームズ（株）／共同住宅建設	原因者	H13：3250
27	TI27	平城京東市跡推定地	東九条町434-5	H13.10.23 ～ 11.12	83㎡	中島	個人／個人住宅建設	緊急	H13：3136
28	TI28		東九条町434-1の一部	H13.11.12 ～ 12. 5	140㎡	中島	奈良市長／西九条佐保線街路整備事業	公共	H13：3114
29	TI29		杏町588-1	H14. 1. 7 ～ 3. 6	425㎡	秋山	範囲確認調査	緊急	
30	DA93	史跡大安寺旧境内	大安寺4丁目1073-1	H13. 5.21 ～ 6.11	30㎡	山前	個人／個人住宅新築	緊急	H12：1072
31	DA94		東九条町1320-2、1337-1、1336、ほか	H13.11. 2 ～H14. 2. 6	355㎡	松浦・中島・宮崎	奈良市教育委員会教育長／史跡大安寺旧境内保存整備事業	その他	H13：1037
32	DA95		大安寺5丁目1004-2	H13.12.11 ～ 12.18	11㎡	山前	個人／個人住宅増築	緊急	H13：1034
33	GG55	元興寺旧境内・奈良町遺跡	中新屋町12	H13. 6.21 ～ 6.28	22㎡	武田	個人／個人住宅新築	緊急	H13：3048
34	HK5	東紀寺遺跡	東紀寺町3丁目707	H14. 1.15 ～ 2.19	397㎡	安井	奈良市長／第9号（紀寺）市営住宅建替事業（第1期）	公共	H13：3245
35	SI1	杣ノ川イモタ遺跡、ほか	杣ノ川町536、541-1、544-1、ほか	H13. 6.20 ～ 7.19	690㎡	鐘方・大窪	奈良県北部農林振興事務所長／県営ほ場整備事業（田原東地区）	原因者	H11：3271
36	SI2	杣ノ川イモタ遺跡	杣ノ川町536、541-1、544-1、ほか	H13.10. 2 ～ 12.28	2,189㎡				
37	MM4	水間遺跡	水間町556、ほか	H14. 1.17 ～ 3.29	1,892㎡				
38	QK1	窪之庄北浦遺跡	山町749-1、750、窪之庄町629、ほか	H14. 2.25 ～ 3.11	63㎡	中島	奈良市長／仮称山村東西線道路新設工事	公共	H13：3285
39	NR2	奈良町遺跡	高畑町1200-1	H13. 5. 9 ～ 6.11	80㎡	池田裕	奈良市長／仮称最勝院美術館建設事業	公共	H12：3102

Ⅰ　平城京跡の調査

平成13年度は、39件（調査面積17,330.5㎡）の発掘調査を実施しており、そのうち、26件（調査面積13,094.5㎡）が平城京跡の調査である。

平城京跡の調査のうち、14件（調査面積9,723.5㎡）が、土地区画整理事業3件（JR奈良駅周辺土地区画整理事業、JR奈良駅南特定土地区画整理事業、近鉄西大寺駅南土地区画整理事業）に係る調査であり、調査面積比にして、全体の調査の約56％、平城京跡の調査の約74％にあたる。ただ、この3事業のうち、平成13年度の近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査は1件のみである。

したがって、平成13年度に実施した平城京跡の発掘調査は、JR奈良駅周辺地域が中心である。

平成13年度も、平城京跡と重複して、その前・後の時代の遺跡の調査を実施した。平成12年度まで、その前の時代に限って、遺跡名（仮称）を付してきたが、今回もひきつづいて付したものがある。

1. 平城京跡（左京五条四坊）の調査　JR奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

この調査は、奈良市が計画するJR奈良駅南特定土地区画整理事業(総事業面積14.6万㎡)に係り、実施した埋蔵文化財発掘調査である。

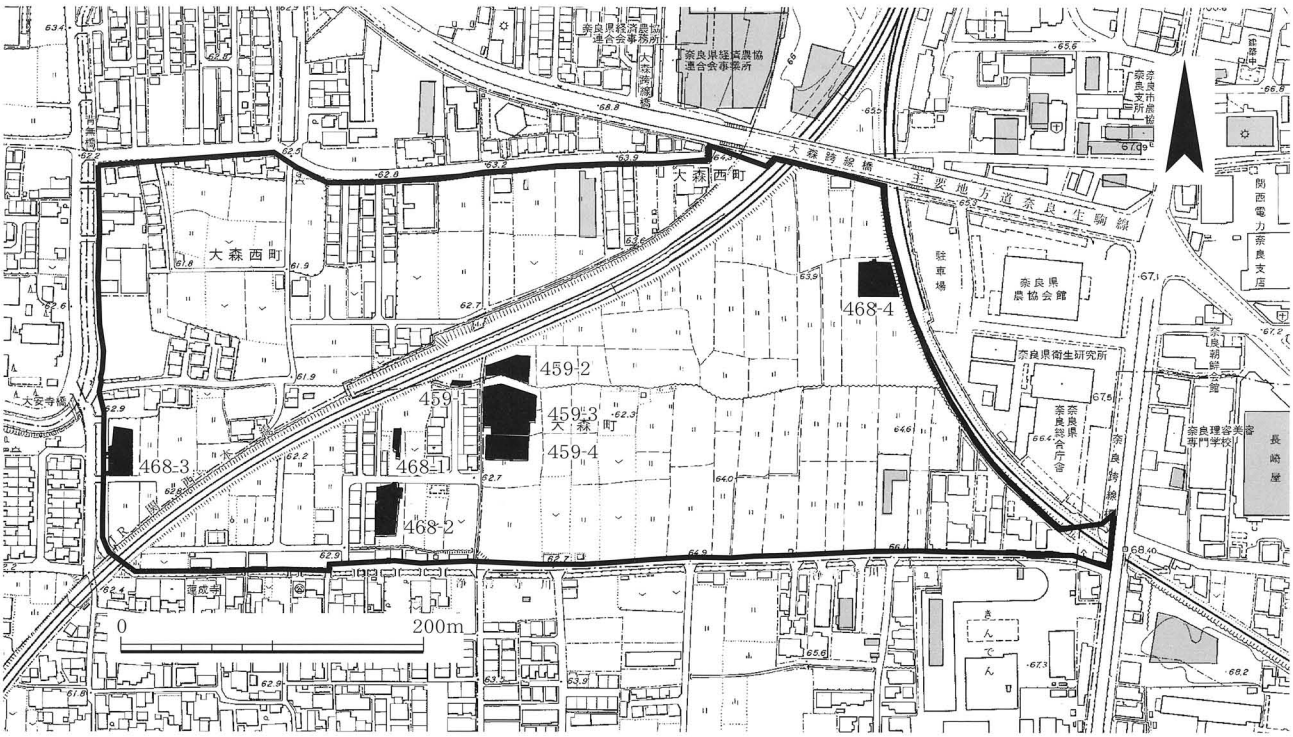
事業地は、北を主要地方道奈良生駒線、東をJR桜井線、西を菩提川、南を浄言寺川に囲まれた水田地帯であり、中央をJR関西本線が斜めに走る。地形上は東から西へ緩やかに下る沖積地に在り、中央を西流する用水路に向けて、北側では北から南に、南側では南から北へと緩やかに下がる。平城京の条坊復原では、左京五条四坊の北半と五条五坊の一部に想定されている。

市教育委員会では事業主体との協議により、本年度から発掘調査を開始した。本年度は下記のとおり通常事業で4箇所2,036㎡、臨時交付金事業で同じく4箇所1,547㎡の調査を行った。以下に調査の概要を坪ごとにまとめて記する。通例に従い、事業ごとに調査次数を付し、各発掘区は調査次数に枝番号を付すことによって区別した。

なお、報告に際して用いる遺構番号については、坪ごとに古墳時代以前の遺構に2桁、奈良時代以降のものに3桁以上の番号を付している。これらの番号は今後の各坪調査での通し番号とする。

平成13年度　JR奈良駅南特定土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

遺　跡　名	調査次数	事　業　名	調　査　地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京跡（左京五条四坊八坪）	459-1	通常事業	大森町157-2-1	H13. 5.14～ 7.11	29㎡	中島・原田憲
平城京跡（左京五条四坊九・十坪）	459-2	通常事業	大森町156-1	H13. 5.14～ 7.11	429㎡	中島・原田憲
平城京跡（左京五条四坊十坪）	459-3	通常事業	大森町104	H13. 7.17～ 9.19	951㎡	立石・池田富
平城京跡（左京五条四坊十坪）	459-4	通常事業	大森町104、106	H13. 5.16～ 7.10	627㎡	立石・池田富
平城京跡（左京五条四坊七坪）	468-1	臨時交付金事業	大安寺7丁目672-4	H13. 9.10～10.23	95.5㎡	原田憲
平城京跡（左京五条四坊七坪）	468-2	臨時交付金事業	大安寺7丁目669-1	H13. 9.10～10.23	473㎡	原田憲
平城京跡（左京五条四坊二坪）	468-3	臨時交付金事業	大安寺7丁目685-1	H13. 9.11～10.19	509㎡	立石・中島・池田富
平城京跡（左京五条四坊十六坪）	468-4	臨時交付金事業	大森町122-1、124-2	H13.11. 1～H14. 1. 8	470㎡	立石・原田憲・池田富



ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内の調査　発掘区位置図　1/5,000

(1) 平城京跡（左京五条四坊二坪）の調査　第468 - 3次

発掘区は、二坪の西半で、東三坊大路に面した部分にあたる。現在発掘区のすぐ西には浄言寺川が北流し、北西で菩提川に合流している。調査は南・北に分けて行い、排土置き場を設けた。

発掘区内の層序は、北半部で、耕土以下、暗灰褐色土、茶灰褐色土、暗灰色土、暗茶黄色土と続き、地表下約0.6mで暗橙色砂礫の地山（無遺物層）となる。北東部では、地山がさらに北東方向に低くなってゆき、その上面に弥生時代の遺物を含む堆積土がある。堆積土層の幅約5m分を検出した。さらに発掘区外に広がる。この部分の層序は、上から黄茶灰色土（16）、橙茶灰色土（17）、紫灰褐色土（18）で、北東隅の最深部で深さ約0.5mある。遺構が存する面は、その堆積土上面と地山上面とである。地山上面の標高は、北東隅の最深部で60.0m、発掘区南端で60.7mである。

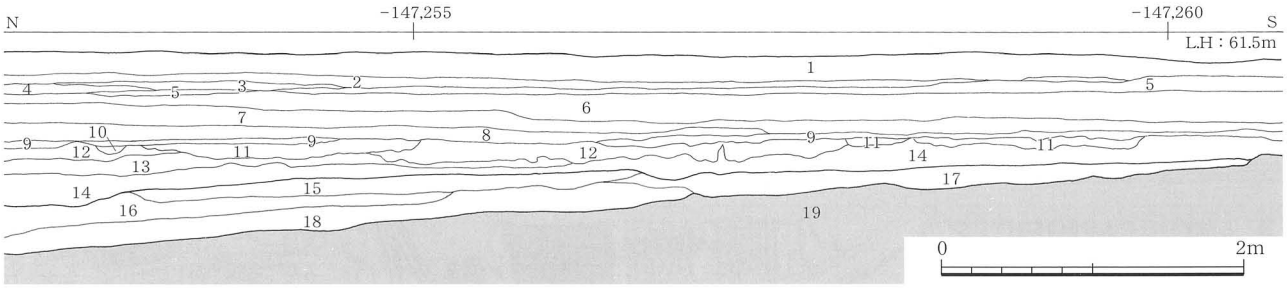
検出遺構　奈良・平安時代の掘立柱建物3棟、溝1条がある。

SB201　梁間2間（3.0m）、桁行3間（6.0m）以上の東西棟建物。柱間は、梁間が1.5m等間、桁行が2.0m等間である。

SB202　梁間2間（3.0m）、桁行2間（3.2m）以上の総柱建物。柱間は、梁間が1.5m等間、桁行が1.6m等間である。

SB203　梁間2間（3.5m）、桁行3間（4.2m）以上の南北棟建物。柱間は、梁間が1.75m等間、桁行が2.1m等間である。いずれの建物も出土遺物が少なく、詳細な時期は不明である。

SD105　東から西へ流れる溝。西に向かって深くなり、西端で幅約2.7m、深さ約0.4mである。東では途切れる部分がある。土器、瓦が少量出土しており、最も新しいもので10世紀後半から11世



1　耕土
2　暗灰褐色土
3　明灰色土（明褐色土含む）
4　暗茶灰色土
5　暗灰褐色土（灰白色土含む）
6　暗灰褐色土
7　茶灰褐色土
8　暗灰青色土（暗褐色土含む）
9　暗灰色土（茶褐色土含む）
10　明灰色土
11　黒褐色土
12　橙灰色土
13　黄茶灰色土
14　暗茶黄色土
15　黄茶灰色土
16　黄茶灰色土（弥生時代以前の埋土）
17　橙茶灰色土（弥生時代以前の埋土）
18　紫灰褐色土（弥生時代以前の埋土）
19　暗橙色砂礫

第468-3次調査　発掘区東壁（北部）土層図　1/50

第468-3次調査　発掘区北半部（北から）

第468-3次調査　発掘区南半部（西から）

紀初め頃の土師器皿がある。

このほか、黄茶灰色土（16）上面で、縄紋時代中期の深鉢形土器1個体を検出した。口縁部を下にしており、口縁部の高さ約4cm分のみが全周残っていた。径約0.5m、深さ約0.08mの平面不整円形の掘形を検出した。土器の器高を勘案すると、縄紋時代の地表面がかなり削平されていることになるが、土器が出土した発掘区北東隅の堆積土には、弥生土器片、石器が少量ではあるが含まれており、遺構の重複関係に疑問が残る結果となった。縄紋・弥生時代の遺跡の様相については、さらに隣接地での調査結果の検討が必要である。

出土遺物　縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦、石器が遺物整理箱1箱分出土している。このうち、縄紋土器について報告する。

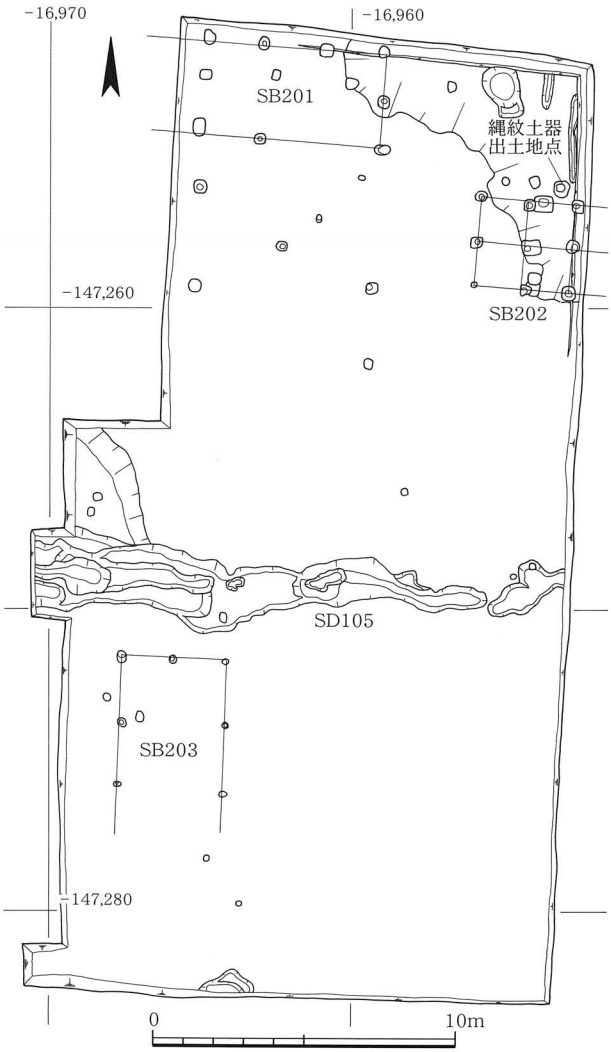
黄茶灰色土上面で検出した縄紋土器は、深鉢形土器で、出土時は口径約30cmあり、口縁部が全周残っていた。しかし、残存状態が悪く、多くの部分が土と同化していた。このため、取り上げ、洗浄の過程で崩れ、細片化し、大小の15片ほどの破片しか残らなかった。そこで、残存状況が比較的良好な4点（1～4）を図化し、報告する（写真は口絵2）。これらは同一個体である。

1～3は、波状口縁部である。1は頂部を水平に、2は頂部を山形に仕上げる。1・2とも円孔を2つ水平方向に並べて開ける。外面は縄紋を施した後、低い隆帯を水平方向に貼付け、爪形紋を施す。隆帯は口縁端部よりやや下に貼付け、下に向かう緩やかな連弧を描く。2の内面には縄紋が施される。3は、口縁端部外面とそのやや下に隆帯を貼付け、爪形紋を施す。隆帯と隆帯の間には縄紋が施される。口縁部内面は肥厚し、縄紋を施す。

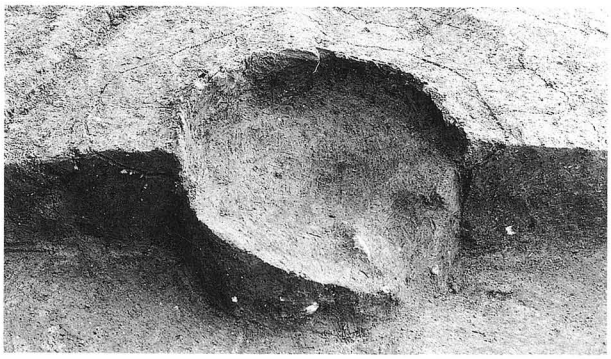
4は、唯一口縁部の傾きがわかるもので、口縁端部は水平である。磨耗が激しく、紋様、調整ともに不明瞭である。口縁端部外面とやや下に隆帯らしきものがあり、口縁端部内面は、面をとり、縄紋が施されるようである。出土位置からみて、図上では、1の右側になる。縄紋時代中期の船元Ⅰ・Ⅱ式土器[1]の特徴をもつ。

（中島和彦）

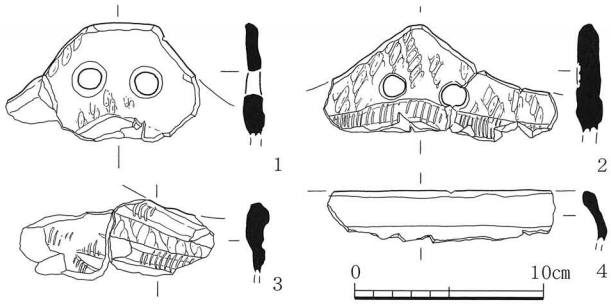
1）間壁忠彦他『里木貝塚』（倉敷考古館研究集報　第7号）1971。



第468-3次調査　遺構平面図　1/250



縄紋土器出土状況（北から）



縄紋土器図　1/4

(2) 平城京跡（左京五条四坊七坪）の調査　第468 - 1、- 2次

左京五条四坊七坪の中央南辺から中心部にかけての位置に、南北2箇所の発掘区を設定した。

基本層序・地形　第468-1次発掘区では、黒灰色土の耕土の下、約0.3m厚の茶褐色砂質土を挟み、地表下約0.5mで、黄褐色粘土あるいは灰色砂の地山（無遺物層）に至る。発掘区北西辺では、茶褐色砂質土と地山の間に黄灰色砂質土層が入る。遺構の存する面は、基本的に地山上面であるが、この黄灰色砂質土上面においても、遺構が存することを確認した。地山面の標高は概ね62.0mである。

一方、南側の第468-2次発掘区では、南辺では約0.1mの耕土下で直ちに礫混じりの黄褐色土の地山（無遺物層）となる。北辺では耕土の下に厚さ約0.2mの灰褐色砂質土を挟み、地山（無遺物層）となる。地山上面が遺構の存する面で、その標高は、南辺で概ね62.6m、北辺では概ね62.4mであり、南から北に向って緩やかに下る。これは、二坪（第468-3次）での様相と同じである。ところが、発掘区を北に一部拡張したところ、地山が北に急激に落ちる段差を確認した。高低差は約0.4mあり、段差以北の地山面がおそらく第486-1次発掘区での遺構の存する面へと続くものと考える。

ところで、この段差以南の礫混じりの地山は、二坪（第468-3次）で確認した北に向かって下る礫混じりの地山と同じ堆積土層であると考える。第468-2次発掘区周辺には「石ガマチ」の小字名が残り、この礫混じりの地山に由来するものと思える。調査地以南には、北に向って下る緩やかな傾斜面がある丘陵が控えていることが窺える。

検出遺構　奈良時代の掘立柱建物5棟、掘立柱塀6条、溝5条、土坑1基がある。以下主なものについて記す。

SB201は、第468-1次発掘区北辺で検出した東西1間以上、南北2間（6.6m）以上の掘立柱建物である。南北の柱間は11尺（3.3m）である。建物南辺を確認した。発掘区外北へ続く。柱掘形はいずれも平面一辺1.1mの方形で、深さ1m余りの大型のものであることから、総柱建物であると考える。重複関係から南北方向の溝より古いことがわかる。柱穴埋土から、奈良時代後半から末頃にかけての土器が出土した。

SA202は、SB201に重複する位置で検出した南北3間（6.3m）以上の南北方向の掘立柱塀である。柱間は7尺（2.1m）等間である。発掘区外北へ続く。北および東に延びる掘立柱建物の可能性もある。発掘区北壁での土層観察によると、SB201は地山である黄褐色粘土上面から、SA202はその上に堆積する黄灰色砂質土の上面から掘り込まれており、SA202がSB201より新しいことがわかる。柱穴埋土から、奈良時代前半の土器が出土した。

SA203は、SB201の南側で検出した南北2間（4.2m）の掘立柱塀である。柱間は7尺（2.1m）等間である。重複関係からみてSA202より新しいことがわかる。発掘区外東側に延びる掘立柱建物の可能性もある。

SB204は、第468-2次発掘区の北辺で検出した梁間2間（6.0m）、桁行3間（10.8m）以上の東西棟掘立柱建物である。桁行は7尺（2.1m）等間、梁間は5尺（1.5m）等間である。発掘区外東へ続く。柱穴埋土から弥生土器、奈良時代の土器が出土した。

SB205は、SB204に重複する位置で検出した梁間2間（6.0m）、桁行3間（10.8m）以上の東西棟掘立柱建物である。桁行は12尺（3.6m）等間、梁間は10尺（3.0m）等間である。発掘区外東へ続く。重複関係からSB204より新しく、SB207より古いことがわかる。柱穴埋土から奈良時代後半の土器が出土した。また柱穴柱抜取坑からは、瓦片がまとまって出土しており、この建物が瓦葺きであった可能性を窺わせるものと考える。ただし、出土量からみて、熨斗棟など屋根の一部にのみ葺かれたものであろう。このSB205北側柱列と、北方にあるSB201南側柱列との距離は110小尺（33m）と整数値に収まり、かつ柱筋が揃うことから、両建物が同時期に並存すると考える。

SB206は、SB205の西側柱列に重複して検出し

た南北2間（6.0m）以上、東西1間（3.0m）以上の掘立柱建物である。東西・南北とも柱間は10尺（3.0m）等間である。発掘区外北及び西へ続くが、発掘区北側では、地山が段差をもって落ちていることが確認されており、この建物は南北2間の東西棟建物であると考えたほうがよかろう。柱穴埋土から、奈良時代の土器が出土した。

SB207は、SB205の南側で検出した東西2間（3.0m）以上、南北3間（5.4m）の総柱建物である。東西の柱間は5尺（1.5m）等間、南北の柱間は6尺（1.8m）等間である。発掘区外東へと続く。柱穴埋土から、縄紋時代の石鏃、奈良時代の土器が出土した。第468-3次調査地において縄紋中期の埋甕遺構が確認されたことと併せ、周辺に縄紋時代の遺跡が広がる可能性も窺えよう。

SA208は、SB207に重複した位置で検出した南北2間（3.6m）の掘立柱塀である。柱間は6尺（1.8m）等間である。発掘区外東側に延びる掘立柱建物の西側柱列の可能性もある。

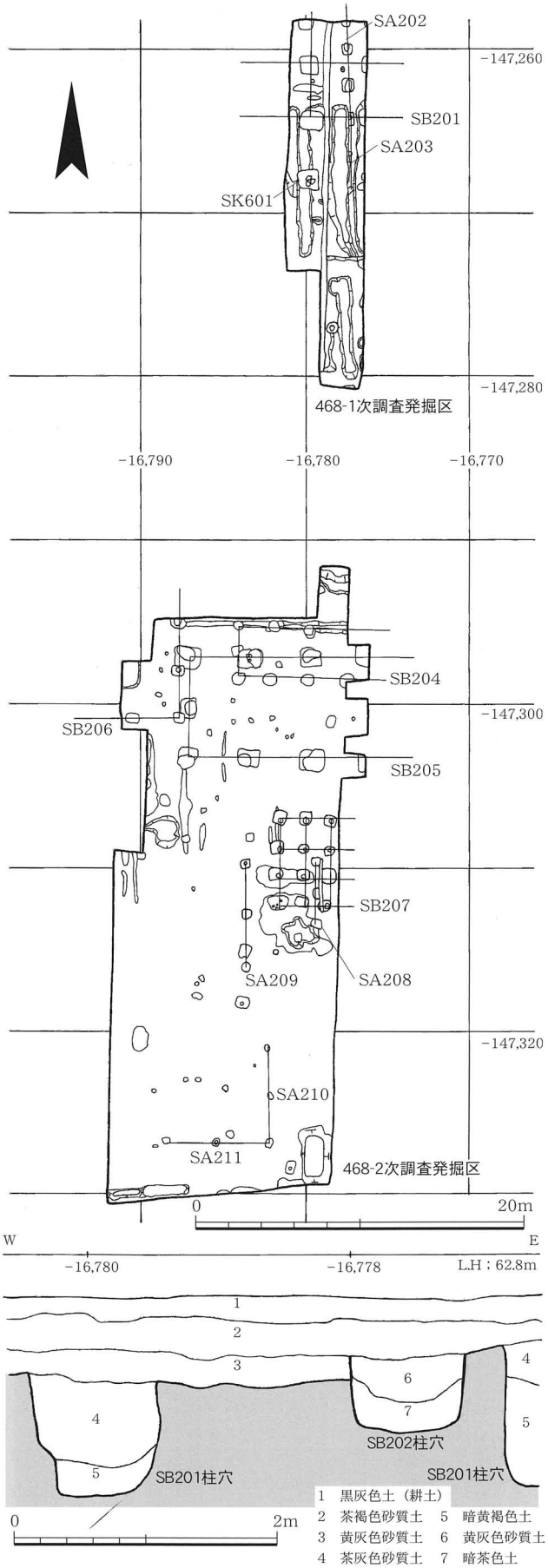
SA209は、SB207の西で検出した南北2間（6.0m）の掘立柱塀である。柱間は10尺（3.0m）等間である。柱穴埋土から、奈良時代の土器が出土した。

SA210は、第468-2次調査区南辺で検出した南北2間（6.0m）の掘立柱塀である。柱間は10尺（3.0m）等間である。

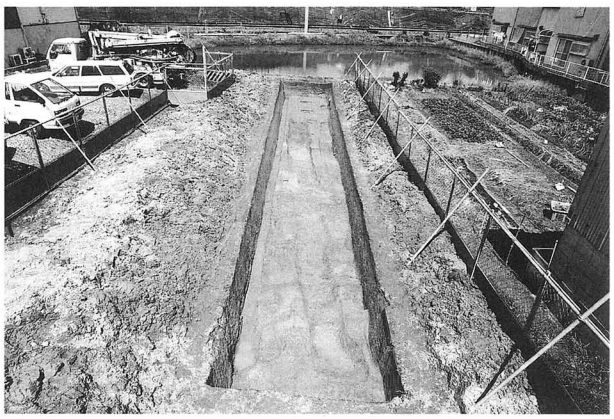
SA211は、SA210に取り付く東西2間（6.0m）の掘立柱塀である。柱間は10尺（3.0m）等間である。SA210・211は、ともに柱穴の深さが0.1m程度しか残存せず、東西、南北ともに2間以上の削平された掘立柱建物である可能性もある。

SK601は、SB201の南側で検出した一辺約1.5mの平面隅丸方形の土坑である。深さは約0.5mである。掘形底面で径0.4m程度の石を3個確認した。重複関係から南北方向の溝よりも新しいことがわかる。坑内埋土から、奈良時代の土器が出土した。SB201の柱筋と揃う位置にあることから、その一部であるとも考えたが、南北溝との重複関係に齟齬があることから、土坑と考えた。その性格については不明である。

（原田憲二郎）



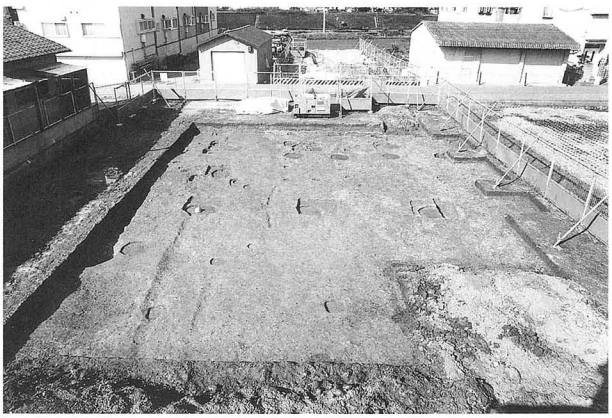
上：遺構平面図1/400　下：発掘区［468-1次］北壁土層図1/50



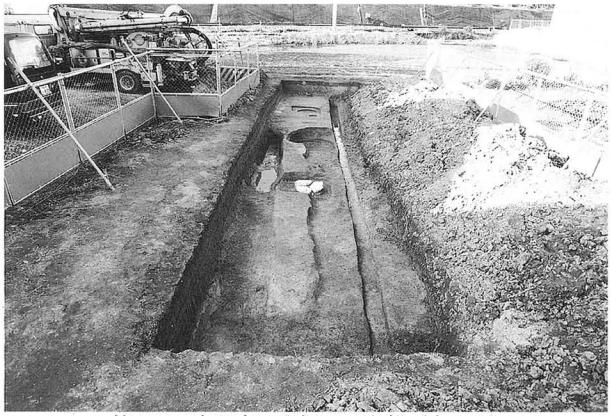
第468-1次調査　発掘区東半部（南から）

第468-2次調査　発掘区南半部（南から）

第468-1次調査　発掘区東半部（北から）



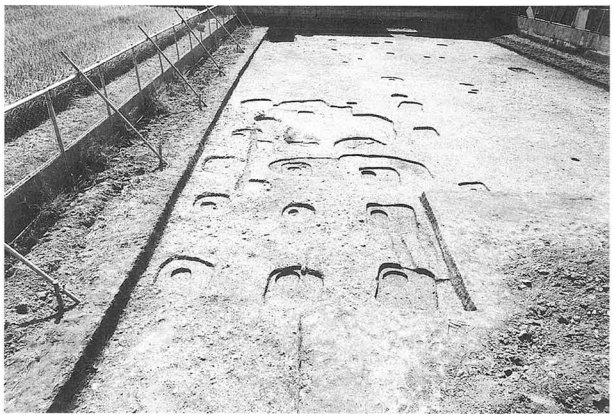
第468-2次調査　発掘区北半部（南から）



第468-1次調査　発掘区西半部（南から）

掘立柱建物SB204・205（西から）

第468-1次調査　発掘区西半部（北から）



掘立柱建物SB207（北から）

(3) 平城京跡（左京五条四坊七・九・十坪）の調査　第459-1・-2・-3・-4次

Ⅰ．はじめに

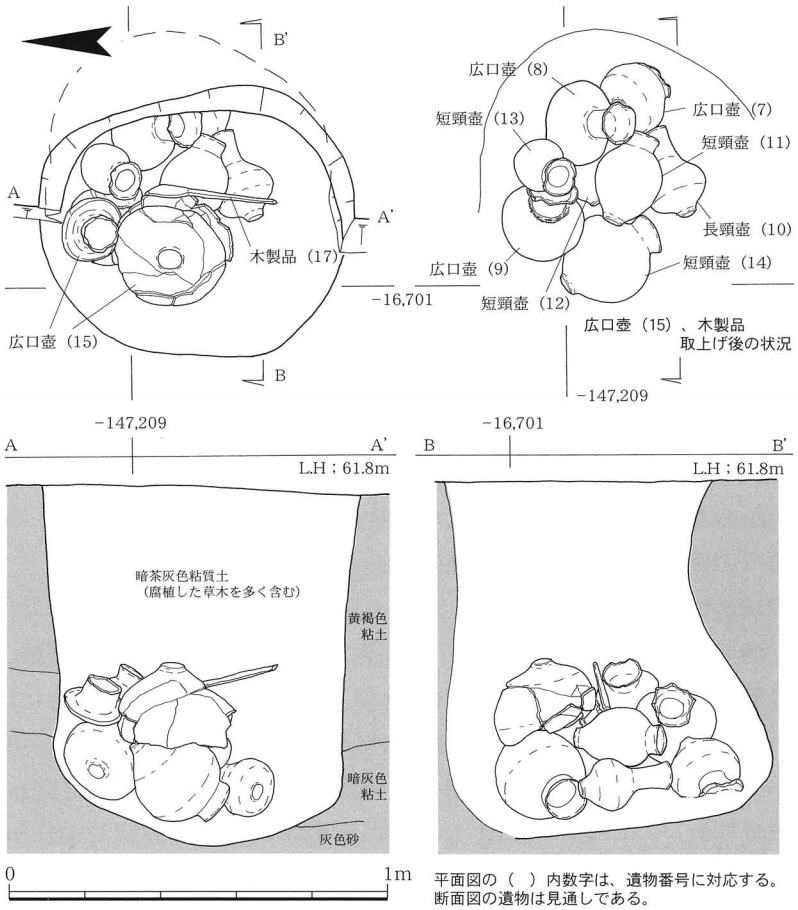
調査は、東四坊坊間路と左京五条四坊条間北小路との交差点周辺で実施した。発掘区は七坪の北東隅（第459-1次）、東四坊坊間路と条間北小路の交差点と九坪南西隅（第459-2次）、十坪の北西部（第459-3・-4次）の4箇所に分けて設定した。いずれの発掘区内も基本的な層序は、上から、耕土、暗茶灰色土、明灰色砂質土、暗灰褐色砂質土、灰褐色砂と続き、地表面から0.5～1.0mで黄灰色粘土の地山（無遺物層）に至る。地山上面の標高は、第459-1次発掘区で61.3m、459-2次発掘区で61.8m、第459-3次発掘区北辺で61.6m、第459-4次発掘区南辺では62.4mである。遺構の存する面は地山上面である。

Ⅱ．検出遺構

A．弥生時代の遺構（土坑1基）

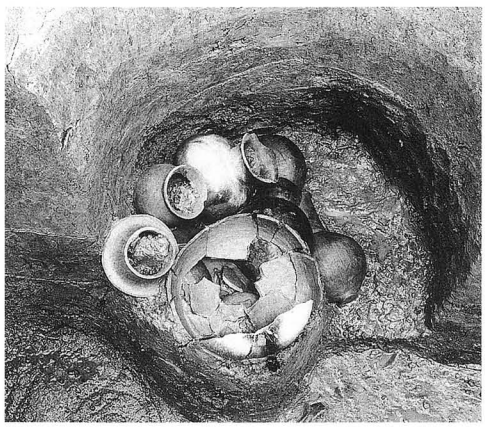
SK01　東西約0.7m、南北約0.8m、深さ約0.95mの平面楕円形の土坑である。埋土は暗茶褐色粘質土で、下半部はグライ化が進み、腐植した草木を多く含む。ほぼ垂直に掘り込まれており、東側の底近くの壁は抉れて袋状になる。底は灰色砂層に達し、湧水が激しい。

底に後期後半の弥生土器と杓子形木製品を埋納している。土器は、ほぼ完存する広口壺4点、短頸壺3点、長頸壺1点、甕1点、小型高杯1点が倒れた状態で出土した。ほかに壺の破片が少量ある。北東側に広口壺、南西側に短頸壺と長頸壺を固めて置いている。これらの上に大型の広口壺（15）が倒立しているが、口縁部は胴部からやや離れて出土しており、埋納時には既に頸部で割れていたようである。その東側に杓子形木製品（17）が柄を南に向けて置いている。小型の高杯は、これらの壺の下から出土した。壺内には、粘土が少し流入しているのみだが、広口壺（9・12）と長頸

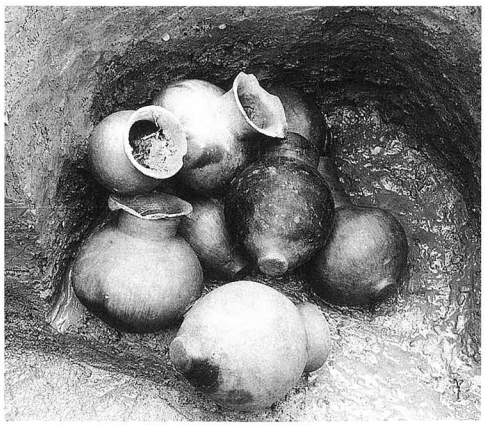


平面図の（　）内数字は、遺物番号に対応する。
断面図の遺物は見通しである。

土坑SK01　土器・木製品出土状況平面及び立・断面図　1/20



土坑SK01　土器出土状況（西から）



同上（広口壺⒂、木製品取上げ後）

壺（10）内の流入土から種子（未同定、直径約3㎜の球形）が数点見つかった。土坑の埋土に含まれていたものかもしれない。（中島和彦）

B. 奈良時代以降の遺構

条坊に関連する遺構には、東四坊坊間路と同東側溝、左京五条四坊条間北小路と同南北両側溝がある。坪内の遺構には、十坪の西を限る築地塀と同雨落溝、同暗渠2条のほか、掘立柱建物・塀5棟（条）、土坑2基、溝6条がある。また、耕作に伴う溝を多数検出した。東四坊坊間路、五条条間北小路、坪内の遺構の順に報告する。

SF0710 [459-3次]　東四坊坊間路。幅4.0m分、長さ16.0m分を検出した。西側溝を確認していないので、幅員は確定できない。路面東側は、側溝の流水に浸蝕され、削られている。

SD104 [459-2～-4次]　東四坊坊間路東側溝。幅2.5～4.0m、深さ0.4～0.7mである。後述の五条条間北小路SF0910を横断し、条間北小路北側溝SD101と交差する。溝底の高低差により、十坪からは北流、九坪からは南流し、西流するSD101と合流することが分かる。合流部では、溝底に高低差があり、SD101が1.2m深い。十坪 [459-4次] では、東岸と底の一部を確認し、溝底で杭を1本検出した。改修が見られ、改修前の溝から8世紀後半以降、改修後の溝から8世紀末～9世紀初頭の遺物が出土した。最上層から9世紀末～10世紀初頭の遺物が出土している。

SF0910 [459-2次]　五条条間北小路。南北側溝の心々間距離は約6.0mである。路面は北側溝の流水で浸蝕されており、幅3.0～5.0mである。

SD101 [459-3次]　条間北小路北側溝。幅2.5～4.0m。後述の護岸SX801 [459-2次] の東端から西に向かって、急激に深くなる。発掘区東端での深さは約0.7m（溝底標高61.1m）だが、東四坊坊間路東側溝SD104との合流部では約1.8m（溝底標高59.8m）もある。溝内から8世紀末～9世紀後半の遺物が、多くの獣骨とともに出土している。最上層の埋土には、16世紀後半～17世紀前半の国産陶器を含み、この頃大きく氾濫したものと見られる。溝心の座標は、X=－147,211.10m、Y=－16,700.00mである。

SX801 [459-2次]　北側溝SD101と東四坊坊間路東側溝SD104の合流部分で、SD101の北岸とSD104の東岸に打ち込まれた護岸の杭列。流水による浸蝕を防ぐものと思われる。合流点から東に10m、北に1.3m分を確認した。杭は直径5～10㎝、長さ0.2～1.3mの自然木の先端を尖らせたものを用いている。

SD102 [459-2次]　条間北小路南側溝。幅2.0～2.5m、深さは0.5～0.6m。溝底の標高は、発掘区東端で61.3m、西端で61.1mである。溝内から奈良時代のもののほかに、10世紀後半～11世紀の遺物も出土している。溝心の座標値は、X=－147,216.90m、Y=－16,700.00m。

七坪内の遺構 [459-1次]

SD105　東四坊坊間路西側溝の想定位置にある溝だが、12世紀後半の瓦器が出土しており、西側溝を踏襲しているかは不明である。西岸のみを検出し、幅3.0m分、深さ1.4mまでを確認した。

SD106　SD105 [459-1次] の西側で検出した南北溝。東岸のみを検出し、幅7.0m分、深さ1.6mまでを確認した。

SD107　現況の灌漑用水路と同方向に流れる東西溝。北岸のみを検出し、さらに南に広がる。深さ0.8mまでを確認した。溝内から17世紀初め頃の土師器が出土し、現況水路が整備される以前の灌漑水路とも考えられる。

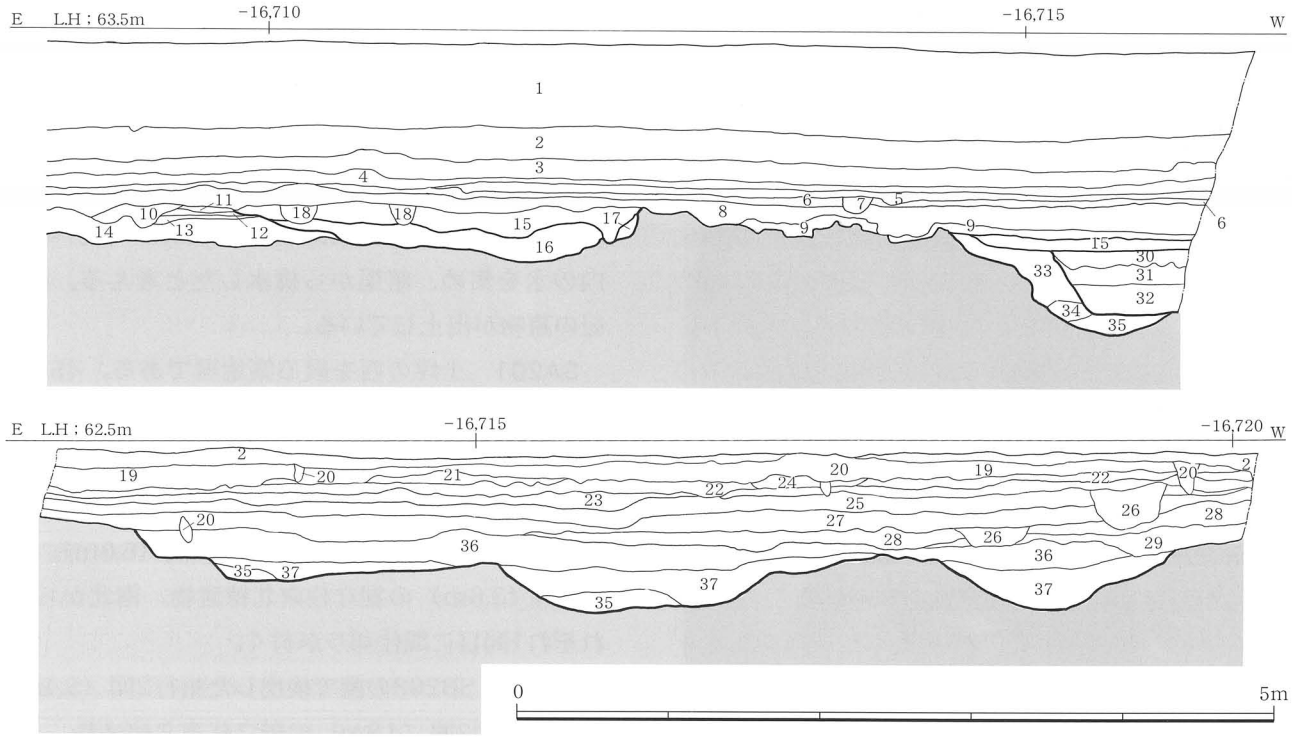
九坪内の遺構 [459-2次]

SD105　九坪南辺の築地想定地で検出した南北溝で、南端で北側溝SD101につながる。幅0.6m、深さ0.2m。木樋の痕跡が残るため築地暗渠の可能性があるが、築地本体を確認できる痕跡はなかった。奈良時代の遺物が出土している。

十坪内の遺構 [459-3、-4次]

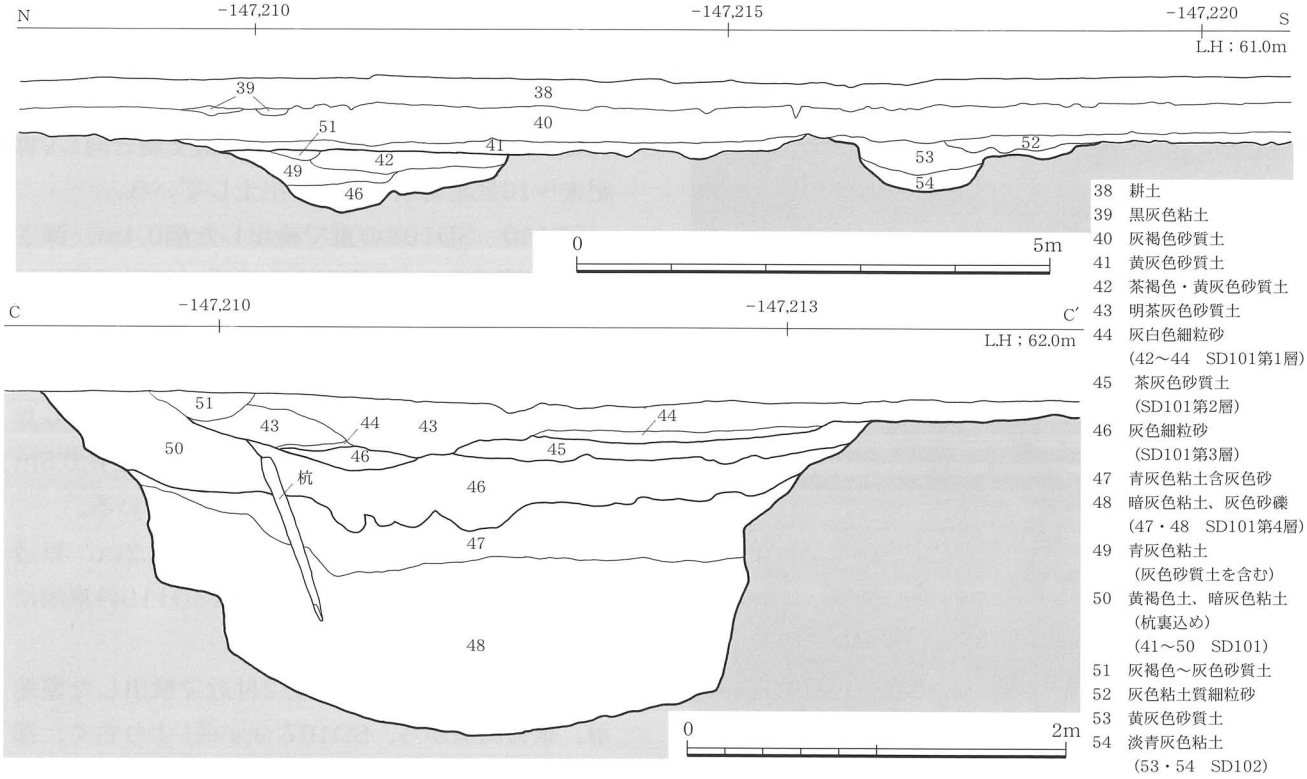
SD106　SD104の東肩から約2.5m東で、SD104と平行する溝。2.5mの空閑地を築地塀跡、SD106をその雨落溝と考える。幅0.6m、深さ0.1～0.2mである。8世紀末～9世紀初頭の遺物が出土した。459-3次発掘区南辺で途切れて北に続かず、これより北での築地塀の存在は確認できなかった。

SD105　SD104とSD106をつなぐ築地暗渠。



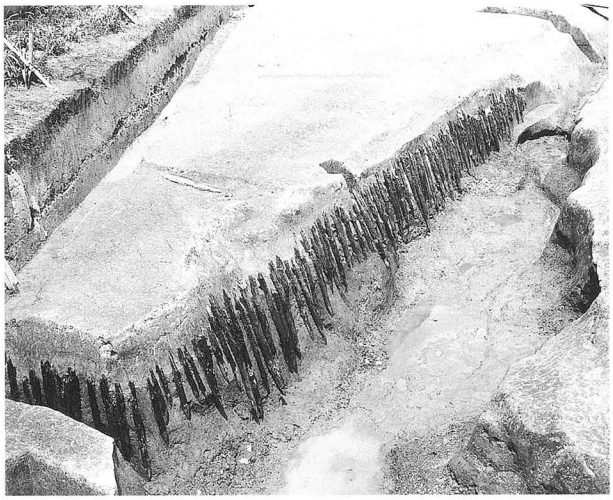
1　造成盛土
2　耕土
3　暗灰茶色細～中粒砂
4　暗灰青色中粒砂
5　暗灰青色中粒砂、暗褐色細粒砂
6　暗灰茶色砂質土、暗褐色砂質土
7　暗灰茶色砂質土、暗灰色粘質土
8　暗灰茶色砂質土
9　暗灰色細粒砂含黄灰色粘質土
10　暗灰～黄灰色粘質土
11　暗褐色砂質土、暗灰色粘質土
12　黄灰色粘質土、暗灰色粘質土
13　暗褐色砂質土、暗灰色粘質土、暗褐色中粒砂（炭を含む）
14　黄茶灰色粘質土（11～14　SX801）
15　茶褐色粘質土
16　暗茶褐色砂質土含暗灰色シルト
17　茶褐色粘質土、黄灰色粘質土（16・17　SD107）
18　暗灰色砂質土
19　暗灰色細粒砂（細礫を含む）
20　暗灰色細粒砂
21　暗灰青色砂質土
22　茶褐色砂質土
23　明灰色シルト
24　灰白色～茶灰色砂質土
25　明灰色砂質土
26　暗茶灰色細～中粒砂
27　明灰色細～中粒砂
28　茶灰色砂質土
29　黄茶灰色砂質土
30　黄茶灰色砂質土
31　茶灰色砂
32　茶灰色砂質土
33　黄灰色砂質土
34　灰色砂
35　灰色砂礫
36　橙茶灰色細粒砂
37　暗灰青色細～中粒砂（30～37　SD104）

発掘区南壁土層図　上：第459-4次調査　下：第459-3次調査　1/50



38　耕土
39　黒灰色粘土
40　灰褐色砂質土
41　黄灰色砂質土
42　茶褐色・黄灰色砂質土
43　明茶灰色砂質土
44　灰白色細粒砂（42～44　SD101第1層）
45　茶灰色砂質土（SD101第2層）
46　灰色細粒砂（SD101第3層）
47　青灰色粘土含灰色砂
48　暗灰色粘土、灰色砂礫（47・48　SD101第4層）
49　青灰色粘土（灰色砂質土を含む）
50　黄褐色土、暗灰色粘土（杭裏込め）（41～50　SD101）
51　灰褐色～灰色砂質土
52　灰色粘土質細粒砂
53　黄灰色砂質土
54　淡青灰色粘土（53・54　SD102）

第459-2次調査　上：発掘区東壁土層図　1/80　下：SD101断面土層図　1/40



第459-2次調査　護岸杭列SX801（南西から）

第459-2次調査　小路北側溝SD101獣骨・瓦出土状況

第459-4次調査　暗渠SD105（西から）

幅1.0m、深さ0.2～0.3mである。坪の南北約1/2に当たるところで検出した。当初は素掘りの溝で、後に木樋が据えられたようである。8世紀末～9世紀初頭の遺物が出土した。

SD107　築地暗渠SD105付近で、雨落溝SD106につながる、幅約4.0m、深さ約0.3mの溝。宅地内の水を集め、暗渠から排水したと考える。8世紀の遺物が出土している。

SA201　十坪の西を限る築地塀である。459-4次発掘区南端で添柱の柱穴を検出した。

SB202　坪北辺で検出した東西2間（2.4m）、南北2間（2.1m）の掘立柱総柱建物。

SB203　坪西辺で検出した桁行4間（6.0m）、梁間2間（3.6m）の掘立柱南北棟建物。南北からそれぞれ1間目に間仕切りが付く。

SB204　SB203の南で検出した桁行2間（5.4m）以上、梁間2間（4.8m）の掘立柱南北棟建物。

SA205　SB204の東で検出した東西2間（3.9m）の掘立柱塀。

SB206　築地暗渠SD105［459-4次］の東側で検出した桁行1間（2.7m）、梁間1間（1.8m）の掘立柱東西棟建物。重複関係から、SD107埋没時期よりも古い。

SD108　東四坊坊間路東側溝SD104の東で検出した幅0.7m、深さ0.3m、長さ4mの南北溝。

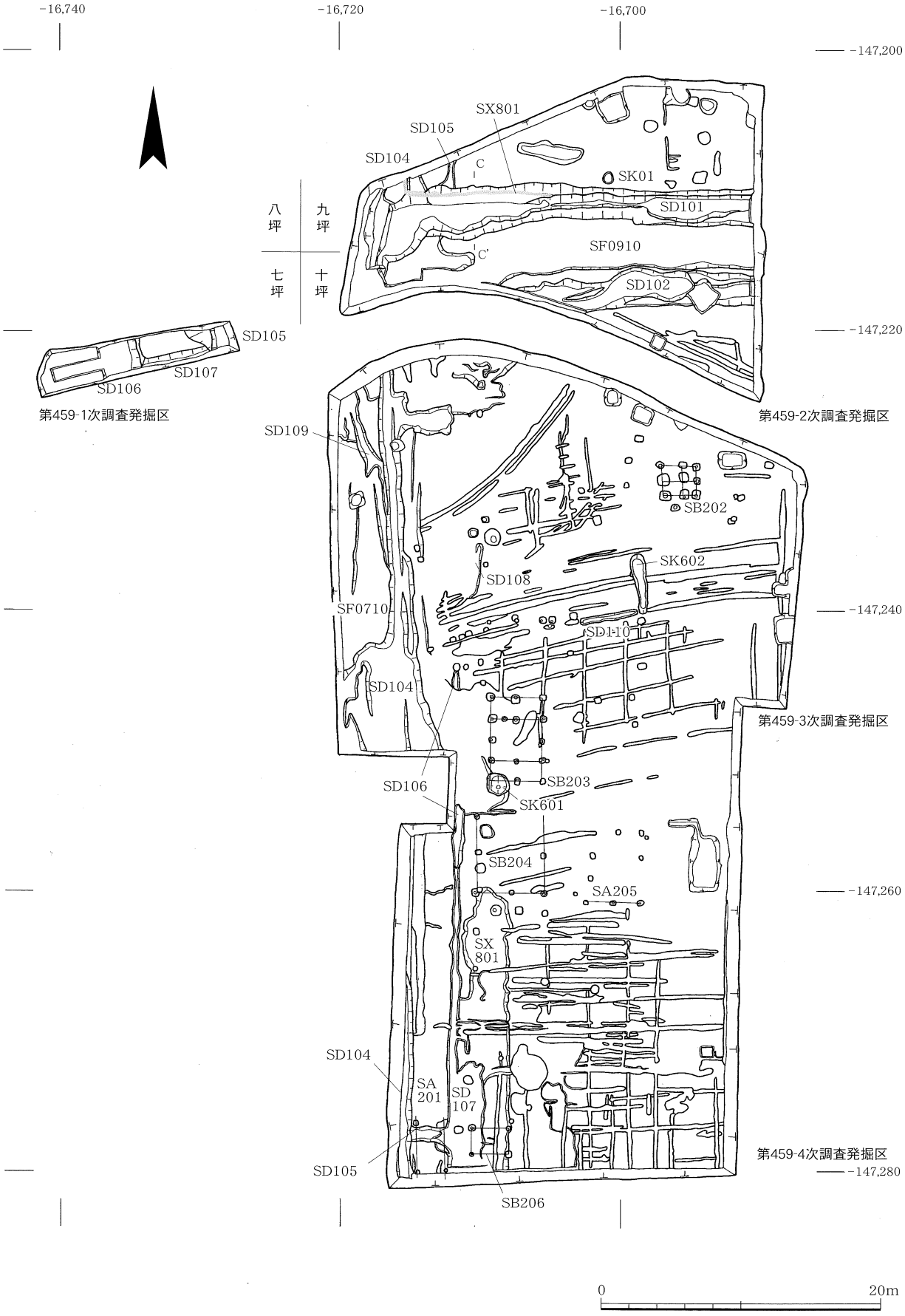
SD109　SD104と重複して検出した幅0.8m、深さ0.3mの蛇行する溝。SD104最上層と同じ9世紀末～10世紀初頭の遺物が出土している。

SD110　SD108の東で検出した幅0.4m、深さ0.4m、長さ9.0mの東西方向の溝。周辺の耕作に伴う溝と同方位であることから、水田開発に関わる溝と考えられる。

SK601　SB203の南西隅柱と重複して検出した土坑。一辺約1.4mの平面隅丸方形、深さ約0.6mである。8世紀末以降の遺物が出土している。

SK602　平面長方形の土坑。長辺4.2m、短辺0.9m、深さ0.5mである。南端はSD110の東端につながる。

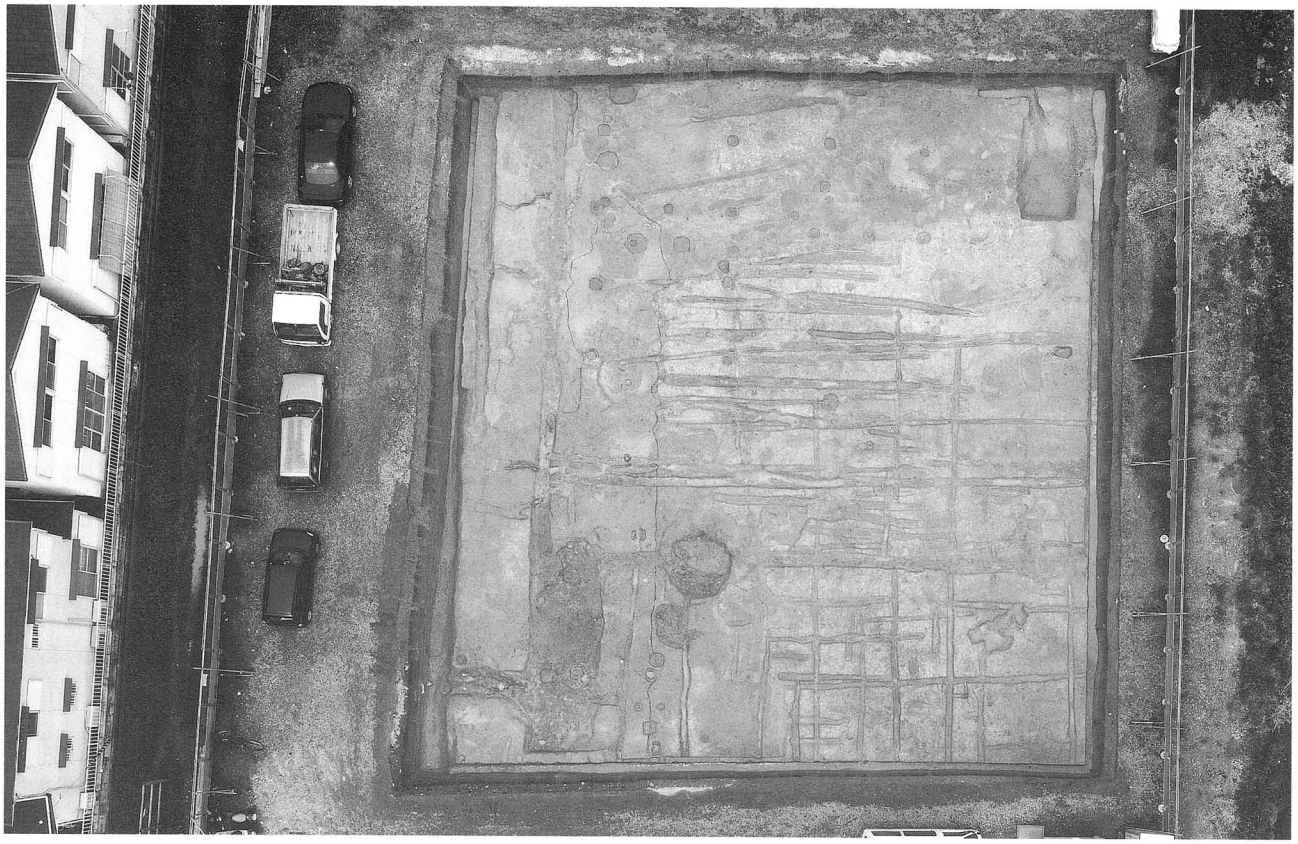
SX801　坪の西辺南北1/2付近で検出した整地層。重複関係から、SD107［459-4次］より古く、深さはほぼ同じ0.3mである。　（池田富貴子）



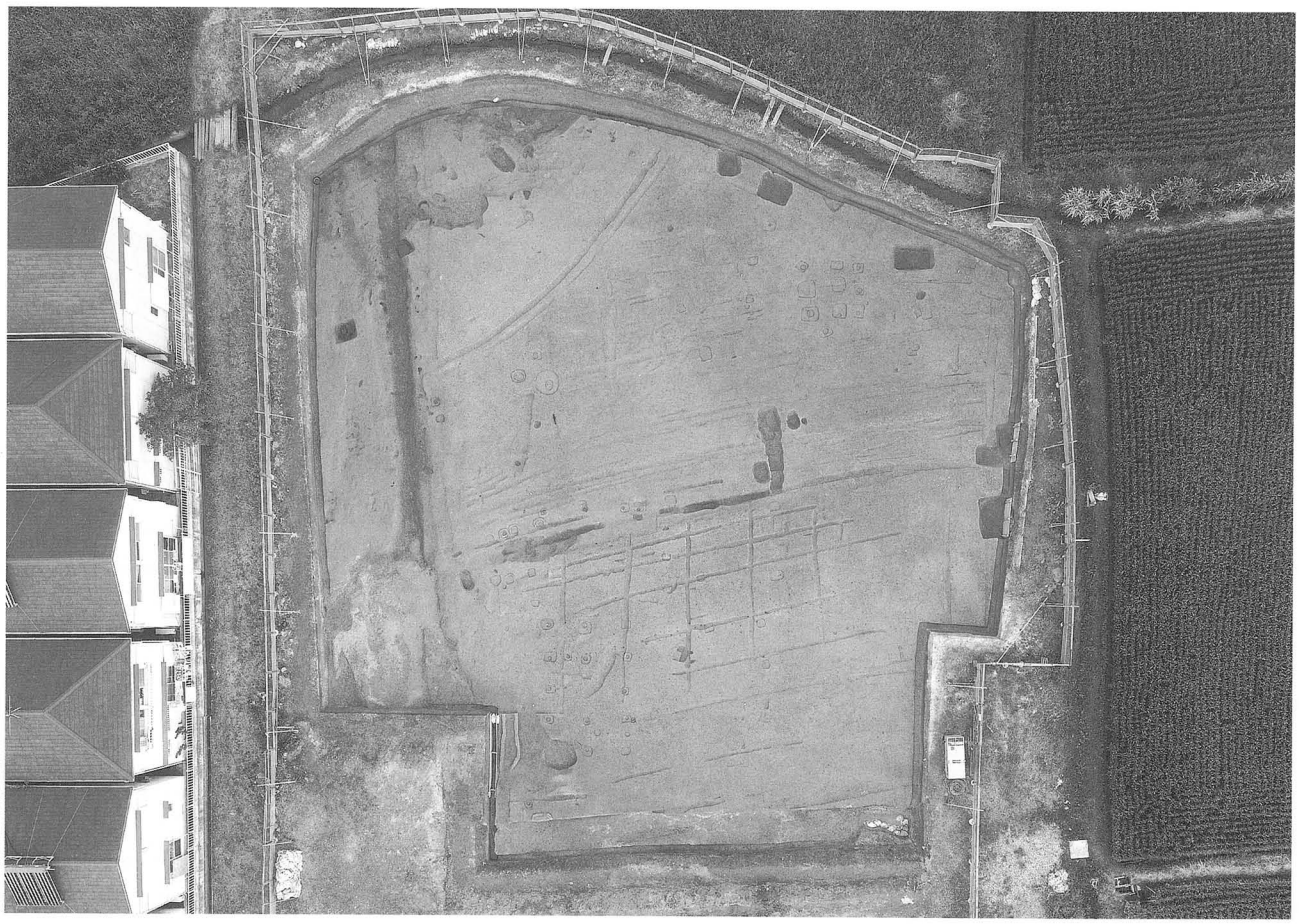
第459次調査　遺構平面図　1/400

第459-1次調査　発掘区全景（北東から）

第459-2次調査　発掘区全景（上が北）



第459-4次調査　発掘区全景（上が北）



第459-3次調査　発掘区全景（上が北）

Ⅲ．出土遺物

弥生・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代の遺物が、遺物整理箱135箱分ある。

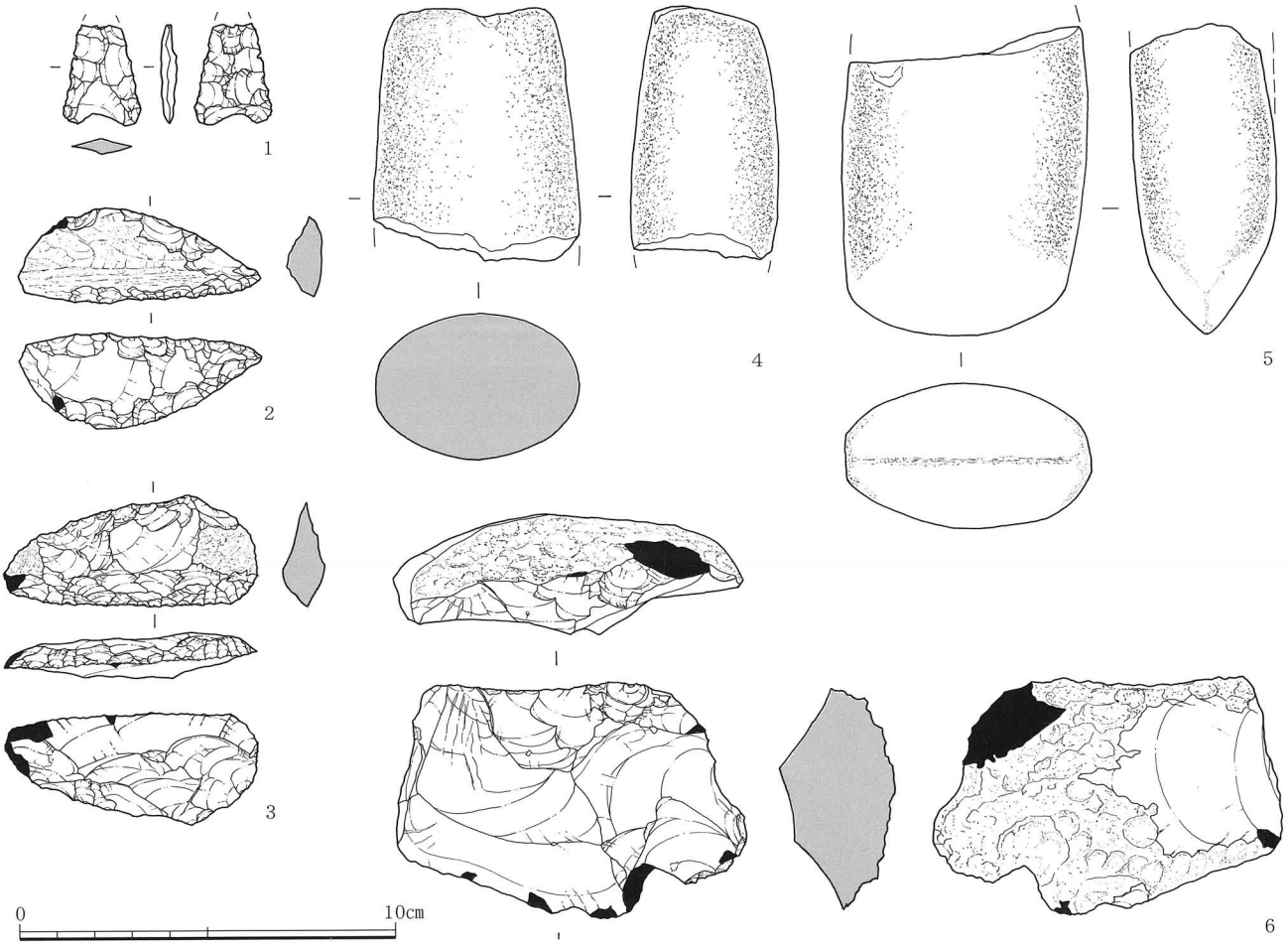
A．弥生時代の遺物

土坑SK01［459-2次］出土の一括遺物（土器・木製品）のほか、奈良時代以降の遺構、包含層からも少量の土器、石器が出土している。

石器（1～6）　1は石鏃。先端を欠損している。加工は粗く基部は非対称となっている。2は石小刀。周縁加工で、背面には自然面、腹面には素材面を大きく残す。3はスクレイパー。横長剥片の末端に細かな調整を行い、刃部を作出している。素材の打面側は表裏に加工を施し、厚みを整えている。4・5は太形蛤刃石斧。4は刃部側約1/2を、5は基部側約1/2を欠失している。6は石核。幅広の不定形な剥片が縦横から剥離されている。作業面下端の大きな剥離面は、他の面より時期的に古い面である。背面は自然面を大きく残すが、素材が分割された際に起こした大きなヒンジフラクチャーが認められる。1～3・6は安山岩製、4は砂岩製、5は凝灰岩製。安山岩製の石器は風化の度合いが弱く、石斧とあわせて全て弥生時代のものである可能性が高い。1・3がSD104［459-3次］、2・6がSD105［459-1次］、4がSD101［459-2次］、5がSD104［459-3次］最上層から出土。　（松浦五輪美）

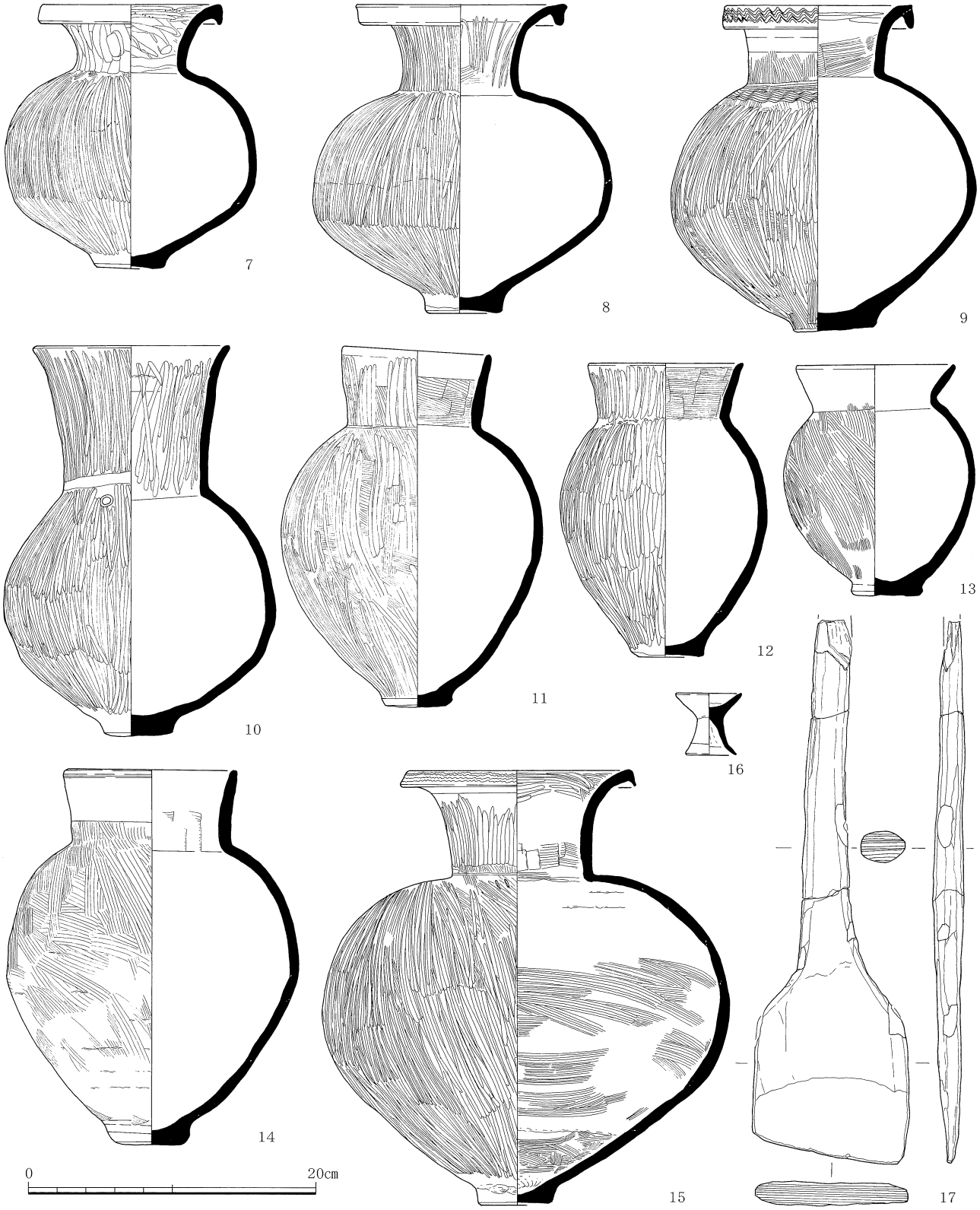
SK01出土土器・木製品（7～17、口絵1）

完存する弥生土器10点、壺・甕の破片82点と杓子形木製品1点がある。広口壺7～9・15は、いずれも口縁端部が垂下し、7～9は口縁端部を打ち欠いている。口縁端部や肩部に櫛描紋を施すものと、施さないものとがあり、後者は前者に比べ最大径が胴部の下半にあり、ややうずくまったプロポーションである。7の胴部外面と口縁部内面には、針状のもので刺突した跡が数点連なるが、紋様かどうかは不明である。15の肩部には、ヘラにより短い縦線が2条刻まれる。7・8・15の胴部下半に



第459次調査　出土石器図　1/2

は、成形時の明瞭な積み上げ休止線がある。いずれの広口壺も外面調整はハケの後、緻密なミガキを行う。内面調整は、7が下半を横方向のハケ、上半をナデ、8が下半をハケ、9が板状工具のナデ、15がナデ後ハケである。長頸壺10は、外面を緻密なミガキ調整し、胴部の内面をハケ調整する。肩部には竹管紋が1つある。短頸壺11～14には、外面がハケ調整のもの、その後にミガキ調整を行う



土坑SK01出土弥生土器・木製品図　1/4　　(7～14の体部内面の調整は作図不可)

ものがある。内面調整は、11がナデ後粗いハケ、12がヨコハケ後粗いナデ、13がハケ後ナデ、14がハケである。また11の胴部外面には煤が付着する。小型の高杯16は、杯部と脚部外面をナデ調整、脚部内面にはしぼり目が残る。杓子形木製品17は、柄の先端が欠損し、残存長は37.9cmある。身の長さ16.0cm、幅11.0cmで、片方の面を先端に向かって斜めに削り、刃を作る。刃先は一直線だが、偏った磨り減りがみられる。

SK01出土土器は、器種が限られるが、土坑に埋納された一括資料とみてよく、大和第Ⅵ－2様式[1]頃のものと考えられる。調査地の北東では、同時期の遺構、遺物が多く見つかっており、周辺に集落が想定されている。（中島和彦）

B. 奈良・平安時代の遺物

土器・土製品・瓦磚・金属製品・石製品・木製品・その他がある。

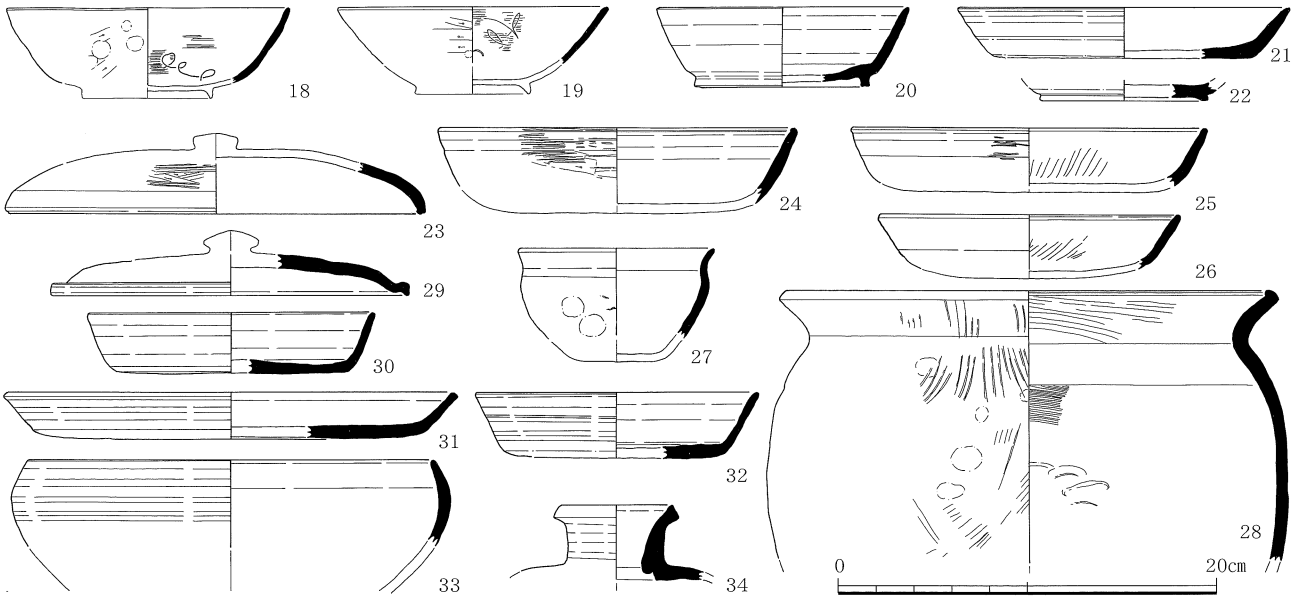
a. 土器・土製品　土師器・須恵器・黒色土器A類・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器・新羅土器・瓦質土器・瓦器・国産陶器・墨書土器・線刻土器・製塩土器・硯・竈・ミニチュア竈・土馬がある。SD101［459-2次］からは、遺物整理箱14箱分の土器が出土した。第1層から第4層まで層別にこれらの概略を述べる。

SD101第1層（18～22）　土師器には杯B・C、皿A・C、高杯、甕、甑、鍋がある。細片が多く、図示できない。須恵器には杯A・B（20）・C、皿A（21）・B、蓋、鉢、甕、壺がある。20は底部外面、21は口縁部外面下半から底部外面をロクロケズリで調整する。黒色土器A類椀（18・19）の口縁部外面は、ケズリの間に指頭圧痕が残る。口縁部内面には横方向のミガキと暗紋がある。緑釉陶器椀（22）の素地は軟質で、削り出し高台である。釉は底部内面に僅かに残る。第1層の土器は8世紀末～9世紀中頃が中心だが、18・19・22が9世紀末～10世紀前半で、最も新しい時期を示す。

同第2層（23～34）　土師器には、杯A（24～26）・C、皿A・C、椀A・C、蓋（23）、高杯、鉢、甕（28）、竈、甑、壺B（27）、ミニチュア竈、高台付鉢がある。23・24の口縁部外面は、ケズリの後ミガキ調整する。25の口縁部外面はミガキが残るが、ケズリの痕跡はない。25・26は口縁部内面に粗い斜放射暗紋がある。28は口縁部の特徴からA形態[2]に分類できる。体部外面はハケ調整し、指頭圧痕も残る。体部内面の調整はナデで、下半に当て具痕と思われる凹みが残る。須恵器には、杯A（30・32）・B・C・E、皿C（31）、蓋（29）、高杯、鉢A（33）・D、平瓶、横瓶、盤、壺G・

1）藤田三郎・松本洋明「大和地方」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』　木耳社　1989

2）甕の形態は、以下の文献の分類に拠る。古代の土器研究会編『古代の土器4　煮炊具（近畿編）』1996。



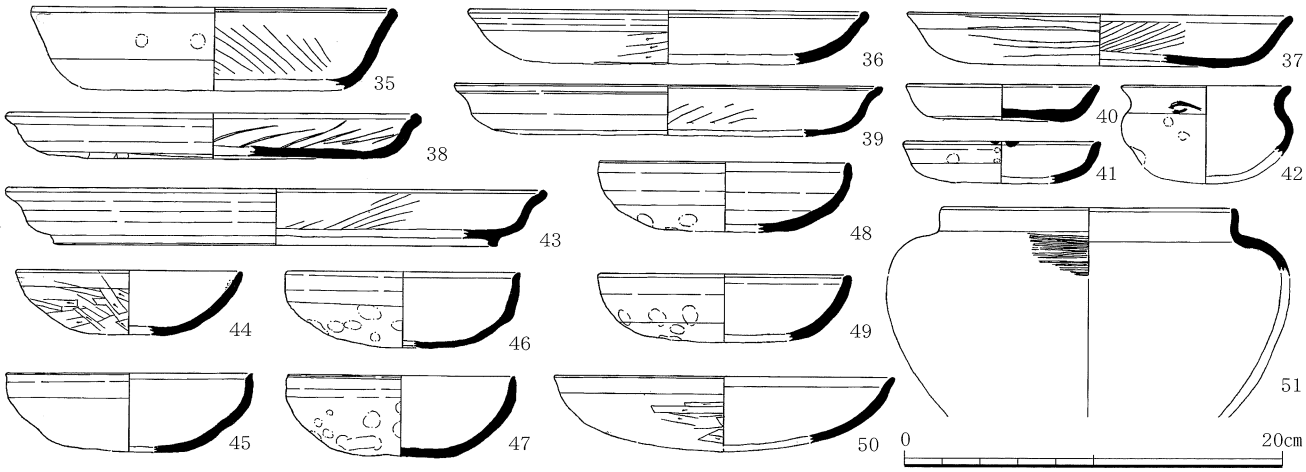
小路側溝SD101　第1・2層出土土器図　1/4

K、壺（34）がある。杯Aは口縁部外面下半から底部外面をロクロケズリで調整する。30の胎土は緻密で、ロクロケズリの部分の器面は滑らかである。31の口縁部内外面の調整はロクロナデ、底部内外面の調整は磨滅のため不明である。33の器面は磨滅しているが、体部外面にミガキの痕跡が残る。34は壺の頸部で、外面全体と頸部内面に自然釉がかかる。体部と頸部の接合は、二段構成である。他に黒色土器A類杯あるいは椀がある。第2層の土器の時期は、8世紀後半～9世紀初頭である。

同第3層（35～81）　土師器には、杯A（35）・B・C、皿A（36～39）・B（43）・C（40・41）、椀A（44）・C（45～48）、椀（49・50）、高杯、鉢、高台付鉢、盤、甕、竈、甑、鍋、壺A（51）・B（42）・E、壺蓋、ミニチュア竈・甑、土馬がある。35の口縁部上半はヨコナデで、指頭圧痕が残る。下半は磨滅が激しいが、ケズリと思われる。口縁部内面に斜放射暗紋がある。皿Aの口縁部は、36は全体が内彎する弧を描くB形態、37～39は、口縁部下半が内彎、上半が外反するA形態である。調整は36が外面全体をケズリ、37はケズリの後ミガキ。38・39は底部外面をケズリ。37～39には底部内面に螺旋暗紋、口縁部内面に斜放射暗紋がある。41の口縁端部に煤が付着する。42は人面墨書土器である。44の椀Aは口径11.8cm、外面全体をケズリで調整し、ケズリの間に指頭圧痕が残る。48は、口縁部外面のヨコナデの範囲が広く、底部から口縁部の立ち上がりも他の椀Cに比べ緩やかである。しかし口縁部のヨコナデ以下に成形時の指頭圧痕が残る調整方法から、椀Cとしておく。49の口縁部は内彎する弧を描き、内外面ともヨコナデで調整する。口縁部下半から底部外面に指頭圧痕が残る[3]。50は、口径17.9cmの大型の椀である。口縁部外面はケズリで調整する。49・50とも椀類としておく。

須恵器には、杯A（53～56）・B（59～63）・C・L（58）、皿A（67）・B（68）・C（64～66）・E、椀（57）、蓋（52）、高杯、鉢A（75）・D（76・77）、甕（81）、平瓶（70・71）、横瓶、盤、壺A蓋（69）、壺A（73）・E（79・80）・G・L（74）・M・N・Q（78）がある。52・58は金属器の形態を模している。52の頂部外面、58の口縁部下半はロクロケズリを施す。52の胎土は緻密で、削った器面は滑らかである。縁部内面に墨が付着し、転用硯であろう。杯Aは、53・54の口縁部外面下半から底部外面にロクロケズリを施す。57は底部外面をロクロケズリ、口縁部外面下半もロクロケズリの後、ロクロナデで調整していると思われる。杯Bは、59・62・63の底部外面をロクロケズリで調整する。61は墨書、62は線刻が底部外面にある。皿Cは、65の底部外面がロクロケズリ。67は、口縁部外面に筆ならしのような痕跡が残り、底部内面は調整が消滅するほど磨滅し、墨痕も所々に付着するので転用硯と思われる。68は分厚い底部に細い高台が特徴的な皿Bである。外面全体に自然釉が付着する。口縁部

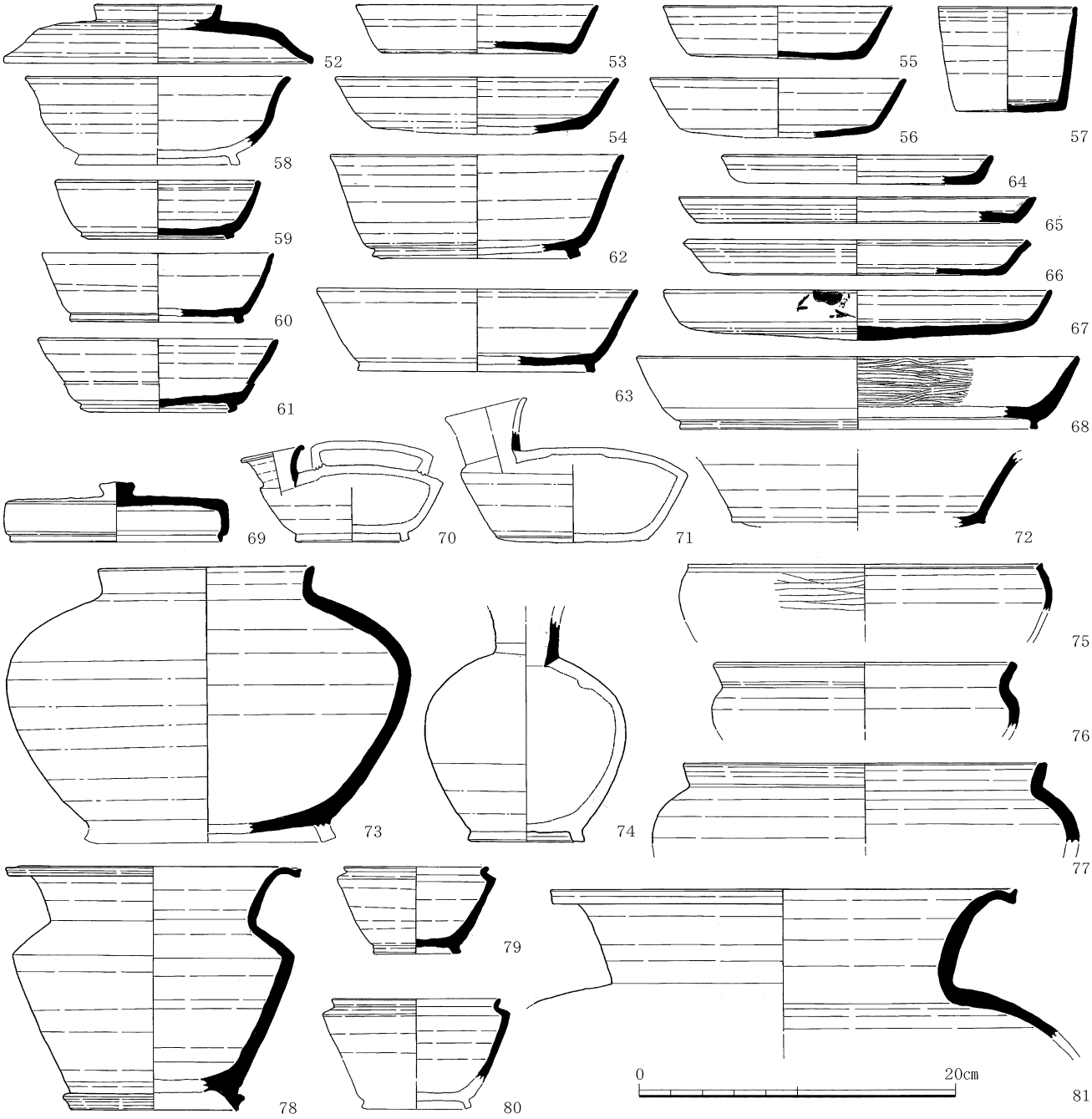
3）平城京左京八条一坊三・六坪の発掘調査でSG3500上層からこれに類似した椀が出土し、椀Xとして報告されている。奈良国立文化財研究所『平城京左京八条一坊三・六坪』奈良県教育委員会　1985



小路側溝SD101　第3層出土土器（土師器）図　1/4

内面にはミガキを施す。72は器種不明の破片である。稜椀、もしくは二重口縁の壺の可能性がある。稜は粘土を貼り付けて作られている。73の底部内面には、墨または漆の付着痕が残る。76の鉢Dは、胎土に砂粒を多く含む。79の壺Eの体部内面には漆が付着する。81の甕は、口縁部内外面と体部内面をロクロナデ、体部外面は自然釉のため調整の詳細は不明である。他に緑釉陶器椀、黒色土器A類杯あるいは椀がある。第3層の土器の時期は、第2層とほぼ同じ8世紀後半～9世紀初頭である。

同第4層（82～96）　土師器には、杯A（82・83）、皿A（84・85）、椀C、高杯、鉢（88）、甕（89・90）、竈、甑、壺B（86・87）がある。杯・皿の調整は、83・84の口縁部下半から底部外面にかけてをケズリとし、82・85の口縁部をヨコナデとする。4点とも暗紋を施す。84の底部内面には螺旋暗紋がある。88は平底の鉢で、口縁部内面のミガキ以外、磨滅して調整不明である。89・90は口縁部の特徴から、それぞれH形態・A形態に分類できる。89は、口縁部内外面と体部外面をヨコ



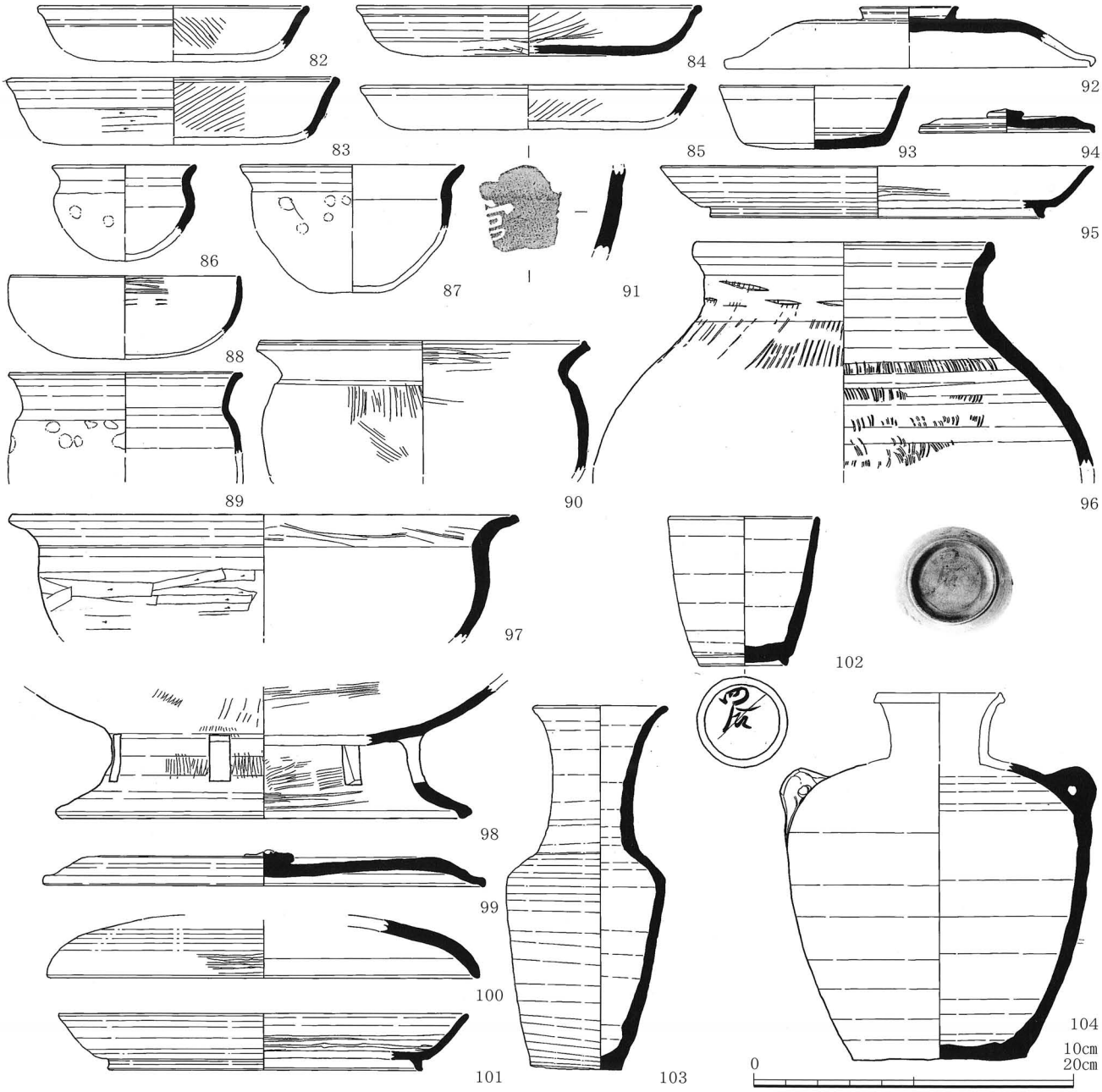
小路側溝SD101　第3層出土土器（須恵器）図　1/4

ナデ、体部外面をナデとユビオサエで調整する。須恵器には、杯A（93）・B、皿B（95）、蓋（92・94）、高杯、椀、鉢A・D、甕（96）、平瓶、横瓶、壺A、壺蓋がある。91は食器もしくは蓋の外面に「宮」または「官」の文字を刻印したものである。市第296次でも同様の刻印土器が出土している。95の皿Bは、口縁部内面にミガキのような痕跡が残る。口縁部下半はロクロケズリである。第4層の土器の時期は、形態的特徴から8世紀後半～末頃が中心と考える。

この他に、SD101からは、第2・3層にわたって破片が出土した土師器高台付鉢（98）、出土層位不明であるが、墨書のある須恵器椀（102）、壺G（103）なども出土している。102は底部外面に「四合」の墨書がある。103の底部外面には糸切り痕が残る。

また、SD101出土の須恵器にはロクロケズリ、ミガキ調整を行い、金属器を模した器形のものが多く見られるのも特徴的である。

他にSD104［459-3次］最上層出土の新羅土器がある。印花紋土器で、蓋あるいは、壺の肩部と思われる。8世紀のものと考える。　（池田富貴子）



小路側溝SD101　第4層、ほか出土土器図　1/4　（91は1/2）

b. 瓦磚

軒丸瓦6点・軒平瓦12点・丸瓦1,386点・平瓦3,050点・熨斗瓦19点・磚9点に分類できる。軒丸瓦の内訳は6140Aが1点、型式不明が5点で、軒平瓦の内訳は6572D、6668A、6671B、6685Aが各1点、平城京内で初めて出土した軒平瓦であるが、兵庫県加古川市の古大内遺跡出土瓦を標式名とする「古大内式軒平瓦」と同笵瓦が1点、型式不明が7点である。6140A・6685AはSD101［459-2次］第2層から、6572D・6668A・6671Bは同第3層から、「古大内式軒平瓦」は同第4層から出土した。

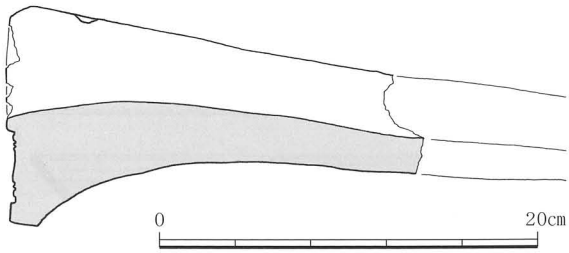
「古大内式軒平瓦」（105、口絵3）は、内区に5回反転均整唐草紋を飾る。唐草は各単位に山形の蕾を配置する。外区は珠紋を密に巡らす。瓦当面左端部に笵型を2度押しした痕がある。中心飾り直上の珠紋と、その左側の珠紋の2箇所に笵傷が確認できる。顎形態は顎面を持つ曲線顎である。凹面は瓦当上縁付近を横方向のケズリ、以下は狭端へ向けて縦方向のケズリを施す。凹面瓦当付近の両側縁には、横位の棒状圧痕が確認できる。凸面は縦方向のケズリを施し、顎面は横方向のケズリを施す。平瓦部の側面はケズリで成形し、のち凹面側の角を面取りする。兵庫県龍野市の小犬丸遺跡出土「古大内式軒平瓦」との実物照合を行った結果[4]、上記した笵傷が一致し、調整・成形技法も共通し、凹面の横位の棒状圧痕が残ることも同じであった。「古大内式軒平瓦」は、笵傷の進行の少ないものを甲類、多いものを乙類と分類でき、古大内遺跡では甲類、小犬丸遺跡では乙類が多く出土していると報告されている[5]。今回、出土したものは甲類で、比較的早い段階で生産されたものとわかる。「古大内式軒瓦」の出土は、ほとんどが播磨国内に限定されており、播磨国司の管理下において生産と配布がなされたと考えられている[6]。かかる瓦が、いかなる背景により平城京のこの地へもたらされたのかということは、非常に興味深い問題である。

平瓦には播磨産とみられるものが54点ある。106・107はその平瓦で、凸面に平行する縦位の線刻と各々斜行して交わる線刻を組み合わせた叩き目[7]を残し、その後、部分的に縦方向のナデを施す。凹面は糸切り痕と端面・側面に沿って布端圧痕が残り、粘土板1枚作りであると分かる。なお、凹面に縦方向のナデを数条施すもの（106）もある。熨斗瓦は播磨産とみられるものが19点ある。108・109・110はその熨斗瓦で、1枚作り平瓦を長軸に沿って半截して作られている。半截は焼成前に行われ、半截面はケズリで平滑に仕上げる。凸面のタタキメは、上記した平瓦と同様で、タタキの後、部分的に縦方向のナデを施す。凹面は糸切り痕と、端面・一方の側面に沿って布端圧痕が残る。小犬丸遺跡出土平瓦・熨斗瓦と比較した結果、叩き板が同じとまでは判断できなかったが、平瓦は特徴的なタタキメを残す1枚作りであり、熨斗瓦はそれを半截して作る点、平瓦の凹面の調整技法、熨斗瓦の半截面を平滑に仕上げる点は同じであり、いずれも播磨産の可能性が高いと考える。これら播磨産の可能性の高い平瓦・熨斗瓦の88％が459-2次調査で出土し、そのうち、75％がSD101からの出土で、SD102からは全く出土していない。以上のことから、播磨産とみられる瓦は、SD101の北側に想定される築地塀、またはそれ以北の九坪内の建物に葺かれていたものと考えられる。

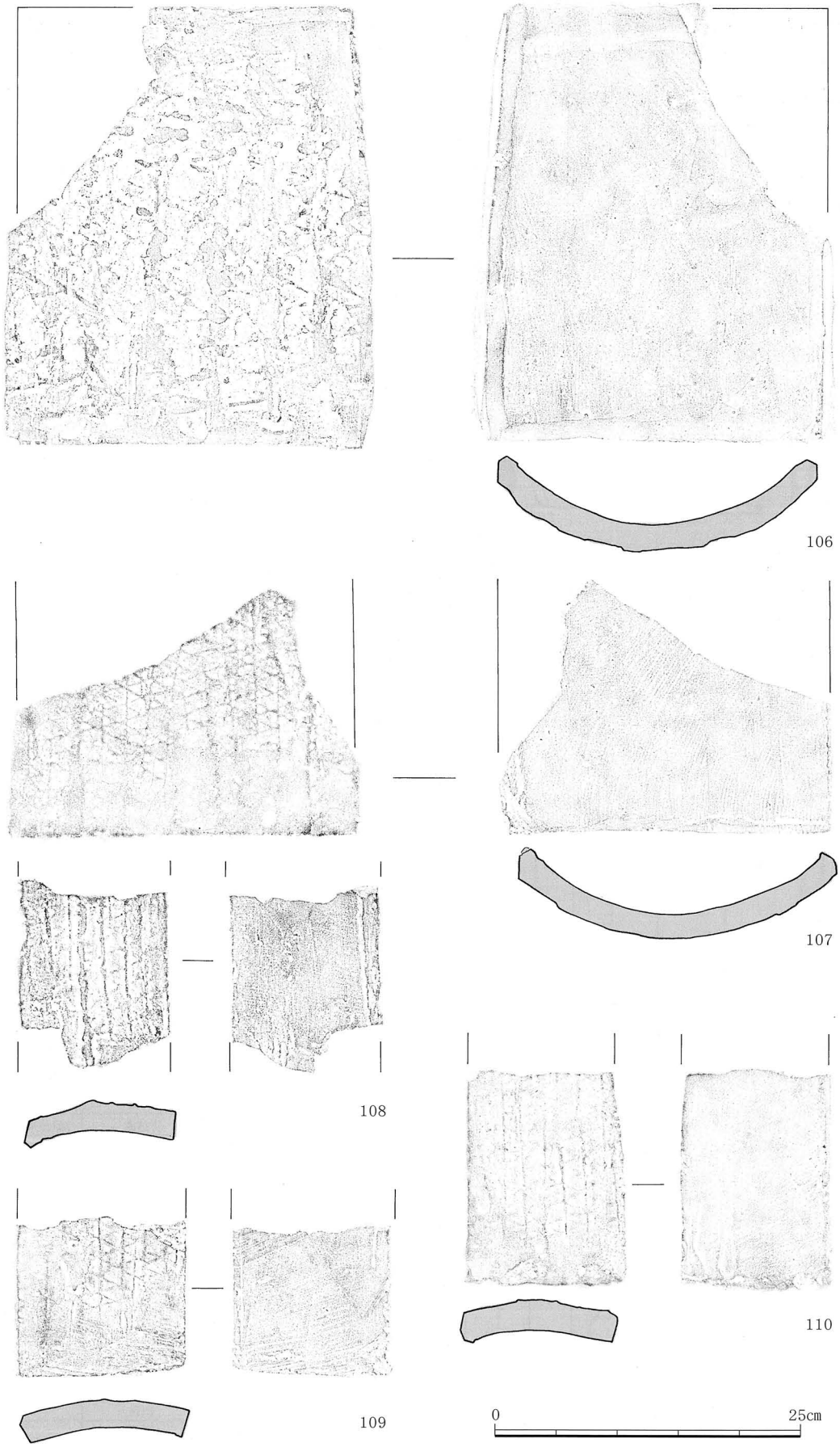
（原田憲二郎）

4）軒平瓦・平瓦・熨斗瓦は、龍野市教育委員会にて実物と照合した。
5）今里幾次「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布勢駅家-小犬丸遺跡 1990・1991年度発掘調査概報』龍野市教育委員会　1992。
6）註5と同じ。
7）平瓦AV類のタタキメに属すると見られる。山根実生子「第4章 第3節　瓦」『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会　1987。

105



小路側溝SD101出土軒平瓦図　1/4



第459次調査　出土平瓦・熨斗瓦図　1/5

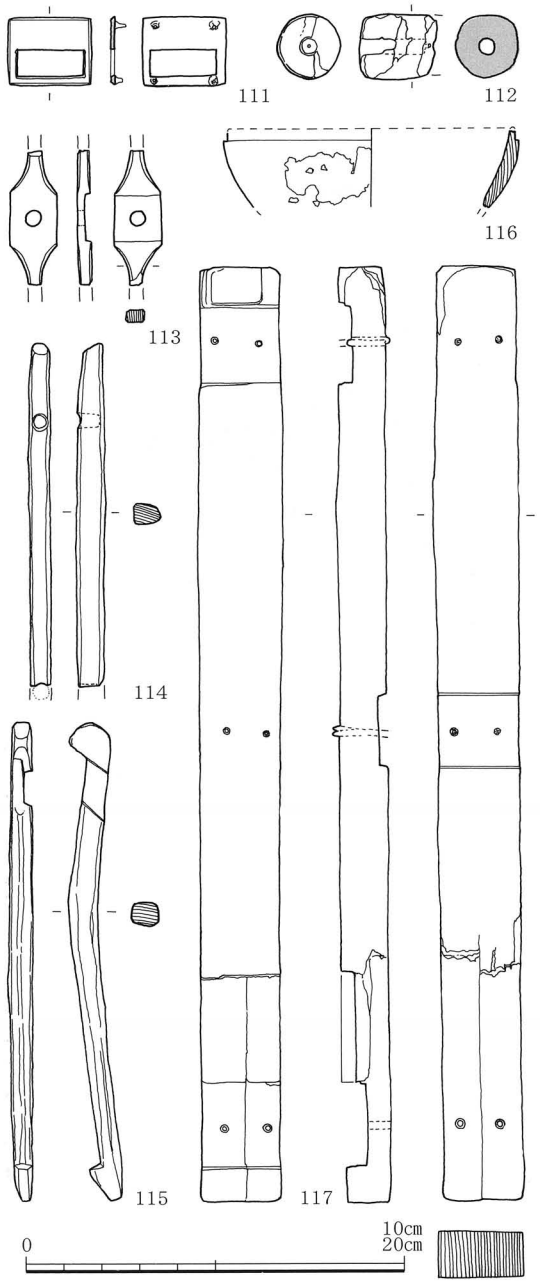
c. 金属製品・石製品・木製品

金属製品には、鉄釘、鉄刀子、銅製巡方、銅鈴、銅鋲などがある。石製品で用途の明確なものは砥石のみで、全部で9点出土している。木製品も用途の明確なものは少なく、多くは棒状断片である。

遺物の多くは、SD101［459-2次］から出土しており、そのうちの主なものについて述べる。

111は銅製巡方。縦1.9cm、横2.2cm、厚さ0.1cmで、0.7×1.9cmの長方形の透孔がある。透孔の四隅には最初に穿孔された痕が認められる。裏側には4つの鋲が残る。112は用途不明の石製品。直径3.3cmの円筒形で、中央に0.8cmの孔が開けられているが、深さ2.5cmより先は直径0.1cmの小さい孔となっている。図右側は欠損しているため本来孔が貫通していたかどうかは不明。砥石に用いられるのと同じ流紋岩製であり、あるいは特殊な砥石の可能性もある。113は糸巻きの横木、114は糸巻きの枠木。同一個体かどうかは不明であるが同じタイプのものである。115は鎌の木柄。刃の幅は2.3cmあったと思われ、柄に対して約130°の角度で刃がとりつく。116は漆器で、おそらく組み合わせ式の壺の下半部と思われる。外面には黒漆の膜が残る。117は部材と考えられるが用途不明。片面は両端部を、裏は中央を幅4cm、深さ約0.5cm、凹状に刳り込み2本ずつ木釘を打っている。格子状の板組の桟であると思われる。SD101からはこのほか、刀子片、銅鈴の断片が出土している。

なお、銅銭（和銅開珎2点、永楽通寶1点）がいずれも遺物包含層から出土している。



SD101出土木製品・金属製品・石製品図　1/4（111は1/2）

d. その他の遺物

SD101［459-2次］から、坩堝3点、鞴羽口2点が、いずれも破片であるが出土している。坩堝1点の内外面には濃緑色のガラスが付着しており、ガラス鋳造用である。同じくSD101からは多量の動物骨も出土している。出土した動物骨については下記の一覧表にまとめたが、このほかに多数の骨片がある。（松浦五輪美）

小路北側溝SD101出土動物骨一覧表

出土層位	種別	部　位	備　考
3層	ウマ	左右下顎骨	1個体分ほぼ完存。オス。
3層	ウマ	右下顎骨	4個体分。
3層	ウマ	犬歯	オス。
3層	ウマ	下臼歯	2個体分。
3層	ウマ	上歯	
3層	ウマ	中足骨	
3層	ウマ	左上腕骨	
3層	ウマ	右上腕骨	
3層	ウマ	中肢骨	
3層	ウマ	左寛骨	
3層	ウシ	下顎骨	
3層	ウシ	歯	
3層	シカ	中足骨	
3層	イノシシ	左上腕骨	
4層	ウマ	左右下顎骨	1個体分ほぼ完存。
4層	ウマ	中足骨	
4層	ウマ	臼歯	
4層	ウシ	左寛骨	
4層	不明	歯	オス。
—	ウマ	左下顎骨	
杭裏込め	不明	歯	

(4) 平城京跡（左京五条四坊十六坪）の調査　第468-4次

Ⅰ．はじめに

調査は、事業地の東端、平城京の条坊復原で左京五条四坊十六坪の東辺中央付近、東四坊大路に面する位置に470㎡の発掘区を設定して行った。現況は水田の荒蕪地であり、調査地中央の畦畔に東四坊大路の遺存地割をとどめている。

発掘区内の基本的な層序は、黒灰色砂質土の耕土以下、灰褐色砂質土、橙灰色粘土、黒灰色砂質土もしくは暗茶灰色砂質土と続き、地表下0.4～0.6mで黄褐色粘土を主とする地山（無遺物層）となる。地山は、東から西へ緩やかに下り、更に北から南に向かっても徐々に下がる。また、発掘区東部では、この黄褐色粘土の地山上に暗茶灰色粘土若しくは茶褐色粘土が堆積する。この堆積土中には弥生時代から古墳時代にかけての遺物が包含しており、一部に下層遺構の存在が窺えた。

発掘区内での地山の標高は、発掘区東で64.1m、東四坊大路西側溝東肩で64.0m、西側溝以西ではほぼ63.9mである。

Ⅱ．検出遺構

検出した遺構には、奈良時代以降のものと、弥生時代のものがある。奈良時代以降の遺構は、基本的に発掘区西側では黄褐色粘土の地山上面で、発掘区東側では、地山上面及び地山上に堆積する暗茶灰色粘土の上面に存する。一方、弥生時代の遺構は、発掘区南東部に堆積する暗茶灰色粘土もしくは茶褐色粘土を除去した後の黄褐色粘土の地山上面に存する。

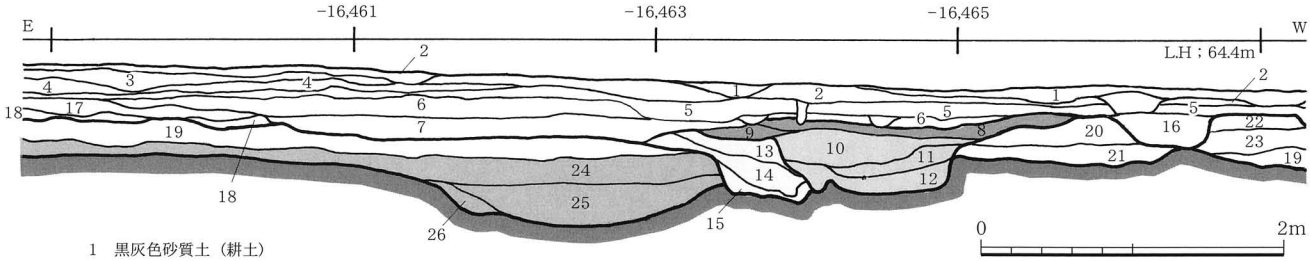
A. 弥生時代の遺構

検出した遺構には、溝1条がある。

SD01　発掘区南辺で検出した幅約2.5m、深さが0.6～0.7mの素掘りの溝である。U字状に屈曲する溝で、発掘区外南に続く。壁面は垂直に近く、溝底はほぼ平らである。埋土は暗灰褐色粘土、暗灰色細砂の2層に大きく分けられ、それぞれの層から弥生時代中・後期の土器が出土した。

また、この溝が埋没した後に堆積した暗茶灰色粘土及び茶褐色粘土中から、弥生時代の土器片とともに古墳時代初頭の土器片が併せて出土しており、周辺に古墳時代の遺構が存在する可能性も窺える。

溝SD01（弥生時代、南東から）



1　黒灰色砂質土（耕土）
2　橙灰色粘土
3　灰褐色砂質土
4　暗灰褐色砂質土
5　灰茶色粘土
6　淡灰褐色砂質土
7　黒灰色砂質土
8　暗茶灰色砂質土
9　灰色砂質土（8・9　SD103上層）
10　灰色土
11　茶灰色砂質土
12　黄褐色粘土（灰褐色土を含む）（10・11・12　SD103中層）
13　茶褐色粘土
14　茶灰色土
15　暗灰色粘土（13・14・15　SD103下層）
16　茶灰色粘土（柱穴埋土）
17　灰色細砂土
18　淡灰褐色粘土
19　暗茶灰色粘土
20　茶褐色粘土（マンガン多い）
21　茶褐色粘土
22　灰白色土
23　暗灰褐色粘土
24　暗灰褐色粘土（SD01第1層）
25　暗灰色細砂（SD01第2層）
26　淡灰色土（SD01第3層）

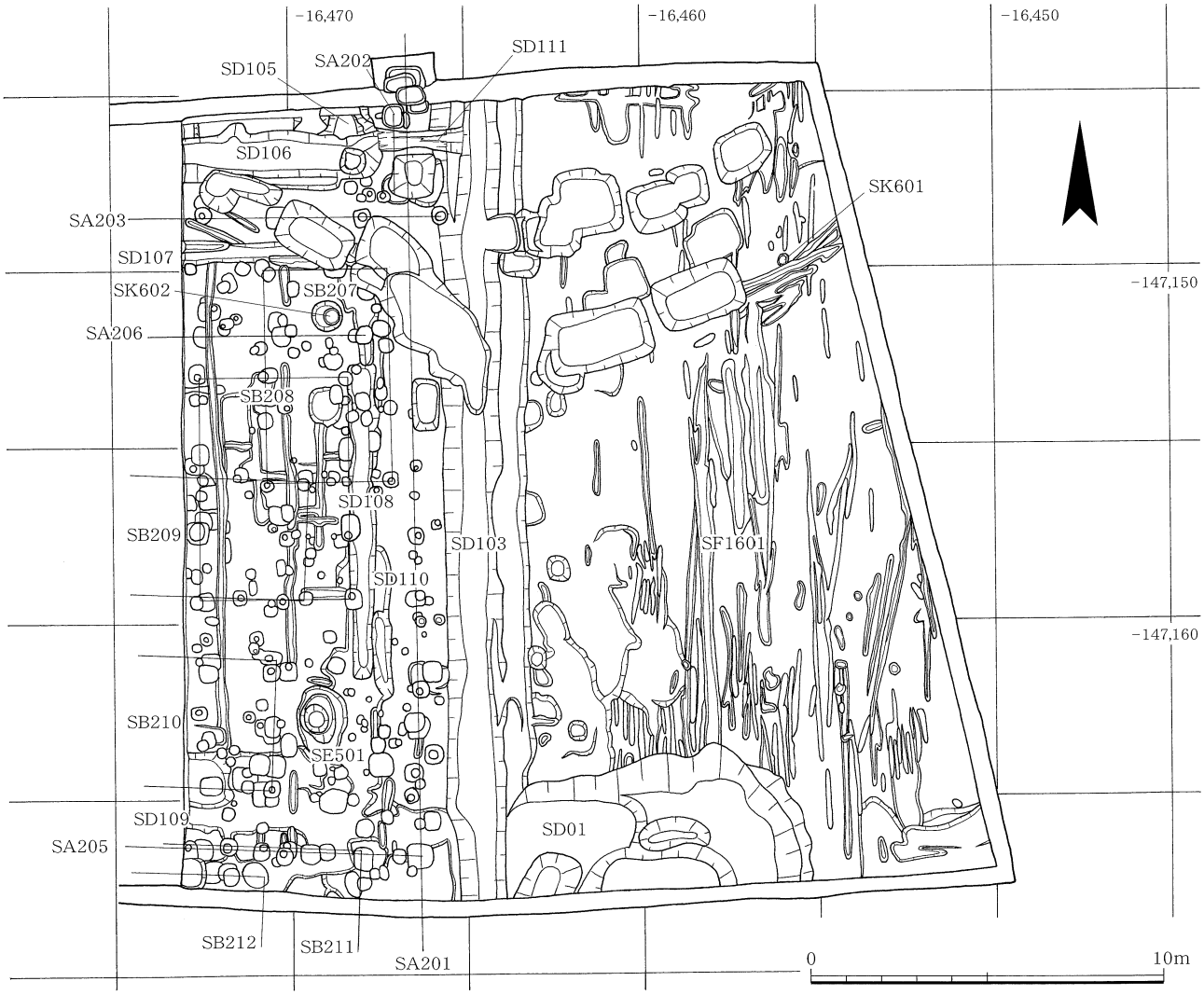
第468-4次調査　発掘区南壁土層図　1/50

B. 奈良時代以降の遺構

検出した遺構には、東四坊大路、東四坊大路西側溝、十六坪の東面を限る塀、宅地内を区画する塀及び溝、排水暗渠、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、溝、耕作に伴う鋤跡がある。

SF1601　東四坊大路である。東側溝を検出していないため幅員は確定できないが、西側溝東肩から約14m分の路面を確認している。今回の調査地の北、左京四条四坊での調査では、東西両側溝を検出しているが、その際の側溝心々間距離は約16mであった（第164・168次：昭和63年度、第377-1次：平成9年度）。路面上に舗装などの造作はなかったが、道路断面の形状が東から西への片流れとなる。路面から側溝に向けて徐々に下がることにより、路面排水の便を図ったものと考える。路面中央付近で、土器を埋納する土坑SK601を検出している。また、時期の詳細は不明であるが、路面上で、後世の水田耕作に際した鋤跡及び素掘りの溝を多数検出しており、このうちの１条から軒平瓦（6685型式C種）1点が出土した。

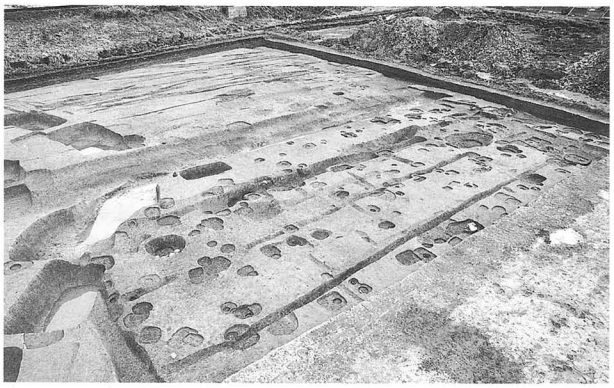
SD103　東四坊大路西側溝である。幅2.4～2.9m、深さが0.35～0.6mの素掘りの溝である。長さ約23mを検出した。発掘区南端で溝西岸に打ち込まれた杭を2本確認したが、その他の護岸造作は、今回の発掘区の中では認められなかった。宅地側の溝岸は路側に比して、垂直に近く落ちる。溝埋土は大きく3層に分けることができる。下層は、発掘区南端路肩の一部でのみ確認した堆積層であり、茶灰色粘質土、暗灰色粘土を主とする。路肩の浸蝕を補修するため埋められた層であろうか。中層は、側溝全体を通じて堆積する、灰色砂質土および茶灰色砂質土を主とする堆積層であ



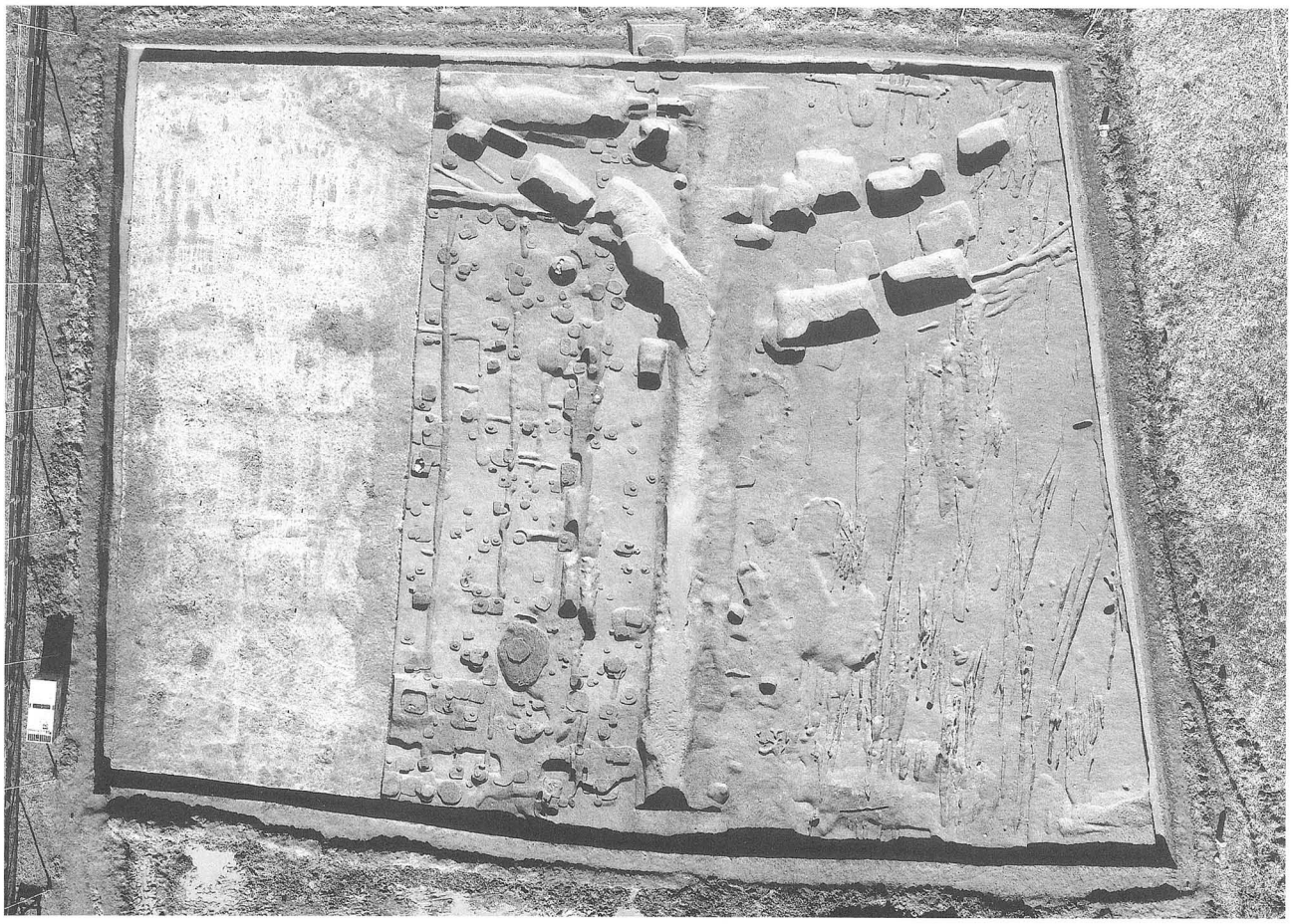
第468-4次調査　遺構平面図　1/200

東四坊大路西側溝SD103（南から）

十六坪宅地　全景（北から）



東四坊大路SF1601（北西、十六坪宅地側から）



第468-4次調査　発掘区　全景（上が北）

る。上層は、炭を多く含む暗茶灰色砂質土で、側溝の最終埋土となる。中層からは、多くの奈良時代後半～末葉の土器、瓦（うち軒平瓦6691型式1点）が出土した。また上層からも少量であるが、奈良時代末葉～平安時代初頭の土器、瓦（うち軒平瓦6229型式種別不明1点）が出土している。溝底の標高は、発掘区北端で63.6m、発掘区南端で63.5mである。側溝心の国土座標値は、X=－147,168.05m、Y=－16,464.40mである。側溝心は、発掘区内での計測ではあるが、国土方眼方位に対し、北で西に約0°30′43″の振れを示す。

東四坊大路西側溝の西側に、側溝に沿って幅約2mの空閑地がある。調査当初は、宅地の東を限る築地塀を想定したが、添柱の跡が無く、また空閑地中央に、後述の南北方向の掘立柱塀SA201が造られていることから、この塀をもって坪東面を限ると考え、現状では築地塀による閉塞は想定し難い。

SA201　坪の東を限る南北塀である。南北10間（17.7m）以上の掘立柱塀で、発掘区外南北に続く。残存する柱穴から想定すると柱間は6尺（1.77m）等間である。塀の主軸は側溝心の振れに平行する。北で坪内を区画すると考える塀SA203が、南で同じく塀SA205が取り付く。

SA202　発掘区北端で塀SA201に取り付く南北1間（2.5m）の掘立柱列。ほぼ同位置に造り替えがある。柱穴の掘形は、他の柱穴に比して規模が大きく、共に一辺0.7mの隅丸方形であり、深さも0.7mと深い。柱穴の底に、礎板が残る。暗渠SD801より構築順が新しいことが重複関係からわかる。門である可能性を考えるが、暗渠及び宅地内の溝との位置関係から現状では判然としない。

SA203　発掘区北辺で検出した東西3間（6.8m）以上の掘立柱塀である。塀の主軸は国土方眼方位に沿う。西へ更に続く。SA201に取り付くが、1間分側溝側に突き出る。坪内を南北1/2に分割する塀である。

SA204　SA201とSD103の間で検出した南北2間（4.3m）の掘立柱列。柱穴の残存状態は悪いが、本来南北に続くものと考える。

SA205　発掘区南端で検出した東西3間（5.6m）以上の掘立柱塀である。塀の主軸は西で北へ2°30′振れる。西へ更に続く。SA203から南へ60小尺（17.7m）の位置にあり、同じくSA201に取り付く。宅地内を細分する塀であると考える。

この坪内を区画する塀SA201、203、205に沿って以下の溝が巡る。各区画塀の雨落溝と区画溝を兼ねるものと考える。

SD105　発掘区北端で検出した幅2m、深さが0.4mの南北方向の素掘り溝。溝底の標高は63.66m。東四坊大路西側溝SD103に平行して北へ続く。南端でSD106に合流する。

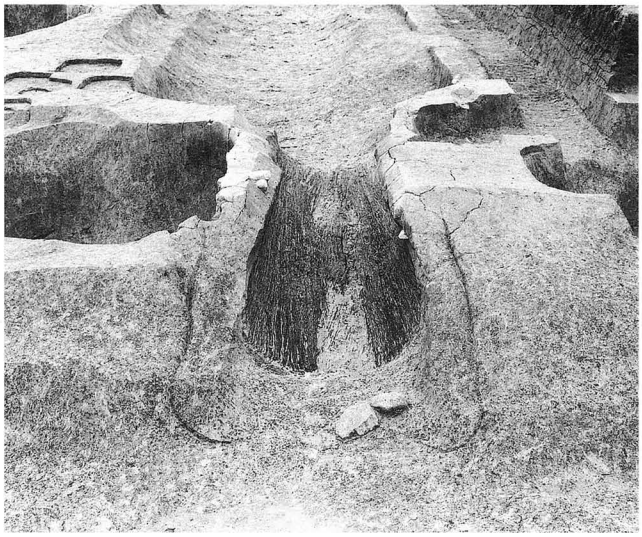
SD106　SD105と合流する幅1.2～1.7m、深さ約0.5mの、東西方向の溝である。北側は水の溢れによる浸蝕がみられるが、南側は垂直に掘り込まれた状態が残る。溝底の標高は63.57m。この溝の東端から東四坊大路西側溝SD103へ抜ける暗渠SD111が造られている。

SD111　SD106からSD103の間に幅0.85m、長さ2.1m、深さ0.5mの溝を掘り、径0.5m、長さ1.8mの丸太材を刳り抜き、樋として据え、暗渠としたもの。木樋は腐朽が進み、厚さ3㎜程度が残存するだけである。木樋溝底の標高は、西端で63.58m、東端の東四坊大路西側溝SD103側で63.57mである。

SD107　SD106から心々間距離約2.7mで南側に平行する東西溝。幅0.5m、深さは約0.2m。溝壁は垂直に掘り込まれた状態が残る。東でSD108に合流し、南へ曲がる。

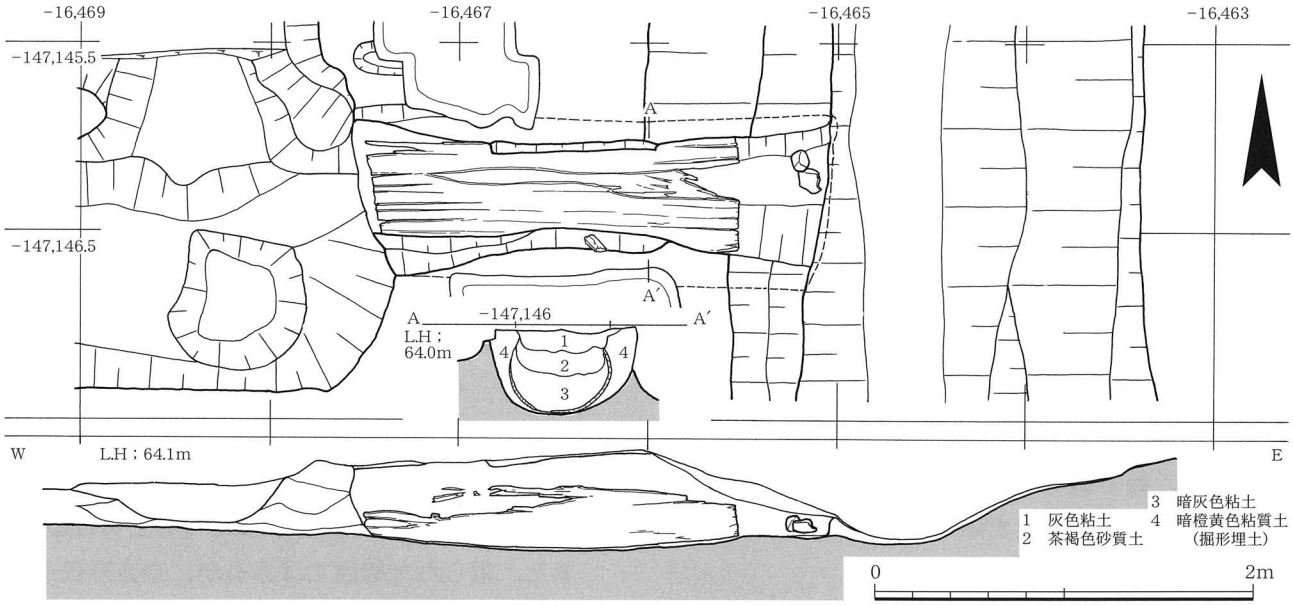
SD108　SD107から南に曲がり、東四坊大路西側溝SD103に平行する南北溝。幅0.7m、深さ0.2～0.3mである。南北長15mを検出した。東西溝SD109、SD107と繋がり、南北50小尺（15m）の範囲を巡る。これは、坪の南北約1/8にあたる区画となる。溝幅は、浸蝕により、南ほど広がる。いずれの溝の埋土からも、奈良時代末葉～平安時代初頭の土器が出土する。

SD109　SD108から西へ曲がる東西溝。西は、発掘区外へ続くため、東西方向の範囲は不明である。溢れにより、幅2.1mと他の溝よりも幅が広くなる。深さは0.2m。これらの溝の状態から見て、溝に囲まれた区域の水は、南へ集められていたで



暗渠SD111（東から）

SA203・SD106・SD107（西から）



暗渠SD111　平面図及び立・断面図　1／40

あろうことが窺える。

SD110　SD108に重複する南北方向の溝で、南北長4.4m、幅0.5m、深さ0.2～0.5m。埋土中には多くの炭が入り、奈良時代末葉～平安時代初頭の土器が多く出土した。重複関係からSD108よりも新しい。

SB207　SD107・108に重複する位置で検出した梁間2間（3.6m）、桁行3間（5.4m）の南北棟建物。SD107・108より新しい。

SA206　SB207に重複する東西2間（4.2m）以上の掘立柱塀。SD108よりも新しい。

SB208　SA206の南側で検出した梁間2間（4.2m）、桁行3間（6.3m）の南北棟建物である。重複関係からSD108よりも新しい。

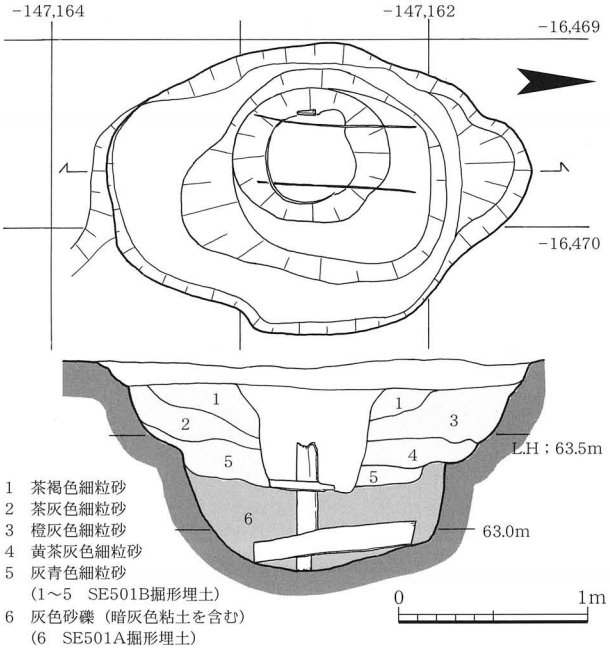
SB209　SB208に重複する梁間2間（3.3m）、桁行1間（1.8m）以上の東西棟建物。

SB210　SE501の西で検出した梁間2間（3.6m）、桁行1間（1.8m）以上の東西棟建物。柱穴埋土から奈良時代後半の土器が出土している。

SB211　SA205に重複する東西3間（3.9m）以上、南北1間以上の建物。SB210・211ともにSA501と方位を揃える。

SB212　発掘区南端で検出した東西1間（2.1m）以上の柱列。発掘区南及び西へ続く。

井戸SE501（北から）



井戸SE501　平面図及び立・断面図　1/40

SE501　発掘区南辺で溝SD108に近接して検出した井戸。同位置での造り替えがある。掘形は東西1.5m、南北2.1mの不整形な平面形を呈すが、これは井戸枠の抜き取りによるもので、当初は、一辺約1.5mの平面方形の掘形を呈していたものであろう。当初の井戸Aは、縦板組である。縦板の一部と水溜のための枠材が一部残存していた。後の造り替えられた井戸Bは、曲物を積み上げたものであり、最下部の1段のみが残存する。井戸Bの枠内埋土および掘形埋土から、奈良時代末葉～平安時代初頭の土器が多く出土した。

SK601　東四坊大路SF1601の路面で検出した、径0.3mの平面円形の小土坑。深さ約0.15m。埋土から奈良時代の須恵器高杯が出土した。

SK602　SD108に重複して検出した径0.8mの平面円形の土坑。深さ0.4m。底部に数個の石を据える。

Ⅲ．まとめ

事業地の東端で行った今回の調査では、東四坊大路とその西側溝を検出することができた。大路路幅を確定することはできなかったが、側溝の計画線の振れを知ることができた。側溝は出土遺物から見て少なくとも10世紀前半代までは機能していたことが窺え、調査地周辺の条坊遺構の廃絶時期を知る良好な資料となった。

一方、五条四坊十六坪の宅地内では、極めて遺構の密度が高く、数時期にわたる建替が行われていることが明らかとなった。さらに、宅地南北を2分の1に分割する塀を検出し、加えて8分の1に相当する区画を囲む塀および溝を検出したことから、宅地内を細分して利用していることも明らかとなった。今回の調査では、宅地内での調査範囲が限られていたため、利用形態、時期区分等についての詳細を知るには至らなかったが、平成14年度以降の調査により明らかになるものと考える。

また、限られた範囲ではあるが、奈良時代遺構面の下層で、弥生時代の遺構を検出している。併せて、古墳時代の遺物包含層の存在も確認することができた。これらは発掘区外に続いており、今後の周辺の調査で、更に下層遺構の広がりを確認できるものと考える。

この他、今回の出土遺物の中に凸面布目平瓦が2点あることがわかった。東四坊大路西側溝SD103中層埋土と、宅地内の区画溝SD105上層埋土から1点ずつ出土している。この瓦は、これまで平城京域では大安寺旧境内のみで出土することが知られていたものである。わずか2点であるが、今後の周辺の調査において更に類例が知られる可能性もあり、今後の留意点として特記しておく。

（立石　堅志）

2. 平城京跡（左京四条五坊）・三条遺跡の調査　JR奈良駅周辺土地区画整理事業に係る発掘調査

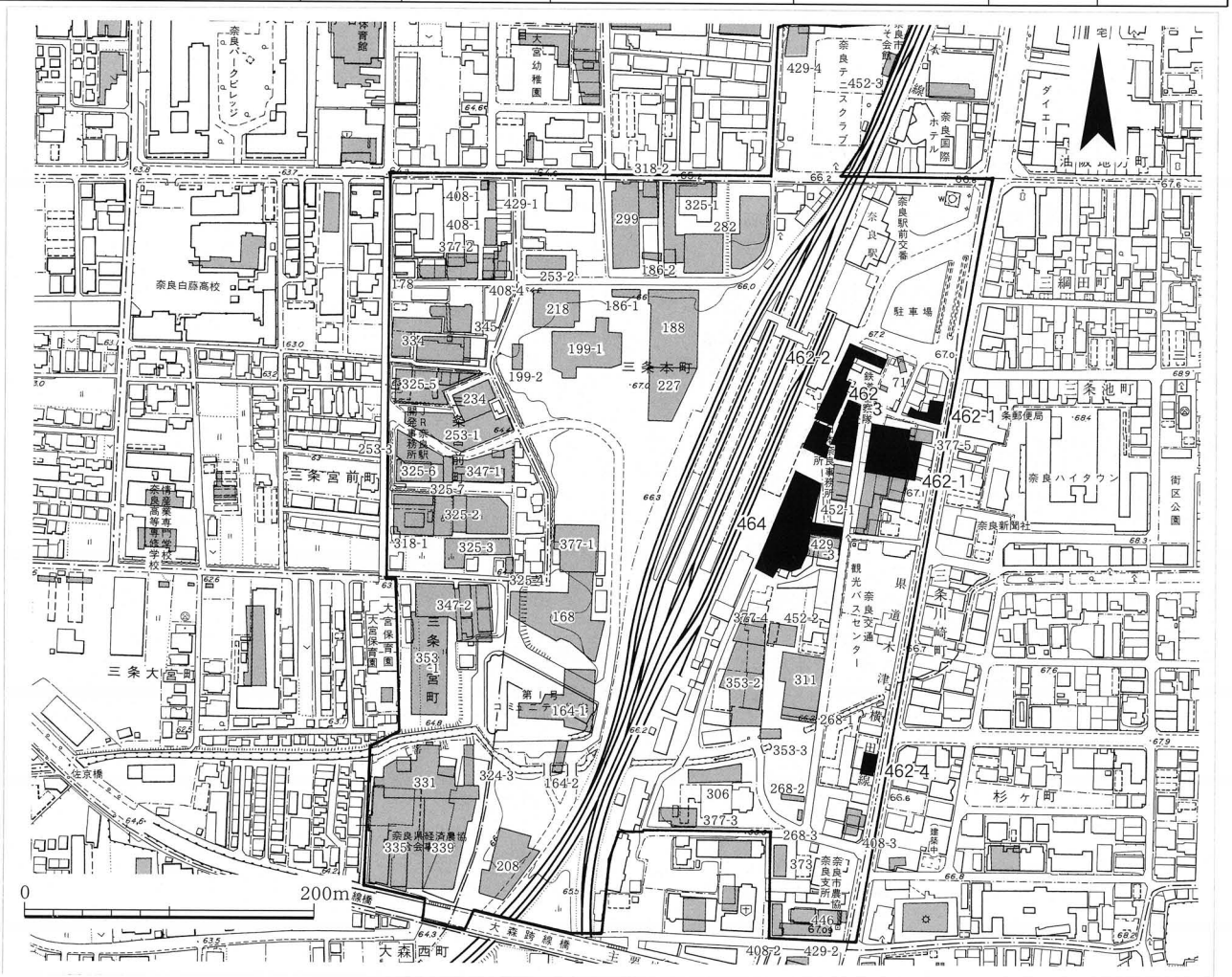
この調査は、奈良市がJR奈良駅周辺で進めている土地区画整理事業に係り実施したものである。市教育委員会では、昭和63年度から事業地内の発掘調査を実施しており、これまでに駅西側は、ほぼ調査が終了している。今後数年で駅東側についても調査を完了する予定である。

平成13年度は、駅の東側において、臨時交付金事業として4箇所、通常事業として1箇所、合計5,140㎡の調査を実施した。その結果、初年度からの総調査面積は46,033㎡になった。

調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条五坊五・七坪にあたる。ここでは、坪ごとにまとめて報告する。なお、本文中の遺構番号は、事業地内で坪ごとつけている通し番号である。

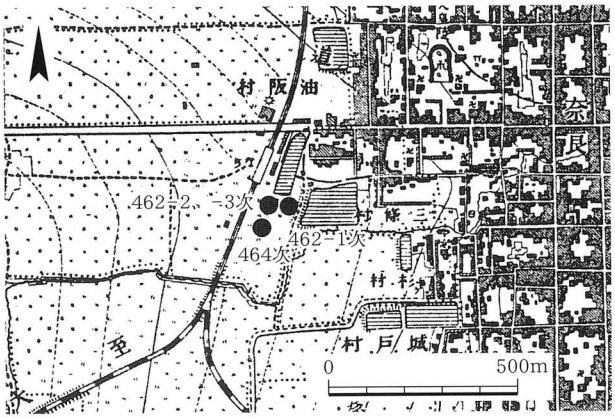
平成13年度　JR奈良駅周辺土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

遺　跡　名	調査次数	事　業　名	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	462-1	臨時交付金事業	三条本町273-1、-3、-5、-8～-10、ほか	H13. 6. 4～ 8.23	1,450㎡	宮崎・安井
三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	462-2	臨時交付金事業	三条本町269-1、-9～-11、270-2-1、ほか	H13. 8.27～ 10.19	1,100㎡	安井・宮崎
三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	462-3	臨時交付金事業	三条本町270-8～-11、-15、522、ほか	H13.10.22～ 12. 3	540㎡	安井
平城京跡（左京四条五坊五坪）	462-4	臨時交付金事業	三条本町327-4、ほか	H13.11.19～ 12. 3	100㎡	久保邦
三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）	464	通常事業	三条本町266-1、-2、ほか	H13. 7.23～ 11.26	1,950㎡	池田裕・久保邦



JR奈良駅周辺土地区画整理事業地内の調査　発掘区位置図　1/5,000

(1) 三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）の調査　第462-1～-3、464次



明治時代中期の調査地周辺　1/20,000

Ⅰ．はじめに

調査地は、笠置山地西麓に形成された能登川扇状地の扇端部に位置し、平城京の条坊復原では、左京四条五坊七坪の西半部及び東半部中央付近にあたる。現状は戦前に開発された宅地や国鉄（現JR）の用地で、旧状は水田である。また、明治時代中頃の地形図から、今回の第462-2次調査地の北寄りが当時池であったことがわかっている。

七坪内では過去に3回の調査が行われている。今回の第462-1次調査地の北隣接地で実施した市第71次調査（昭和59年度）では、前述の池の埋土とみられる腐植質の粘土層を、市第377-5次調査（平成9年度）では時期不明の掘立柱建物、溝、近世以降の埋甕遺構をそれぞれ確認した。また、同南隣接地で実施した市第452-1次調査（平成12年度）では、時期不明の掘立柱列、奈良・平安時代の河川、中・近世の粘土採掘坑群を確認した。

今回の調査は、七坪内の様相の確認を主な目的として実施した。また、地域史の観点も考慮して、その前後の時代における土地利用の様相の確認にも留意した。

Ⅱ．調査の概要

A. 層序

七坪の北半にあたる第462-1～-3次発掘区と、南西部にあたる第464次発掘区では様相が異なる。

第462-1～-3次発掘区　基本的には造成盛土（厚さ0.4～0.6m）、水田耕土（厚さ0.2m）、床土の灰色砂混じりシルト層（厚さ0.1m）の下で扇状地堆積層（無遺物層）の地山である黄灰色や青灰色のシルト・粘土層上面（標高65.5～65.8m）となる。この面は弥生時代から近世にかけての遺構の存する面で、東から西に緩やかに下る。

ただし、第462-2次発掘区中央部の後述する弥生・古墳時代の区画遺構SX11の付近では、水田耕土・床土の下に洪水で形成されたとみられる灰色シルト・砂層（厚さ0.2m、近世の陶磁器片を含む）、水田耕土とみられる灰色粘土混じりシルト層・暗灰色砂混じりシルト層（厚さ0.2m、弥生土器や近世の陶磁器片を含む）の2層をはさんで地山上面（標高65.2m）となる。第462-2次発掘区北部分では、後述する明治時代の池の掘削工事により、遺構の存する面は破壊されている。

第464次発掘区　発掘区の北半では、造成土（厚さ1.0～1.3m）、水田耕土（厚さ0.1～0.3m）、床土の暗茶黄色粘質土層（厚さ0.1～0.3m）、灰褐色砂質土層（厚さ0.1m）の下で、地山の黄褐色粘土層（無遺物層）の上面（標高64.8～65.0m）となる。この面は弥生時代から近世にかけての遺構の存する面で、東から西へ緩やかに下る。

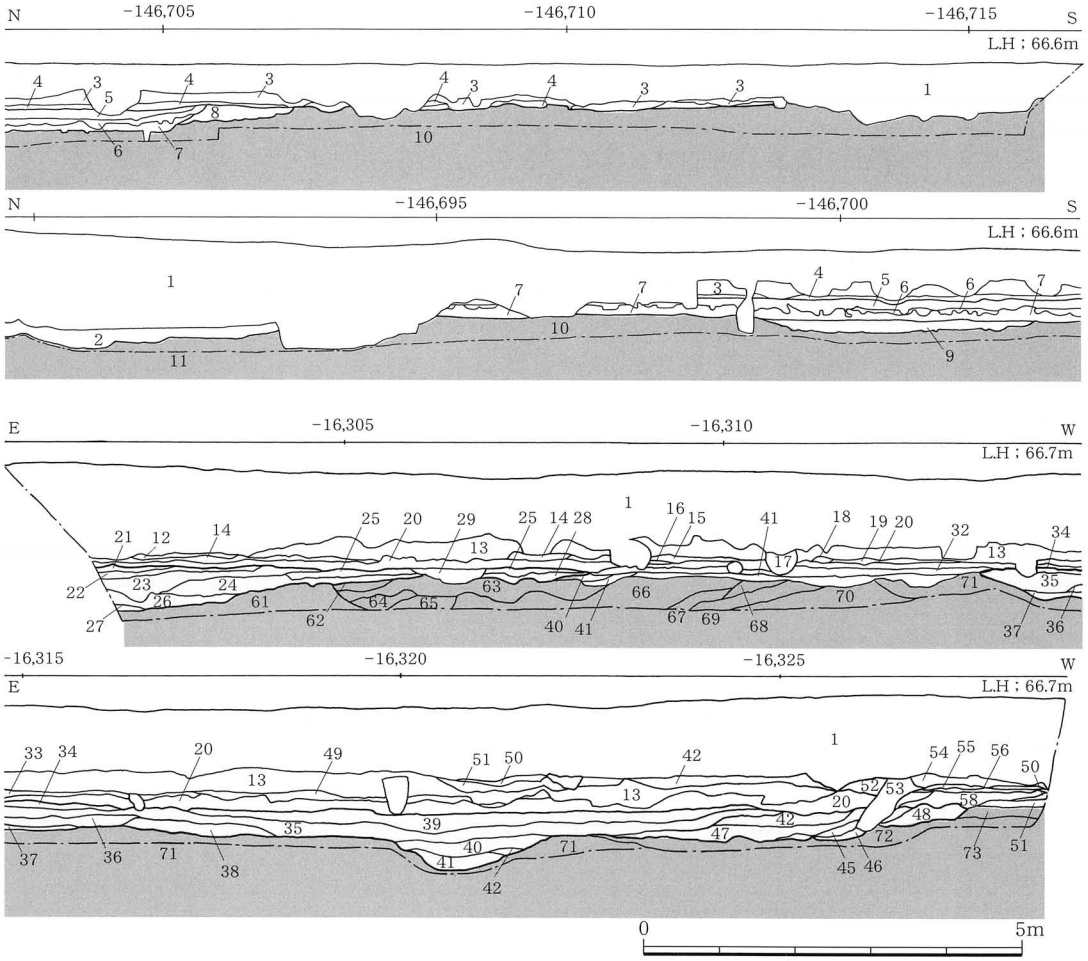
発掘区の南半では、基本的には水田耕土の下に灰色や灰褐色のシルト層、あるいは地山の黄褐色粘土ブロックで形成された床土が10層程度（厚さ0.9m）あり、中世の水田に伴う整地層である橙褐色砂質シルト層（厚さ0.2m）、奈良～平安時代の河川05の埋土である灰色砂・シルト層となる。ただし西辺部では、水田耕土上面が約0.7m低くなっており、水田耕土下の床土も2層程度（厚さ0.3m）である。橙褐色砂質シルト層上面の標高は64.5mである。

B. 検出遺構

第462-1～-3次発掘区では地山上面で、第464次発掘区では地山及び河川05の埋土である灰色砂層、中世の水田に伴う整地層である橙褐色砂質シルト層の各上面で遺構検出を行い、弥生時代から明治時代にかけての遺構を確認した。

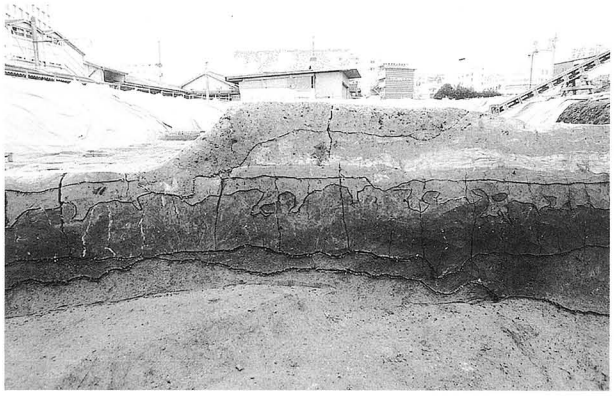
a. 弥生・古墳時代の遺構

溝2条（SD07・08）、土坑2基（SK09・10）、

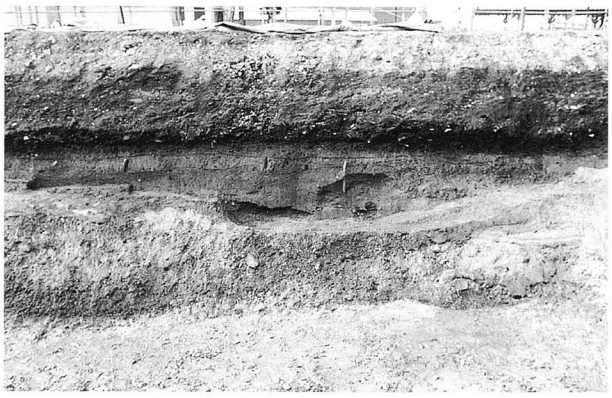


1　造成盛土
2　黒色腐植混じりシルト（明治時代池埋土）
3　暗青灰色砂質シルト
4　灰色砂混じりシルト（床土）
5　灰色シルト・砂（洪水層）
6　灰色砂混じりシルト
7　暗灰色砂混じりシルト（3・6・7：水田耕土）
8　暗灰色砂礫混じりシルト
9　灰色粘土混じりシルト・砂（SX11濠埋土）
10　青灰色シルト混じり粘土
11　灰色砂礫（10・11：地山）
12　暗青灰色粘質土
13　灰褐色砂質土（12・13：水田耕土）
14　茶灰色土
15　橙灰色砂質土（14・15：床土）
16　白灰色土
17　緑灰色土
18　暗灰褐色土（16～18：溝埋土）
19　暗黄茶色砂質土
20　暗茶黄色砂質土（19・20：床土）
21　暗灰茶色土
22　橙灰色土・褐灰色土
23　灰色砂質土・茶橙色土
24　灰色砂質土
25　灰褐色砂質土
26　暗茶黄色土
27　橙灰色砂質土
28　茶黄色土（21～28：河川05埋土）
29　灰褐色土
30　茶褐色土・灰褐色土
31　茶黄色土・灰褐色砂質土
32　暗灰褐色砂質土
33　橙茶色土・褐茶色土（32・33：床土）
34　黄茶色土・灰褐色砂質土
35　橙茶色土・灰褐色粘土
36　灰褐色粘土
37　青灰色土
38　暗紫灰色土
39　茶灰色土
40　灰色粘土（茶橙色土混じる）
41　暗灰色粘土
42　淡灰色粘土
43　灰褐色粘質土
44　茶灰色粘土
45　暗茶灰色粘土
46　淡灰褐色シルト
47　暗茶灰色土
48　暗茶灰色土（34～48：SD13埋土）
49　淡灰褐色土（橙茶色土混じる、床土）
50　黒灰色土
51　淡緑灰色粘土
52　暗白灰色砂質土
53　茶黄色粘質土・灰褐色土
54　淡褐灰色砂質土
55　暗灰色土
56　暗灰色粘質土
57　黄茶色粘質土
58　暗灰紫色土・茶褐色土
59　茶黄色土
60　暗茶褐色砂質土
61　橙黄色土
62　灰褐色粗砂
63　茶黄色砂土
64　橙茶色粗砂
65　茶黄色粗砂
66　茶灰色粗砂
67　黄褐色粗砂
68　黄灰色シルト
69　茶黄色砂
70　暗褐灰色粗砂
71　茶褐色砂礫
72　茶黄色粘質土
73　淡黄灰色シルト（61～73：地山）

上2段：第462-2次調査　発掘区東壁断面図　　下2段：第464次調査　発掘区北半南壁断面図　1/100



第462-2次調査　土層（X＝－146,703ライン、右が東）



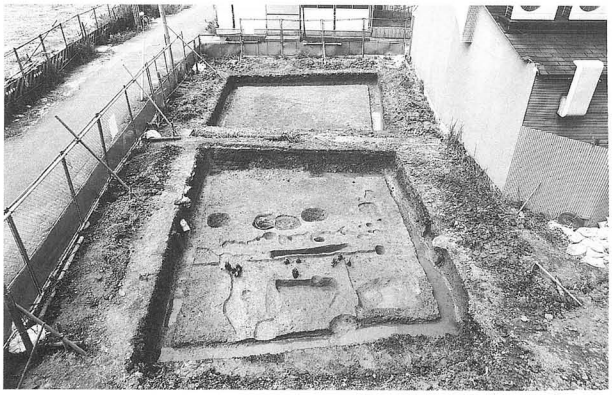
第464次調査　発掘区西壁（南半）土層（東から）

第462-1次調査　南発掘区　全景（上が北）

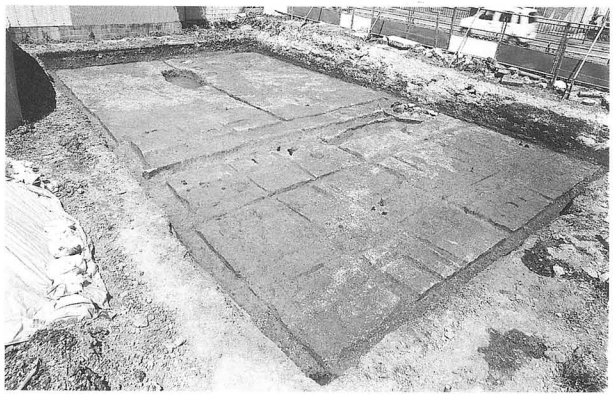
第462-1次調査　南発掘区　全景（南から）

第462-1次調査　南発掘区　全景（北西から）

第462-1次調査　遺構平面図　1/400
（第377-5次調査の遺構番号は、今回の報告にあたって、変更した。）



第462-1次調査　北発掘区　西半（東から）

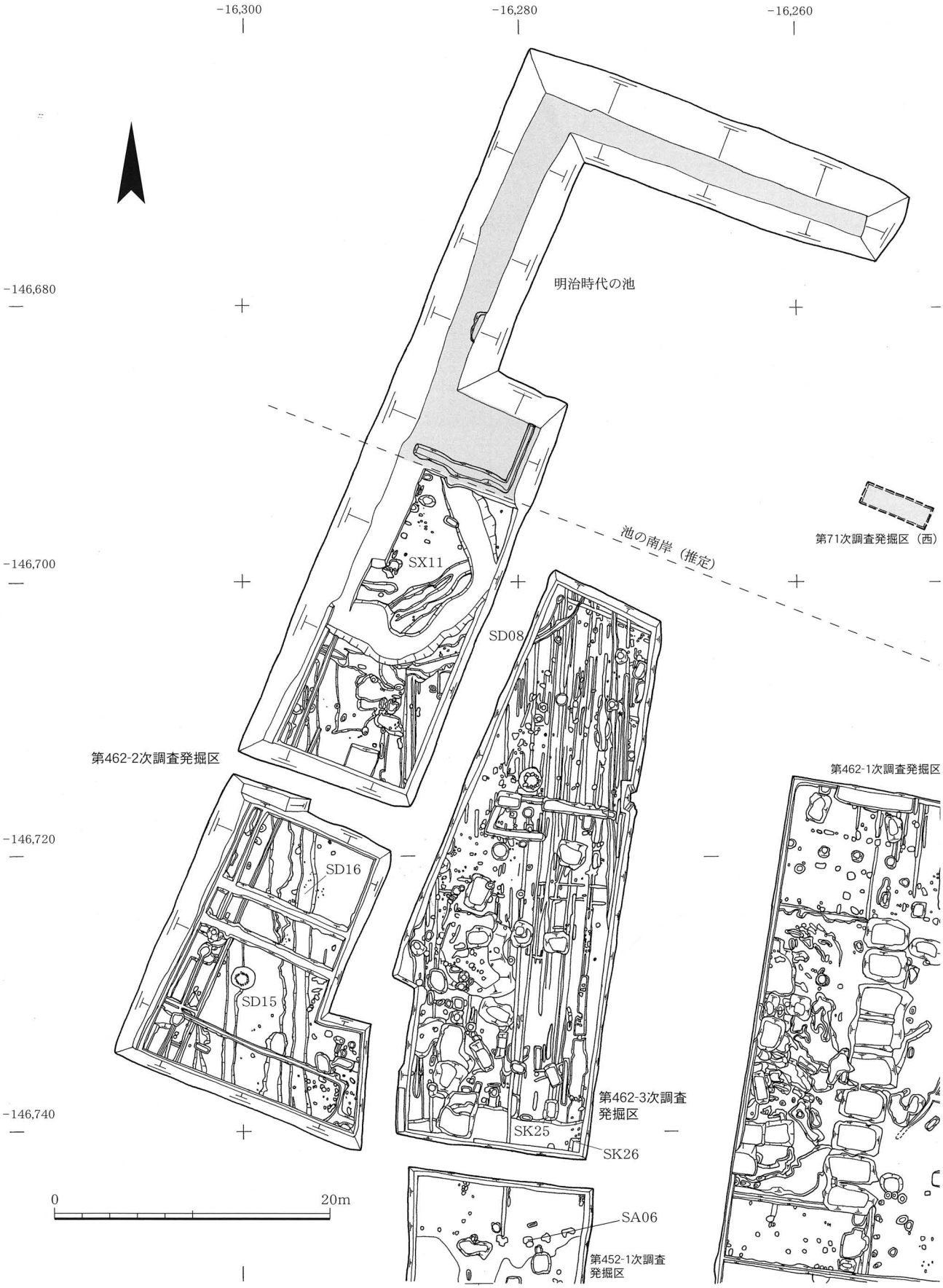


第462-1次調査　北発掘区　東半（南西から）

第462-2、-3次調査　発掘区　全景（上が北）

第462-2次調査　発掘区　全景（南から）

第462-3次調査　発掘区　全景（北から）

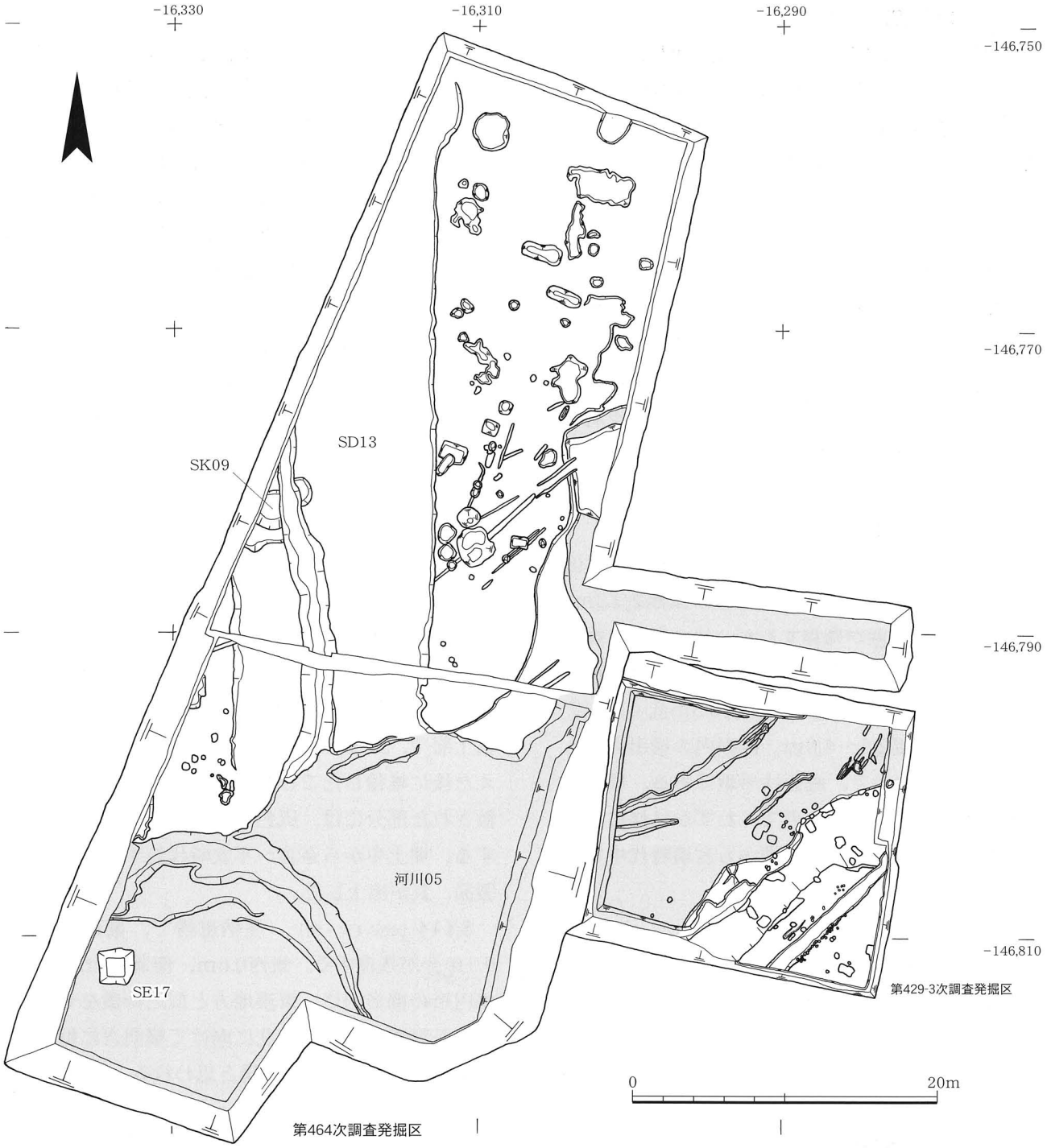


第462-2、-3次調査　遺構平面図　1/400

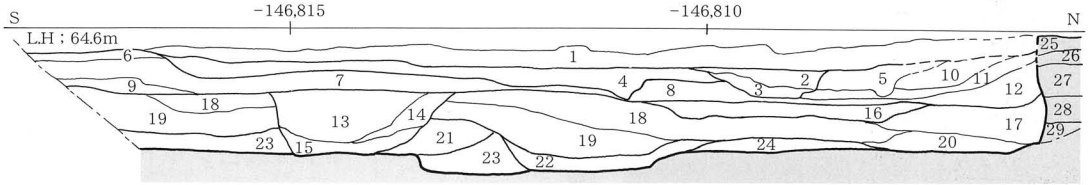
第464次調査　発掘区　全景（上が北）

第464次調査　発掘区　北半（北から）

第464次調査　発掘区　南半（南西から）



第464次調査　遺構平面図　1/400



1　橙褐色砂質シルト(中世水田床土)
2・4・5・9・10　灰色砂・シルト
3　灰色細～中礫
6　灰色砂礫
7　灰色細礫～砂（正級化）
8　灰色砂
11　青灰色粘土
12　暗灰色粘土
13・16・19・21・24・29　灰色砂混じり細～中礫
14・15・18・22・23・26　灰色細～中礫・砂
17　灰色細～中礫・砂、青灰色シルトブロック
20　灰色細礫・砂
23・27　灰色細・中礫混じり砂
25　灰色礫
28　灰色砂混じり中礫
(2～24：河川05埋土
25～29：地山)

河川05断面土層図　1/100

区画遺構1基（SX11）がある。

SD07・08　SD07［462-1次・南］は、幅0.5m、深さ0.1～0.2mの溝で、座標北に対し東に斜行する。埋土は灰色砂である。SD08［462-3次］は、幅0.5m・深さ0.2mの溝で、座標北に対し東に斜行する。埋土は暗灰色シルトである。

SK09・10　SK09［464次］は、後述する奈良・平安時代の溝SD28の底面で確認した弥生時代の土坑である。一部を確認したのみであるが、平面は方形とみられる。深さは0.3mで、埋土は黒灰色粘土である。埋土中から弥生時代後期の土器が出土した。SK10［462-1次・南］は、古墳時代の土坑である。平面は径0.9mの円形で、深さは0.6mである。埋土は暗灰色の粘砂や粘質土で、埋土中から土師器高杯が1点出土した。

SX11［462-2次］　濠を伴う区画遺構である。平面は隅丸方形とみられる。南東部分の東西約12m、南北約23mの範囲が残存するが、他の部分は後述する明治時代の池や建物基礎の掘削に伴い破壊されている。区画内は周辺よりも約0.3m低くなっている。濠は、幅2.5～4.0m、区画内の検出面からの深さ0.2～0.3mで、底面は平坦である。埋土は灰色粘土混じりシルト・砂で、わずかに炭粒を含む。埋土中から弥生時代後期から古墳時代中期にかけての土器が出土した。

b. 奈良・平安時代の遺構

河川1条（河川05）、掘立柱塀1条（SA12）、溝1条（SD13）、埋納遺構1基（SX14）がある。

河川05［464次］　発掘区内の南寄りを北東から南西に流れる河川で、東に隣接する市第429-3次調査地（平成11年度）で確認した自然流路01や市第452-1次調査地（平成12年度）で確認した河川05と一連のものである。幅は、市第429-3次調査地で確認した南肩と今回確認した北肩の間で約24m、深さは約1.4mである。埋土は、上から、中世の水田化に伴う整地層である橙褐色砂質シルト層（厚さ0.2m）、灰色砂・シルト層（厚さ0.2m）、灰色砂礫層（厚さ1m）である。灰色砂・シルト層は後述する溝SD13内にまで及ぶ。灰色砂礫層中から、奈良時代から平安時代前半にかけての土器、土製品、瓦等が出土した。

区画遺構SX11（北から）

SA12［462-1次・北］　南北1間（1.8m）の掘立柱列で、発掘区外北へ続く可能性がある。柱穴の形状からこの時期のものと考える。

SD13［464次］　幅13m、深さ0.4mの南北方向の溝である。発掘区外北へ続き、南端は前述の河川05と接続する。底面は北から南にわずかに下る。底面中央には、河川05へ流れる水流により浸蝕されて生じた幅2m、深さ0.4m程度の溝状の部分がある。埋土は、西岸及び東岸沿いが灰褐色粘質土層や茶灰色粘土層、中央部が茶灰色土層や灰褐色粘土層で、断面の形状から後者は前者を掘りさらえた後に堆積したことがわかる。また、溝状に浸蝕された部分には、灰色や暗灰色の粘土層が堆積する。埋土中から奈良～平安時代前半の土器、土製品、瓦が出土した。

SX14［462-1次・南］　埋納遺構で、掘形の下部0.1m分が残存する。東西0.6m、南北0.3mの平面楕円形の掘形内に、東濃地方と似た特徴をもつ土師器長胴甕が口縁部を北に向けて横向きに据えられていた。祭祀に伴う遺構と思われる。

c. 中世以降の遺構

近世の溝2条（SD15・16）、野井戸1基（SE17）、土坑5基（SK18～26）、中・近世の耕作溝、粘土採掘坑群と明治時代の池がある。

SD15・16［462-2次］　南北溝である。SD15は、幅4.2m、深さ0.1m、SD16は、幅1.2m、深さ0.1mである。埋土は灰色シルト・砂層で、前述した弥生・古墳時代の区画遺構SX11の付近にまで拡がっており、これらの遺構が一連の洪水で埋没した可能性がある。肩部近くで層の収束部分がみられないことから、溝の上部は埋没後に削平されて

いると思われる。SD15の埋土中から16世紀後半の陶器片が出土した。

SE17 [464次]　発掘区南西隅で確認した野井戸である。掘形は、一辺約2mの平面方形で、深さ2.5mである。井戸枠の構造は、一辺約1.2mの方形縦板組横桟留である。井戸枠の上面には、径0.1m程度の丸太材を並べて蓋がなされていた。枠内から陶磁器や瓦が出土した。

SK18～24 [462-1次・南]　**・25・26** [462-3次]

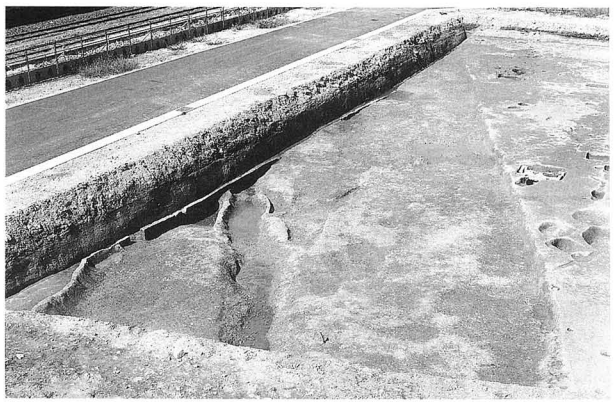
SK18～21・25は、いずれも一辺1m程度の平面隅丸方形で、深さ0.3m程度の土坑である。これらの埋土は灰茶色粘砂や灰色シルトで、SK18・19では12世紀以降の、SK20・21・25では15～17世紀の土器片が出土した。

SK22～24は、いずれも一辺2m程度の平面方形で、深さ0.5m程度の土坑である。これらの埋土は茶灰色土や暗灰色粘砂で、15～17世紀の土器片が出土した。SK26は、平面方形の土坑で、東西1.2m、南北1.5m分を確認した。深さは0.2mである。埋土は灰色シルトで、11世紀以降の土器片が出土した。

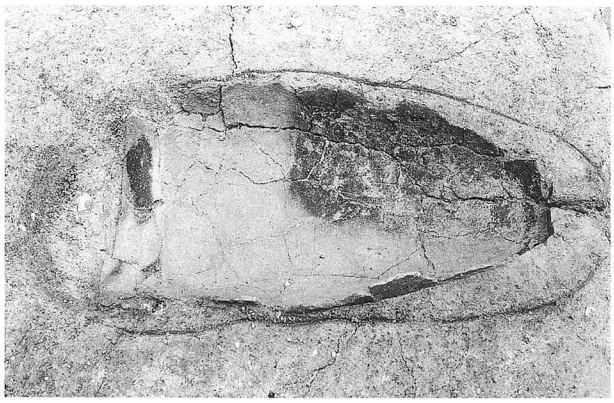
耕作溝 [462-1・-3、464次]　第462-1・-3次発掘区では、大半が南北溝で、座標北に対し、やや東に振れる。東西溝は第462-1次北発掘区でみられる。南北溝の方位は、かつて東隣接地にあった溜池の三条池（1628年築造）の西堤防や旧道と同じである。埋土は、大半が灰色砂混じりシルトで、主に17・18世紀の土器片が出土した。

第464次発掘区では、前述した奈良～平安時代前半の河川05内の橙褐色砂質シルト層上面で確認した。川岸に沿った方向のものが多数あり、地割が河川に制約されていたことを示す。埋土は灰褐色シルトで、12世紀後半頃の土器片が出土した。

粘土採掘坑群 [462-1・南]　発掘区の南西部で検出した。南に隣接する第452-1次調査地（平成12年度）で確認したものと一連である。地山のシルト・粘土を採掘しており、複数の採掘坑が重複する。埋土は、水田耕土や床土と同様の灰褐色や茶灰色の粘砂で、灰色粘土のブロックが混じる。埋土中から10～13世紀と17世紀以降の土器片が出土した。



溝SD13（南から）



埋納遺構SX14（西から）

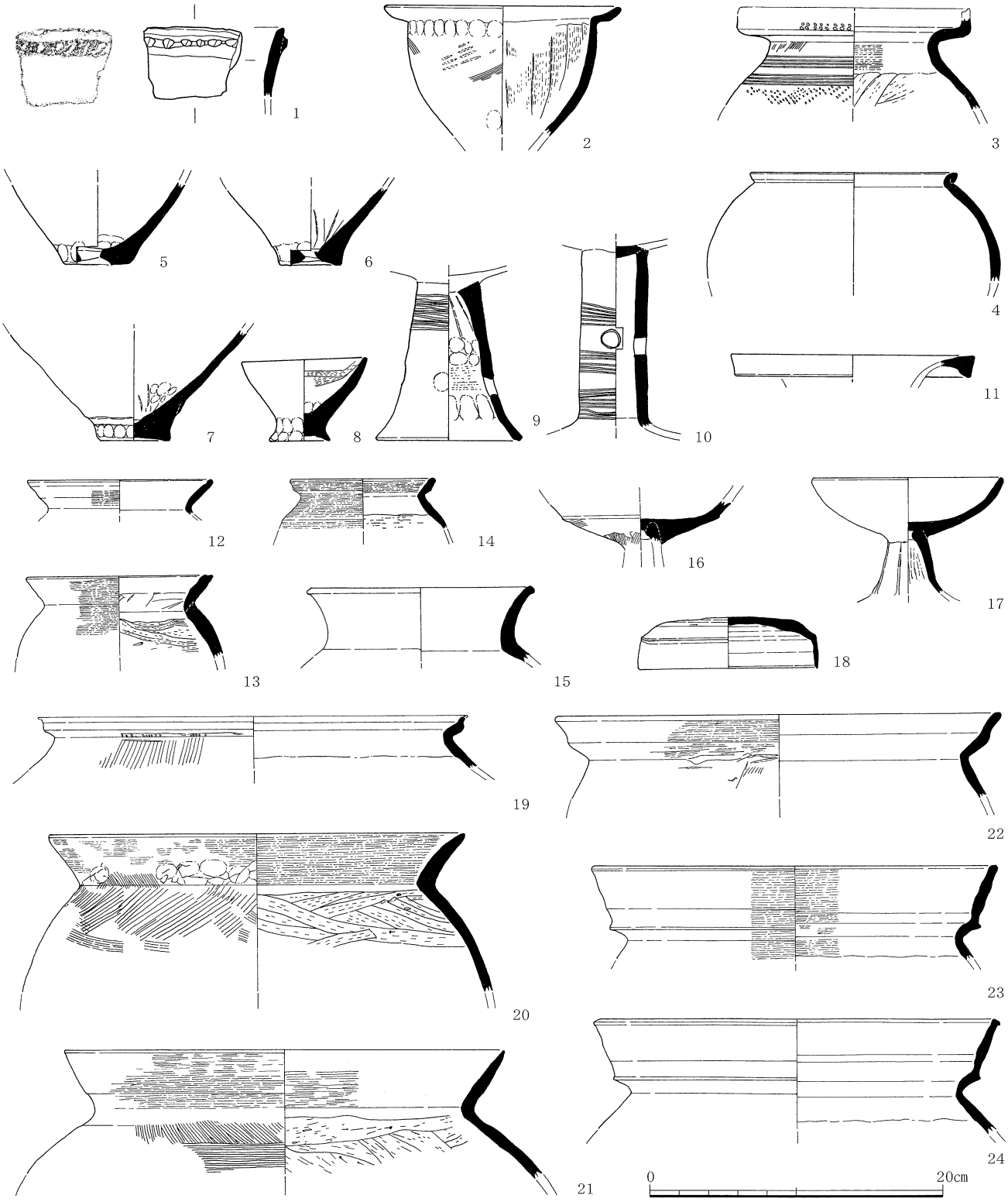
野井戸SE17（東から）

明治時代の池検出状況（北西から）

明治時代の池 [462-2次]　発掘区の北半部で国鉄（現JR）用地の造成で埋め立てられた池の南部分を確認した。当時の地表である水田耕土上面からの深さは約0.8mである。底に堆積した腐植混じりの泥層の厚さも0.1mと薄いことから、水位が低く水溜り状であったことがうかがえる。（安井宣也）

Ⅲ．出土遺物

出土遺物は、4つの発掘区で遺物整理箱75箱分ある。大半が土器・土製品で、他に瓦、木製品、金属製品、銭貨、石器（剥片を含む）がある。



区画遺構SX11出土土器　1/4

A. 土器・土製品

縄紋時代から近世にかけてのものがある。

縄紋時代　弥生・古墳時代の区画遺構SX11の濠内から出土した晩期後葉の船橋式の特徴をもつ深鉢の口縁部の破片1点（1）がある。

弥生時代　区画遺構SX11の濠内から出土した後期の弥生土器がある（2～11）。器種は、甕（2・3）、壺（4）、鉢（5～8）、高杯（9・10）、器台（11）である。甕には、在地のもの（2）の他に近江系のもの（3）がみられる。壺には、無頸壺（4）や長頸壺がある。鉢には、底部に穿孔が施されたもの（5・6）とそうでないもの（7・8）がある。高杯には、脚部の裾が広がるもの（9）と筒状のもの（10）がみられる。ともに多条の櫛描き沈線と透かし穴が施されている。

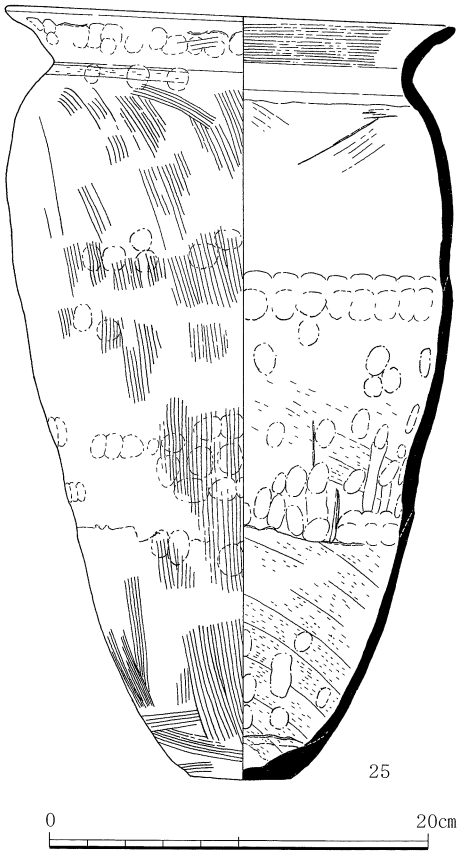
古墳時代　区画遺構SX11の濠内から出土した前期から中期にかけての土器（12～24）がある。器種は、土師器甕（12～14・19～24）・壺（15）・小型丸底壺・高杯（16・17）、須恵器杯蓋（18）である。土師器甕は、口径15cm程度の小型のもの（12～14）と口径25cm程度の大型のもの（19～24）に大別できる。12・13・19・20は、布留式で、口縁端部内面が肥厚しないものが多い。14・22は近江系、19は東海系、23・24は山陰系である。土師器壺には短頸壺（15）がある。土師器高杯には、杯部の立ち上がり部分と底部分の境目に段がみられるもの（16）と丸くおさめるもの（17）がある。須恵器杯蓋（18）は、田辺編年のＴＫ23型式[1]の特徴をもつ。

奈良・平安時代　SX14出土の奈良時代の土師器甕（25）と、溝SD13及び河川05から出土した奈良・平安時代の土器・土製品（26～46）がある。

埋納遺構SX14出土の土師器甕（25）は、東濃地方で出土する長胴甕と形態がよく似ている。口縁部は外反し、端部は丸い。外面には指頭圧痕が残る。内面には横方向のハケ調整が施されている。体部は、肩部付近の径が口径より少し大きく、底部に向かってすぼむ。外面は縦方向のハケ調整が施されている。内面は斜め方向のケズリ整形が施されており、上位と下位は比較的平滑であるが、中位には指頭圧痕が数多く残る。底部は平底で、体部との接合部分の内面には接合痕が残る。外面には横方向のハケ調整が施されている。肩部より下に煤が付着する。

河川05及び溝SD13から出土した土器・土製品には、土師器杯・皿・椀・高杯・壺・甕・鉢・ミニチュア炊飯具（竈・甑）・人面墨書土器、須恵器杯・皿・椀・盤・蓋・壺・甕・平瓶、製塩土器、青磁椀、三彩陶器（奈良三彩）壺、緑釉陶器皿、灰釉陶器皿、土馬がある。

26～44は、河川05出土の土器・土製品である。26～37・40・41は祭祀的な用途が考えられる。26～31は土師器ミニチュア竈、32～35は土馬36・37は、土師器ミニチュア甑。37は底部の穿孔がない。40・41は、土師器壺Bで、外面に指頭圧痕が残り、墨痕がみられるので、人面墨書土器と思われる。38は土師器皿A。口縁部に強いヨコナデ調整があり、外面には指頭圧痕が残る。39は、緑釉陶器の皿で、猿投産とみられる。焼成は須恵質で硬い。土師器（食器）や緑釉陶器は、器形の特徴から9世紀前半から中頃のものと思われる。



埋納遺構SX14出土土器　1/4

1)　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

42～45は、溝SD13から出土した土師器である。42・43は、皿Cで、口縁部にヨコナデ調整が施されている。44は、椀Aで、外面に砂粒が動いた形跡があり、c手法による調整が施されていると思われる。45は壺A、46は甕Cである。食器は、器形の特徴から9世紀前半のものと思われる。

中世　土坑SK18～24・26、耕作溝や粘土採掘坑から出土した11～16世紀の土師器皿・羽釜、15世紀の瓦質土器摺鉢や15～17世紀の白磁等がある。ほとんどが細片で磨耗している。

近世　野井戸SE17、土坑SK23・24・25、耕作溝や粘土採掘坑から出土した17～19世紀の磁器（伊万里椀・蓋）、17世紀の陶器（唐津椀）、18～19世紀の陶器（京・信楽系椀・蓋）、18世紀以降の陶器（堺擂鉢）や土師器等がある。ほとんどが細片で磨耗している。

B.　その他の遺物

瓦　河川05及び溝SD13から出土した奈良・平安時代の丸瓦・平瓦や、野井戸SE17から出土した近世の丸瓦・平瓦がある。

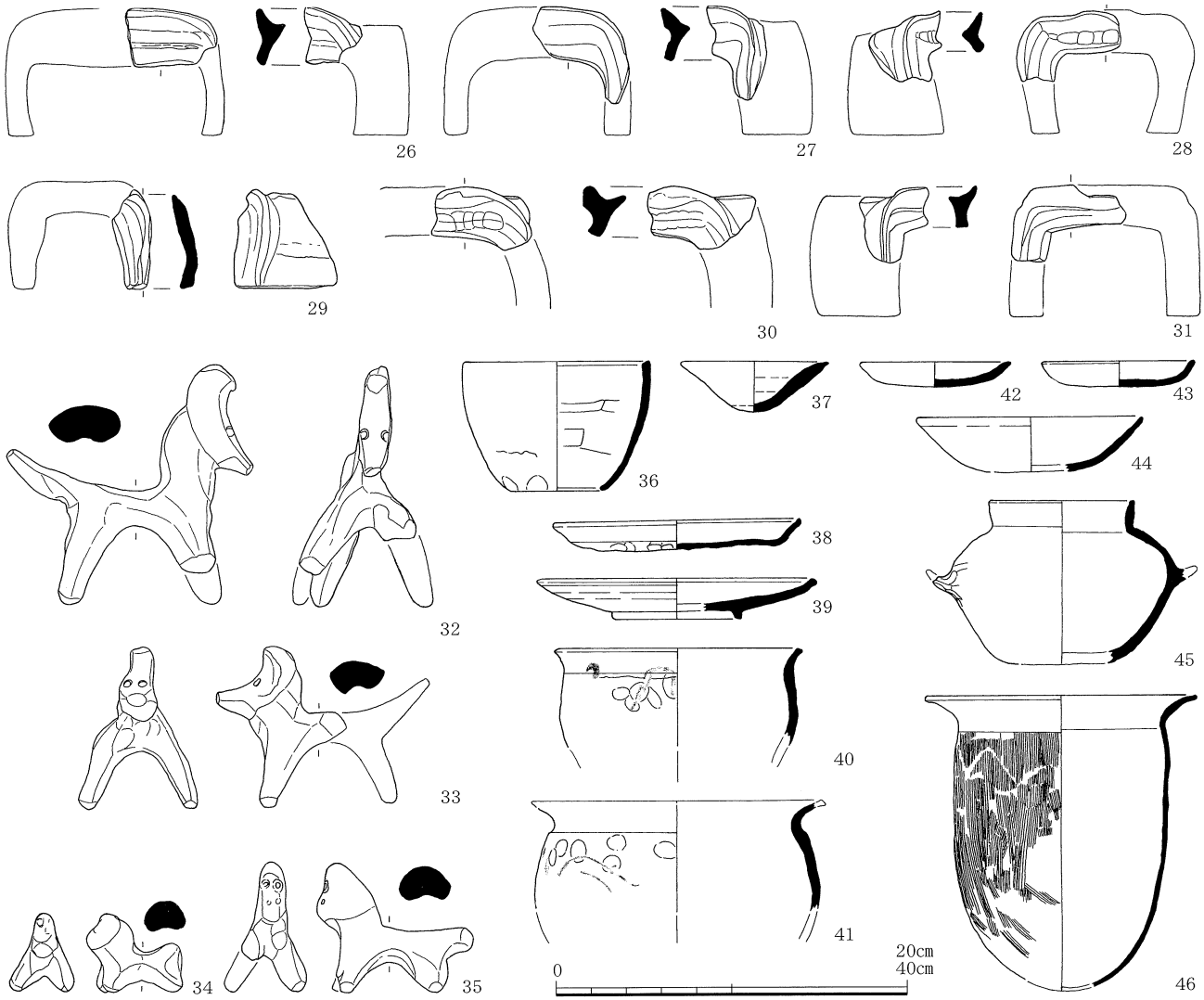
木製品　河川05から出土した円形蓋・皿・薄板と溝SD13から出土した杭・下駄がある。いずれも奈良・平安時代のものである。

石器　地山の上面や溝SD13等から出土したサヌカイト製の石鏃・スクレイパーや加工痕有剥片・剥片がある。　（安井宣也・池田裕英）

Ⅳ.　まとめ

事業地内における左京四条五坊七坪にあたる地域の発掘調査は、今回でほぼ完結した。

今までの発掘調査の結果、地山上面で奈良・平



河川05・溝SD13出土土器・土製品　1/4（45・46は1/8）

安時代の遺構とともに、弥生時代（後期）・古墳時代（中期）と中・近世の遺構を確認した。出土遺物には縄文時代（晩期）のものも含まれていた。

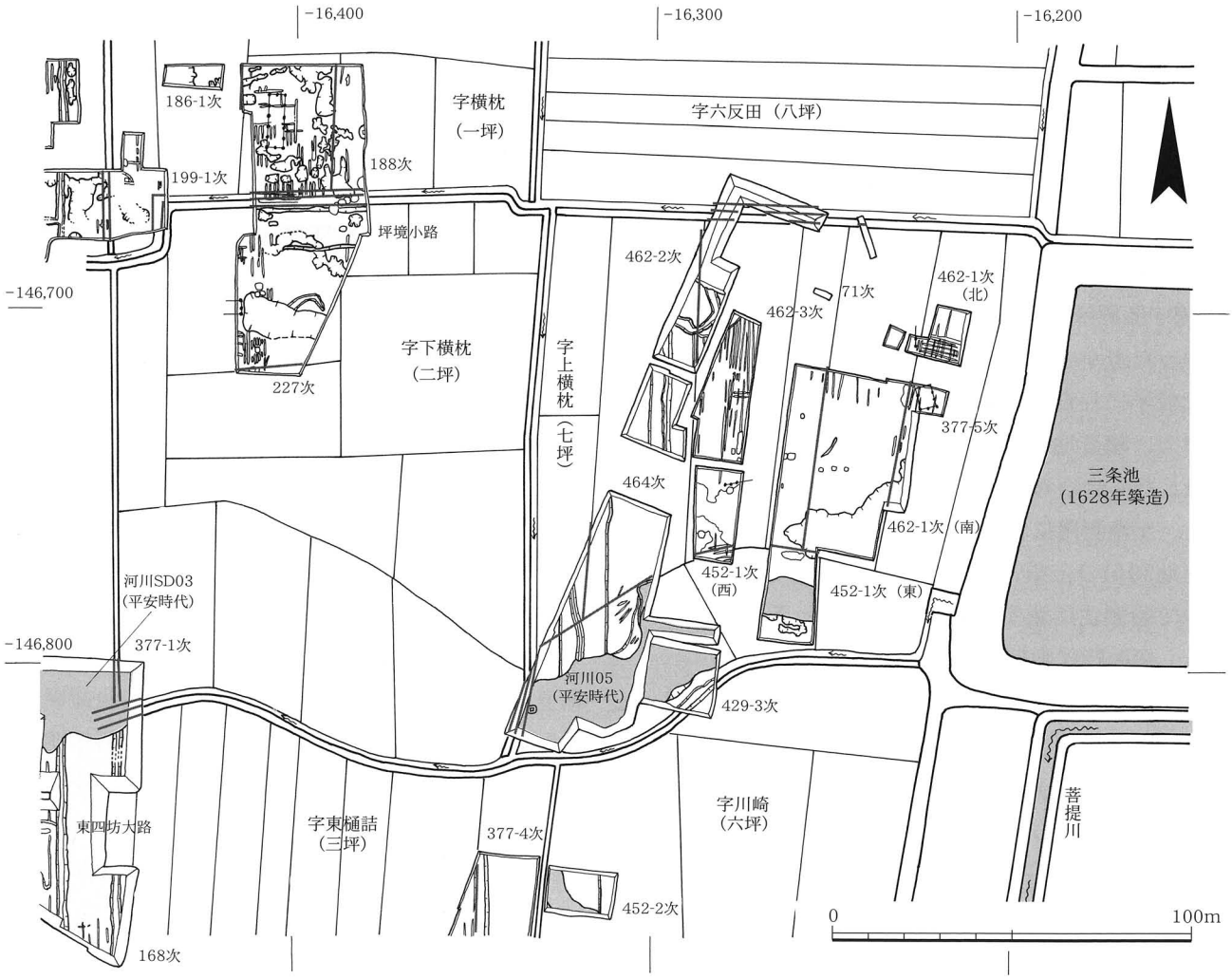
調査地付近は中・近世には三条村という農村で、奈良市史料保存館に保管されている享保6年（1731）の村絵図や明治6年（1873）の地籍図（複写）は、当時の土地利用が把握できる史料である。下の地図は、明治時代の地籍図に記載された水田地割を奈良文化財研究所が作成した1/1,000地形図に照合して展開したものである。今までの発掘調査成果とこの水田地割とを対比することで、調査地内の近世以前の地形と土地利用の変遷について、以下のように把握することができた。

A. 地形について

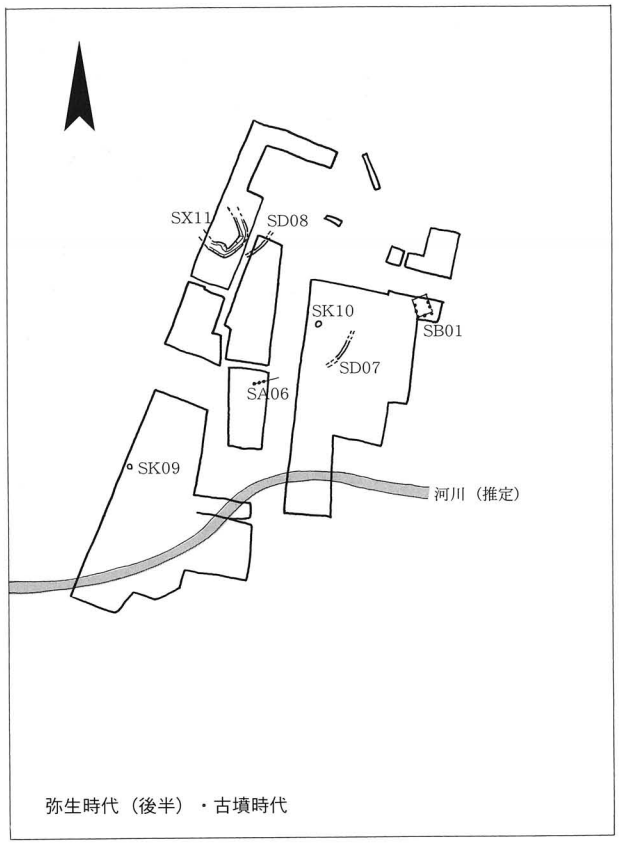
調査地内の層序は、南寄りを除き、基本的には水田耕土・床土の下で地山となり、地山上面では弥生時代後期から近世にかけての遺構が重複して遺存していた。したがって、弥生時代後期には安定した微高地となっており、その後平城京造営や中・近世にかけての耕地化等で繰り返し開発されたことがわかった。

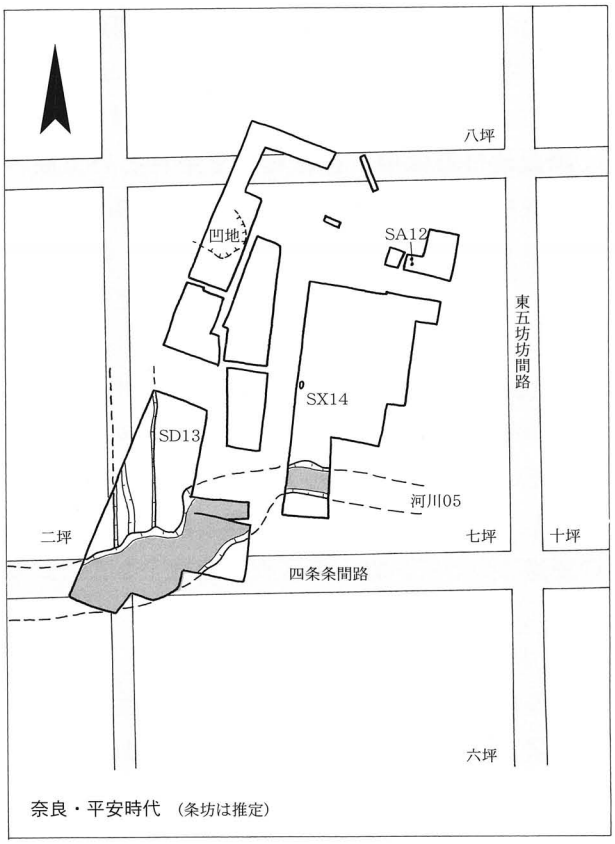
明治時代初期の水田の地割が蛇行した河川の名残を残す調査地の南寄りでは、水田耕土の下に複数の中・近世の床土層があり、その下で河川05の埋土である奈良・平安時代の遺物を含む砂礫層となっていた。河川05については、

a　砂礫は東方の笠置山地を構成する花崗岩が源岩のものが主体で、この山地が上流とみられる。花崗岩は地表に露出すると風化が著しく進む性質があることから、上流では花崗岩の岩盤が露出しており、降雨の際には風化で生じた多量の砂礫が河川に流入して洪水の引き金になっていた可能性がある。



調査地周辺の明治時代初期の水田地割　1/2,000





調査地の景観変遷概念図①　1/2,500

b　蛇行した河川の名残を残す水田の地割は、調査地の西方に続き、その西延長上の市平城京325-3次調査地（平成7年度）、同377-1次調査地（平成9年度）等では、四条条間路上を西流する同様の埋土の河川が確認されている。

といった点から、おそらく奈良時代後半から平安時代前半に左京域の治水を目的として掘削された河川で、調査地付近は既存の自然河川の河道を掘り直したものと考える。

2．土地利用について

土地利用の上限については、区画遺構SX11の濠内で船橋式に属する深鉢片が出土していることから、縄紋時代晩期の可能性がある。

弥生時代後期～古墳時代中期については、集落でみられる溝、土坑があり、出土遺物に甕・鉢・高杯といった日用的な土器がみられることから、集落の一画となっていたと考える。

奈良時代については、平城京の左京四条五坊七坪の一画となっているが、居住地に関連する建物や井戸等の遺構や出土遺物がみられないことから、空閑地であった可能性が高い。条坊に関しては、北を画する七・八坪坪境小路と西を画する二・七坪坪境小路は明治時代の水田に遺存地割が認められることから存在したと考える。

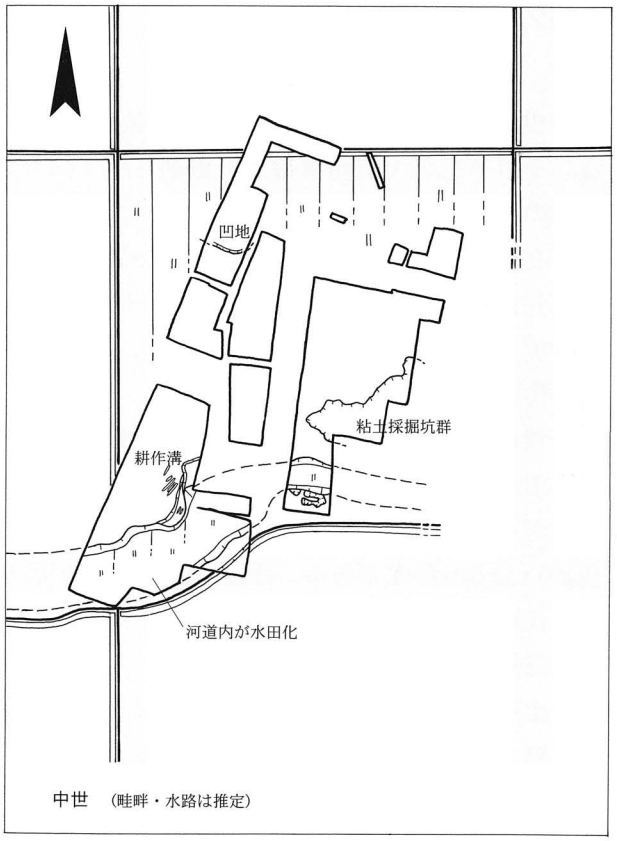
平安時代についても、居住地に関連する遺構や出土遺物がみられないことから、空閑地であった可能性が高い。奈良時代の二・七坪坪境小路の東側溝の想定位置で確認した溝SD13は、埋土や底面の浸蝕状態を考慮すれば、前述の河川05と接続する平安時代の水路で、東側溝を踏襲したものと考える。

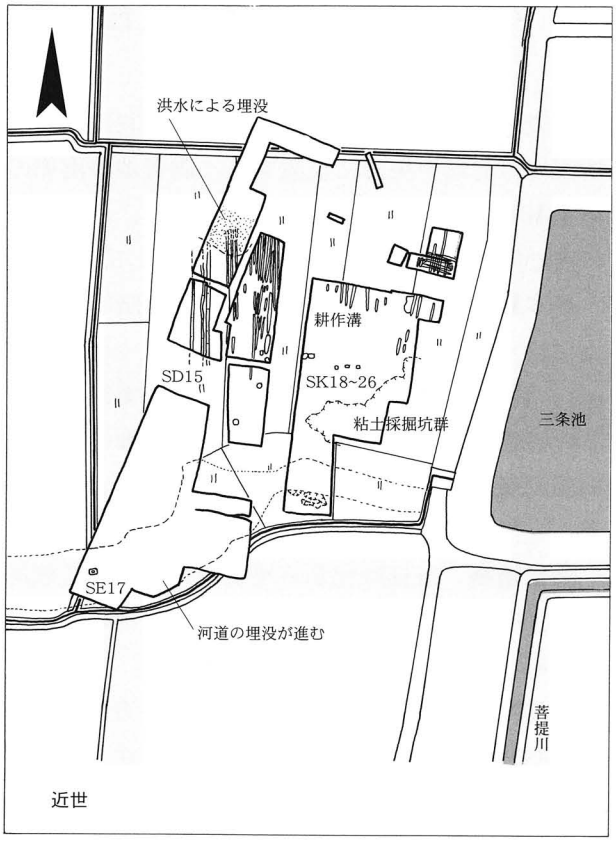
中・近世については、土坑・耕作溝・粘土採掘坑といった耕地でみられる遺構を確認したことから、耕地として利用されていたと考える。上限は粘土採掘坑の埋土の出土遺物から11～12世紀頃と推測する。耕地の形状は近世の改変のため不明であるが、明治時代初期の水田の地割や土層を勘案すれば、

a　北及び西の字界となっている大畦畔が条坊の遺存地割である。

b　南北に長い短冊状の耕地が並ぶ。

c　南端の耕地は河川05の河道の名残を残す。





調査地の景観変遷概念図②　1/2,500

といった様相を想定する。

近世についても、確認した遺構の特徴が中世と同様で、耕地として利用されていたと考える。広く分布する耕作溝の方向が明治時代初期の水田の畦畔と方向がほぼ一致することから、明治時代初期の耕地の様相と大差がないと考える。中世に成立した地割を基本的に踏襲している可能性があり、土地制度や水利慣行も同様に中世に成立したものが近世に踏襲されている可能性がある。

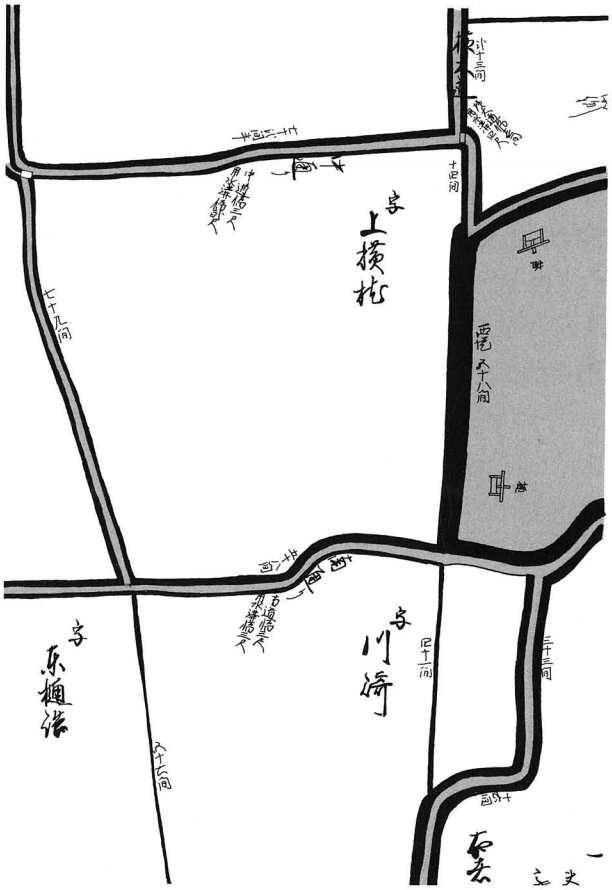
C. 今後の展望と課題

これまでの一連の発掘調査の結果、弥生時代後期から近世までの地域史を明らかにするための重要な資料を得ることができた。

弥生時代（後期）・古墳時代（中期）の集落については、東に隣接する同時期の杉ヶ町遺跡も含めて動向を把握する必要がある。

奈良・平安時代の左京四条五坊七坪については、空閑地であった要因を究明する必要がある。

中・近世の耕地については、三条村の営農を知る手がかりとなるため、周辺での調査事例の増加と再検討が望まれる。　（安井宣也）



享保16年（1731）の村絵図（部分、縮小トレース）

(2) 平城京跡（左京四条五坊五坪）の調査　第462 - 4次

調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条五坊五坪の北端中央部に位置する。調査地の南側の市第408-3次調査（平成10年度）では、東西方向の溝と同方向の時期不明の河川を検出している。

基本層序　上から造成土（1.2m）、暗灰色粘質土（耕土：0.1m）、灰色粘質土（床土：0.1～0.3m）、淡灰色粘質土（0.1m）と続き、黄褐色シルトの無遺物層にいたる。遺構の存する面は黄褐色シルト層上面であり、その標高は概ね65.2mである。

検出遺構　奈良時代から平安時代にかけての河川と、中世・近世の粘土採掘坑、時期不明の土坑である。

河川08　発掘区東端で検出した南北方向の河川である。西岸から1.5mまでを検出したが、東岸は発掘区外になり、幅は不明である。弥生時代の土器片が1点、奈良・平安時代の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

SK09　発掘区中央東部で検出した土坑である。後述する粘土採掘坑の底面で確認した。平面円形、直径0.6m、深さ0.4mで底面には凹凸がある。遺物が出土せず、時期は不明である。埋土が上部の粘土採掘坑のものと似ていることから、粘土採掘時の試し掘りの可能性がある。

中世の粘土採掘坑　発掘区全体で検出している。それぞれの土坑が重複して掘削されており、全体の規模・形状がわかるものはないが、残存している部分から推定すると、一辺1.5～2.5mの平面隅丸方形、または不整方形で、深さが0.5～0.8m程度のものである。平安時代の瓦器、鎌倉・室町時代の土師器が少量と瓦が出土した。

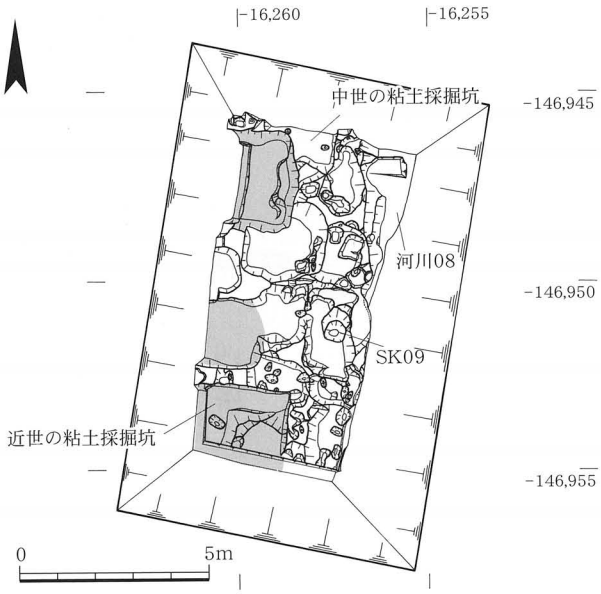
近世の粘土採掘坑　発掘区の西半で検出した。平面形は正方形に近い隅丸方形で、中世のものより隅が角張る傾向にある。規模も若干大きく、一辺2.0～2.5m程度である。深さは0.5～0.8mである。江戸時代の土師器、信楽・伊万里・唐津などの陶磁器、瓦質土器と瓦が出土した。

出土遺物　全体で遺物整理箱3箱分出土した。

土器・土製品には、弥生時代の土器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・製塩土器・土馬（1点）、平安時代の瓦器、鎌倉・室町時代の土師器、江戸時代の土師器・瓦質土器・国産陶磁器（信楽・伊万里・唐津）、中国産（明代）の白磁がある。

丸・平瓦は、3点が中世粘土採掘坑から出土し、他は近世の粘土採掘坑から出土した。また、平安時代以降の巴紋の軒丸瓦が2点出土した。

他に安山岩の剥片1点、板状木製品1点が出土した。　（久保邦江）



第462-4次調査　遺構平面図　1/200

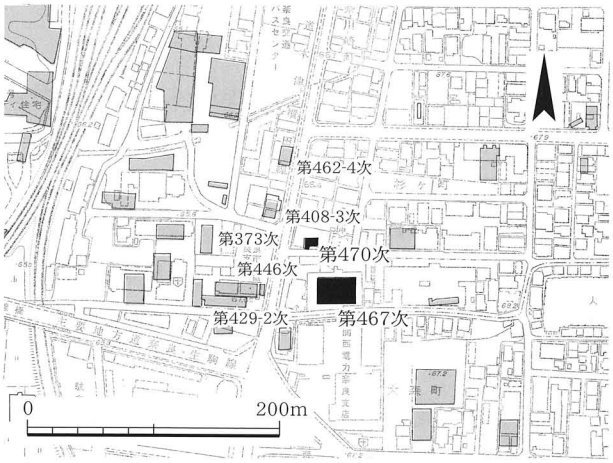
第462-4次調査　発掘区全景（北から）

3. 平城京跡（左京四条五坊五坪）の調査　第467・470次

遺　跡　名	調査次数	事業名	届　出　者	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
平城京跡 左京四条五坊五坪	HJ467	店舗建設	奈良トヨタ自動車（株）	杉ケ町30	平成13.　9.13 ～ 11.　8	636㎡	山前智敬
	HJ470		（株） トヨタレンタリース奈良	杉ケ町31	平成13. 10.20 ～ 10. 30	88㎡	武田和哉

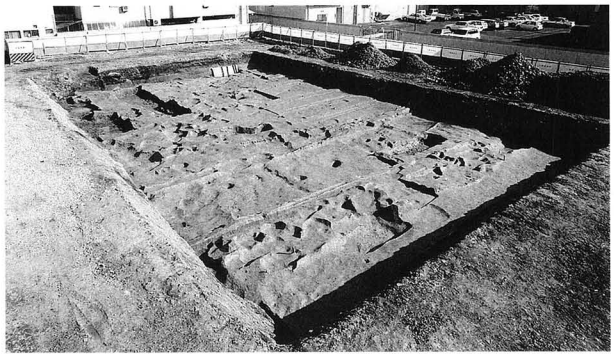
平城京左京（外京）四条五坊五坪では、平成13年度に2件の調査を実施した。調査地は、100mほど離れているが、あわせて報告する。

同坪内では、過去8度の調査を実施している（市第268-2・-3次：平成4年度、市第373次：平成9年度、市第408-2・-3次：平成10年度、市第429-2次：平成11年度、市第446次：平成12年度、市第462-4次：本書46頁）。これらの調査では、縄紋時代の土坑、弥生後期末～古墳時代初頭の河川（市第429-2次）、奈良時代の四・五坪坪境小路、同西側溝、中世以降の河川（市第268-2・-3次）、

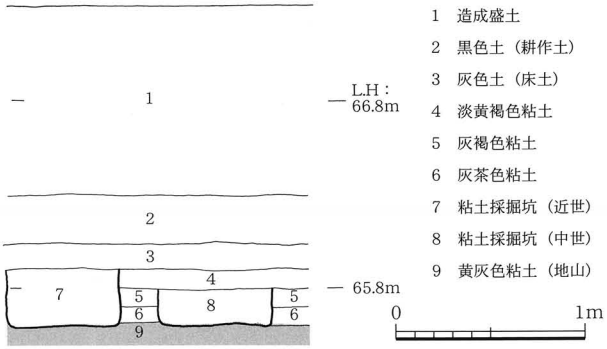


第467・470次調査　発掘区位置図　1/6,000

第467次調査　発掘区　全景（西から）



第467次調査　発掘区　全景（北西から）



第467次調査　基本土層模式図　1/40

中・近世の粘土採掘坑（市第462-4次）を検出している。

第467次調査　第467次調査では、縄紋および弥生時代の遺構の確認、および奈良時代の五坪内の把握、中・近世の河川、粘土採掘坑の確認を目的とした。また、発掘区南では、四条大路北側溝が想定され、その確認にも重点を置いた。

発掘区内の基本的な層序は、造成盛土、黒色土、灰色土、淡黄褐色粘土、灰褐色粘土と続き、地表下約1.7mで黄灰色粘土の地山に至る。地山上面の標高は概ね65.6mである。土層観察から、中世の粘土採掘坑群は灰褐色粘土の、近世の粘土採掘坑群は淡黄褐色粘土の、それぞれ上面に存していたと考えられるが、遺構検出は地山上面で行った。

検出遺構には、時期不明の土坑、中世の粘土採掘坑群、溝状遺構、近世の粘土採掘坑群がある。

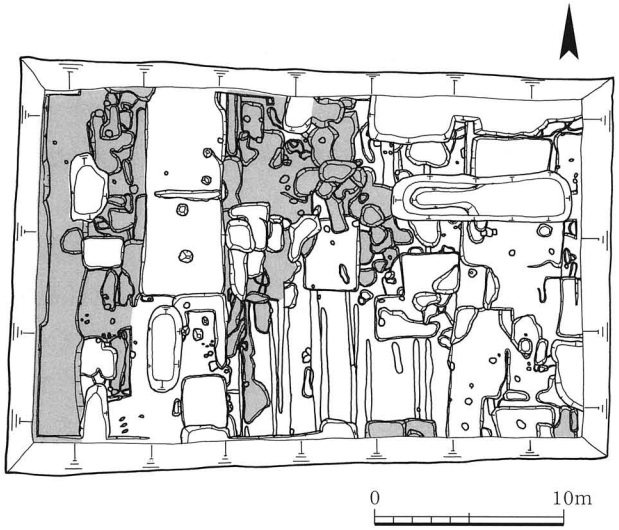
土坑SK01は、発掘区中央で検出した。掘形の平面は不整形で、東西約1.6m、南北約2.5m、深さは約0.5mである。埋土から弥生土器、須恵器などが出土した。垂直に掘りこまれ、湧水があることから、井戸の可能性も考えられるが、枠がみられないので土坑と判断した。須恵器は小片のため、時期が特定できない。

中世の遺構には、粘土採掘坑（SX02～05）群および溝状の落ち込み（SD06）がある。

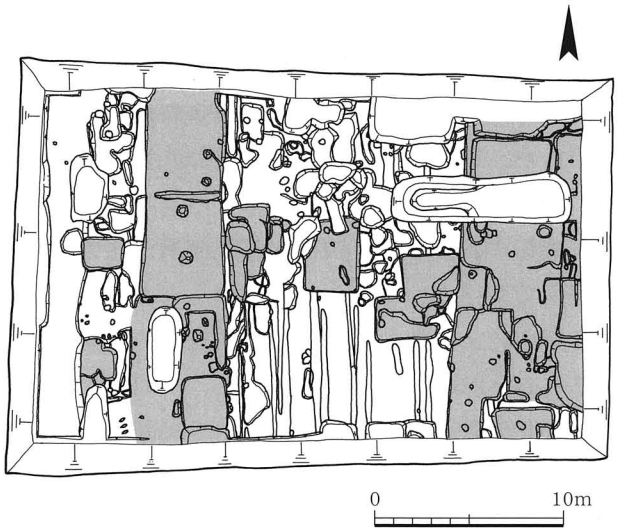
粘土採掘坑（SX02～05）の深さは0.1～0.5mで、一様でない。SX02の埋土は淡灰茶色粘土で、弥生土器、奈良時代の須恵器・軒丸瓦（型式不明）、13世紀前半～14世紀の土師器、13世紀中頃の瓦器、サヌカイト片などが出土した。SX03の埋土は淡灰茶色粘土で、弥生土器、奈良時代の須恵器、13世紀の土師器、13世紀末の瓦器などが出土した。SX04の埋土は明黄灰色粘質土で、13世紀の瓦器などが出土した。SX05の埋土は灰茶色粘土で、奈良時代の須恵器、15世紀の土師器・瓦質土器などが出土した。

SD06は溝状の遺構。深さは約0.4mである。埋土は淡灰褐色粘土、灰色粗砂、青灰色粘土、暗灰色粘土で、奈良時代の須恵器、12世紀の土師器、12世紀後半～13世紀初の瓦器、15世紀末～16世紀初の土師器・瓦質土器・陶器（信楽）、16世紀後半の漳州窯系染付磁器、中世の軒丸瓦（2点）、鞴の羽口などが出土した。埋土に砂層があるので、水が流れた可能性も考えられる。

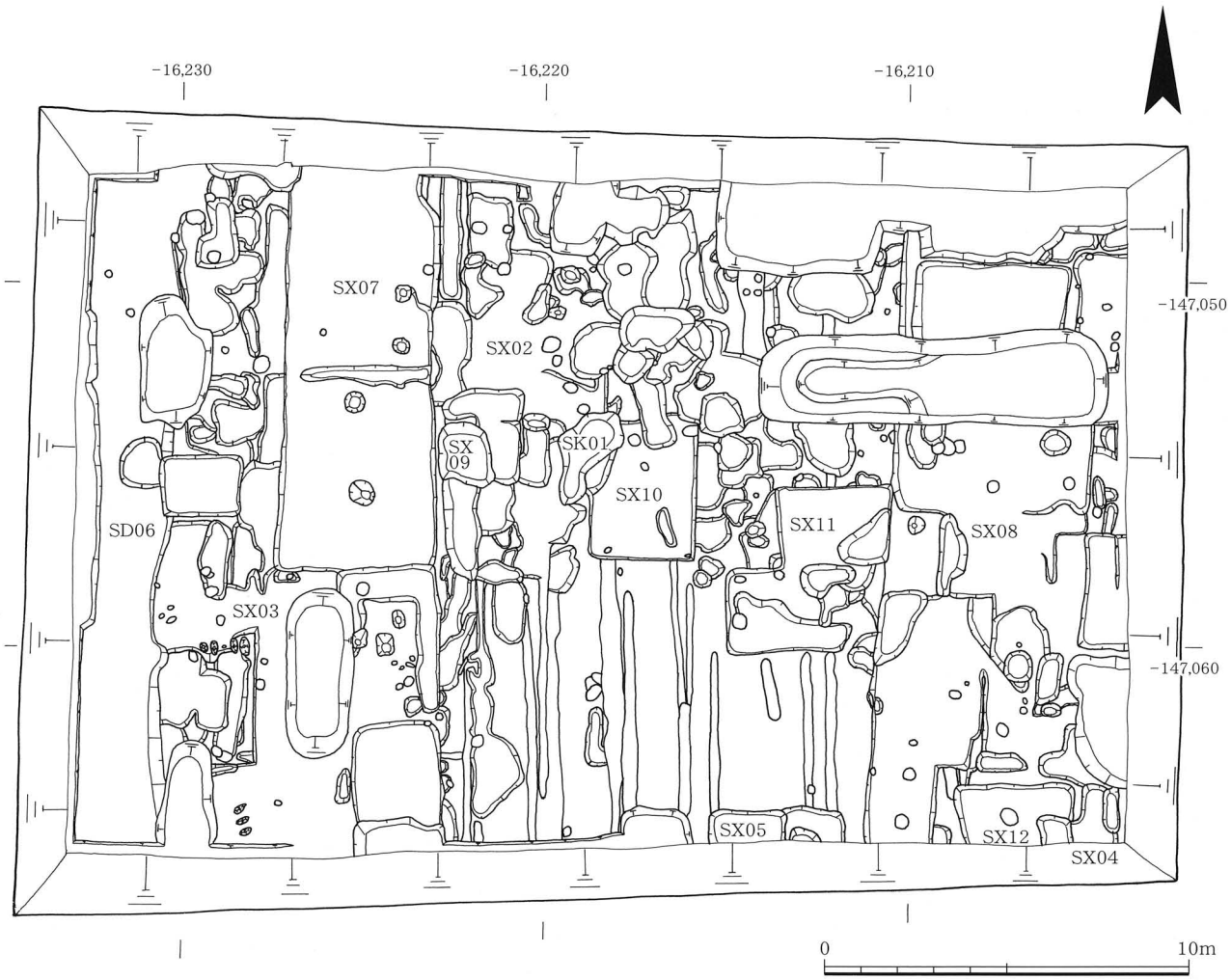
近世の遺構には、粘土採掘坑（SX07～12）群がある。深さは0.1～0.6mで、一様でない。SX07の埋土は暗灰色粘土で、奈良時代の須恵器、17世紀前半の土師器・唐津窯陶器、泥塔などが出土した。掘形底には直径0.3m、深さ0.4m程の穴が数個ある。粘土の厚さを調べるために掘削したものと思われる。SX08の埋土は淡灰褐色粘土、暗灰色粘土で、奈良時代の須恵器、17世紀の信楽窯陶器・土師器・肥前系磁器・京焼系陶器、17世紀中頃の唐津窯陶器・肥前系磁器などが出土した。SX09の埋土は灰茶褐色粘土、暗灰色粘土で、奈良時代の須恵器、13世紀の瓦器、17世紀の土師器、信楽窯陶器・肥前系磁器、17世紀後半の土師器炮烙・唐津窯陶器、鉄滓などが出土した。SX10の埋土は灰色粘土で、17世紀後半～18世紀初の肥前系磁器、18世紀初の土師器などが出土した。SX11の埋土は灰色粘土、暗灰色粘土で、奈良時代の須恵器、17世紀後半～18世紀初の肥前系磁器、



第467次調査　中世の遺構（網部）平面図　1/400



第467次調査　近世の遺構（網部）平面図　1/400



第467次調査　遺構平面図　1/200

唐津窯陶器、18世紀前半の肥前系磁器、土師器などが出土した。SX12の埋土は灰茶褐色粘土で、17世紀後半～18世紀初の肥前系磁器が出土した。

今回の調査区内には、縄紋・弥生時代の遺構はなかった。また、平城京四条大路の北側溝が想定される場所であるが、側溝にあたる遺構はなかった。周辺の調査でも、四条大路北側溝が想定される場所で検出されていないことから考えて、何らかの要因により四条大路は想定位置よりも南側にあるものと思われる。（山前智敬）

第470次調査　調査地は、第467次調査の北西に位置しており、坪の中央からやや南東へ寄った場所に該当している。

本調査では、周辺での調査成果を踏まえつつ、粘土採掘坑の有無や、地下遺構の様相の把握などを目的として、88㎡の発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、上から順に、まず造成土（約0.5m）があり、次いで黒灰色粘土（耕土・約0.2m）、暗灰色粘土（約0.1m）、暗茶褐色粘土（約0.4m）、暗灰色粘土（約0.1m）、暗灰色粘土（約0.2m）、暗茶灰色土（0.1～0.2m）、暗灰色粘砂（0.2～0.3m）淡黄灰色粘砂（約0.1m）と続く。それ以下は、暗褐色粘土や淡黄灰色粗砂、暗褐色粘土（腐植物含む）、灰色砂礫等が複雑に堆積している。それらの下層にある地山は、青灰色粘土（礫含む）または粗砂で、地表下約2.2～2.4m付近でその上面に至る。発掘区内で確認した地山上面の標高は、64.4～64.6mである。

検出した遺構には、古代の河川1条と時期不明の護岸施設がある。以下にその概略を記す。

河川13は、発掘区西辺で検出した。発掘区内ではやや蛇行した様相を呈している。溝底の高低差はあまりなく、流れていた方向を推測するのは難しいが、周囲の地形などを考慮すると、南流していたものと推測される。また、様相からみて人為的に掘削された溝の可能性もある。

規模は、発掘区西側中央付近では、幅約2.2m、深さは約0.5mである。埋土は主として灰色砂と暗灰色粘土の互層からなる。埋土中には、多くの腐植物が含まれており、平安時代初期の黒色土器や土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、古代の須恵器や瓦片などが出土した。さらに、西岸の比較的浅い場所から、土馬が1点出土している。

SX14は、発掘区の中央北辺で検出した護岸施設で、木杭を多数検出した。これらの木杭を、杭の打設方法に着目して観察すると、概ね3つのグループに大別できる。すなわち、A-垂直方向に打ち込んでいるグループと、B-斜め方向に打ち込んでいるグループ、そして、C-横に渡した板材を押さえるような形で配置されているグループである。

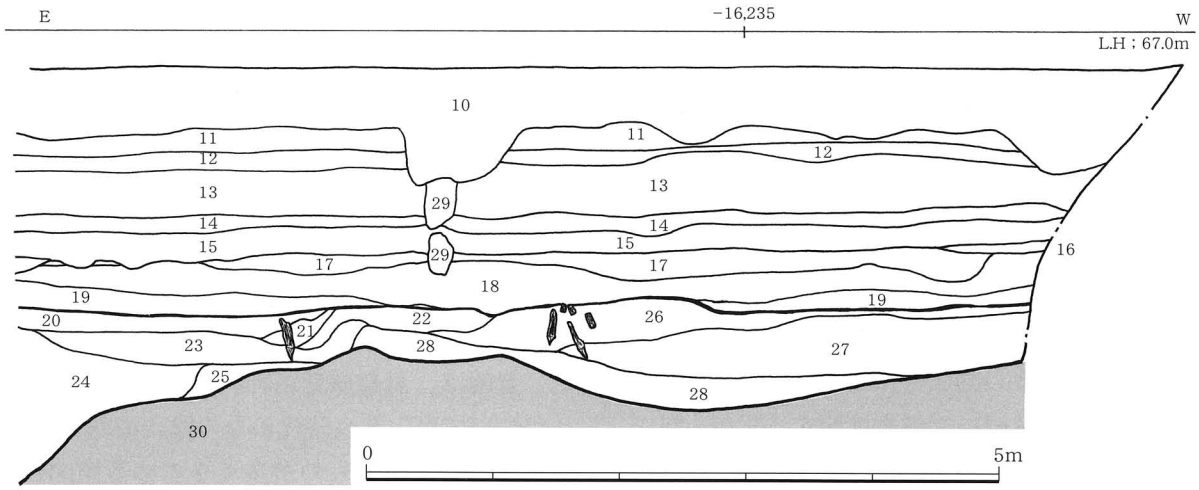
Aの垂直方向に打ち込んだ杭のグループは、木杭全体の中では、東寄りの場所に位置している。概ね東西1m程度の範囲に南北の帯状に、集中して打ち込まれている様相が見受けられる。そして北側と南側は発掘区外へと続いていく模様である。残存している杭の径は、5～10cm程度で、いずれも先を尖らせている。

Bの斜めに打ち込んだ杭のグループは、全体ではSX14のほぼ中央に位置しているが、一部は東側の垂直に打ち込んだAグループの範囲内にも拡がっている。杭はいずれも西から東に向かって斜めに打ち込まれており、こちらの杭もAと同様に径5～10cmで、先を尖らせたものが多くを占める。

Cの横に渡した板材を押さえる杭のグループは、SX14全体の中では、西側に位置している。長さ1～2m、幅15cm、厚さ2～3cm程度の板材5本と、それを押さえるように垂直方向に打ち込まれている杭より構成されている。板材の配置には、特に顕著な傾向は見て取れないが、SX14の中央寄りに位置する1本だけは、ほぼ南北方向に配置されている。更に、最も西端にある板材は、河川13の埋土より上層にあり、それよりも新しい時期のものと考えられる。

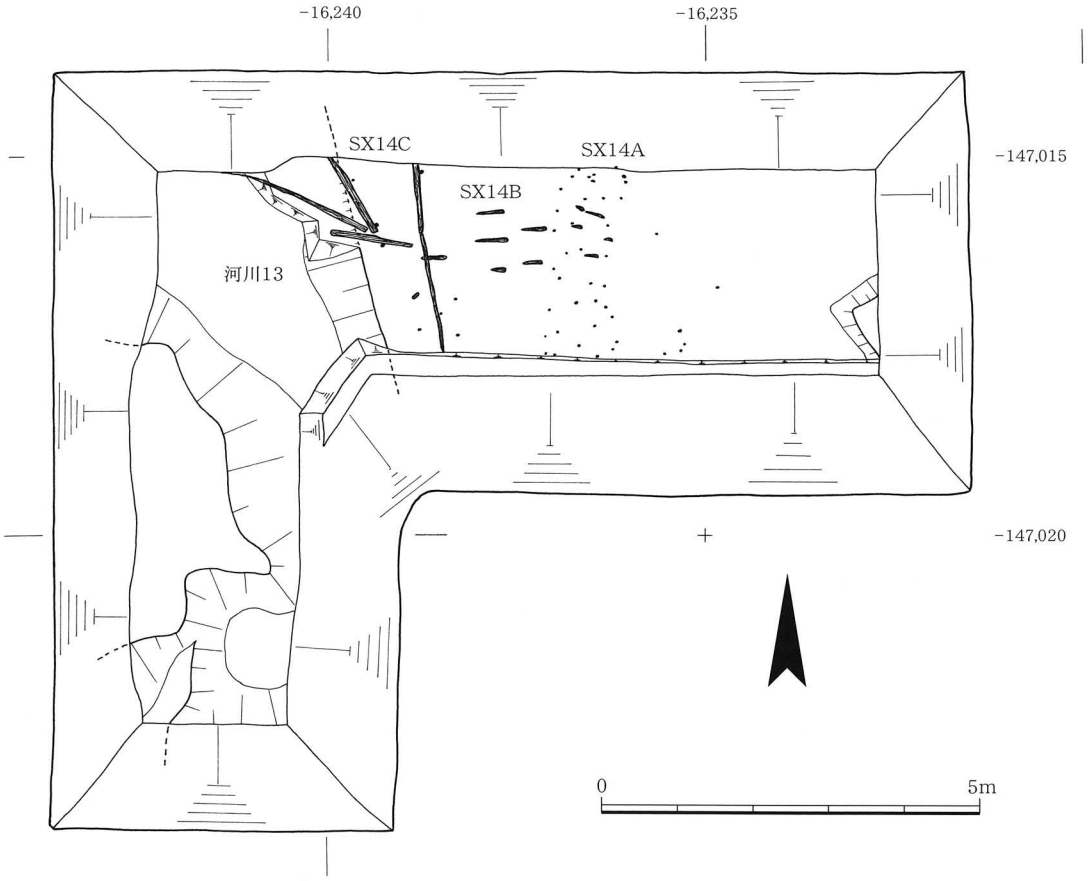
これらの木杭群A・B・Cは、いずれも、暗褐色土もしくは暗褐色粘土の下面（地面下約1.9m、標高約64.8m付近）から打ち込まれているが、杭の先端は地山層にまでは到達していないことが、土層観察の結果から判明している。

このような各木杭群の性格については、発掘区内の層相や様相から推測するかぎりでは、堤防の護岸や補強材のような、治水目的で設置されたものの残存部分とみられる。



10　造成盛土
11　黒灰色粘土（耕土）
12　暗灰色粘土
13　暗茶褐色粘土
14　暗灰色粘土
15　暗灰色粘土（やや淡い）
16　茶灰色砂質土
17　暗茶灰色土
18　暗灰色粘砂
19　淡黄灰色細砂
20　暗褐色粘土
21　暗灰色粘土
22　黒灰色粘土、暗灰色粘砂（互層）
23　暗褐色粘土（腐植物を含む）
24　灰色砂礫（河川13埋土）
25　灰色砂礫
26　暗褐色土（腐植物を含む）
27　淡黄灰色粗砂
28　灰色砂礫
29　暗灰色土
30　青灰色礫または粗砂（地山）

第470次調査　発掘区北壁土層図　1/60



第470次調査　遺構平面図　1/100